山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第191集

塩瀬下原遺跡

（第４次調査）

桂川流域下水道終末処理場建設に伴う発掘調査報告書

２００１．３

山梨県教育委員会
山梨県土木部

正誤表

	誤	正
例言	長岡文典	長岡文紀
	山本典之	山本典幸
報告書抄録	渥美釜	渥美窯

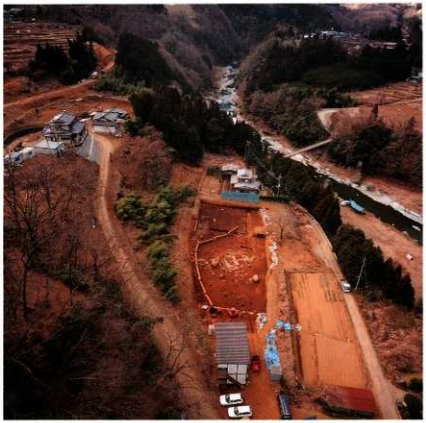
塩瀬下原遺跡

(第4次調査)

桂川流域下水道終末処理場建設に伴う発掘調査報告書

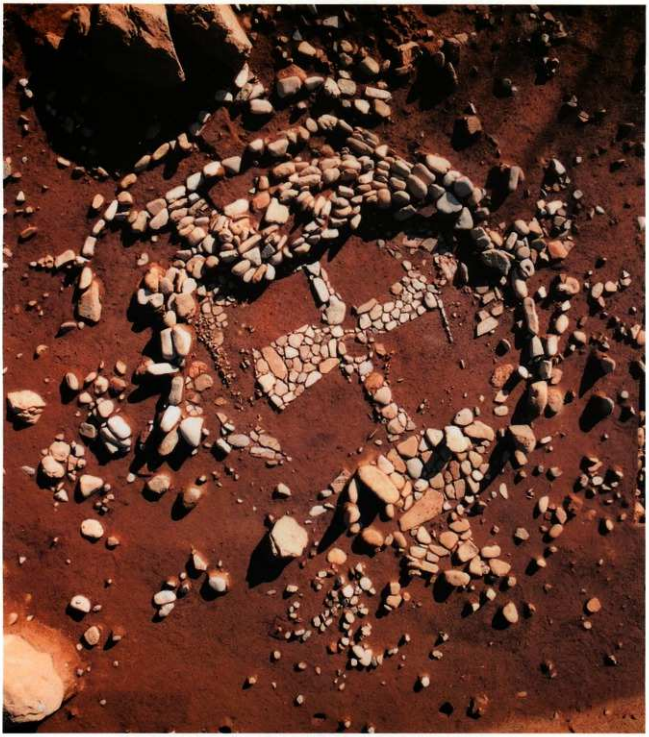
2001. 3

山梨県教育委員会
山梨県土木部



1．塩瀬下原遺跡全景（北東から）

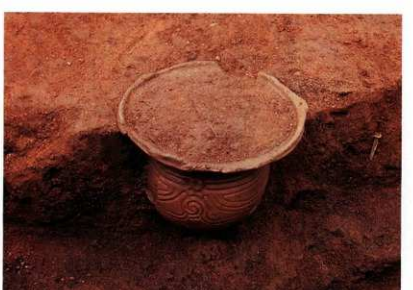
2．塩瀬下原遺跡全景（南西から）



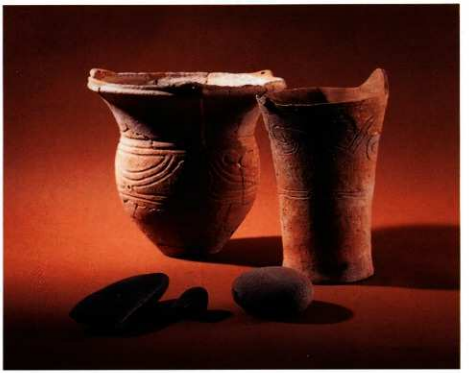
３．１号敷石住居跡　空中撮影１回目

4．1 号敷石住居跡　空中撮影 2 回目

5．1号敷石住居下　焼土遺構1



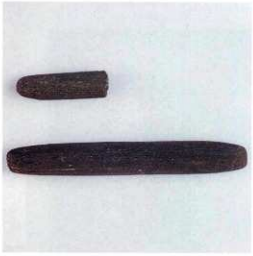
6．1号敷石住居下　焼土遺構2



7．1 号敷石住居下　焼土遺構出土遺物

8．1 住下焼土遺構 1

9．1 住下焼土遺構 2



10. 1 号敷石住居出土遺物

11. 環礫方形配石出土遺物

12. 9 号配石出土遺物

13. 9 号配石出土遺物

14. 25号焼土出土遺物

序

本書は、山梨県埋蔵文化財センターが平成10年度（1998）に調査を行った、塩瀬下原遺跡（第４次）の発掘調査報告書であります。この調査は、県の土木部が実施する山梨県東部地域の下水道設置事業の一部である下水道終末処理場建設に先立つものであります。

塩瀬下原遺跡は山梨県大月市梁川町に所在しています。大月市の遺跡分布は河岸段丘の発達した相模川（通称、桂川）とその支流に沿って点在していることが知られていますが、この地域の遺跡はほとんど知られていませんでした。しかし、平成５年～６年にかけて行われた試掘調査によって約20,000㎡にわたる縄文時代中期から後期の遺跡が確認されて、平成７年（1995）から発掘調査が行われる事になりました。その結果、第１次～３次までの調査から縄文時代中期末から後期にかけての集落遺跡が発見されました。中でも、石皿が多数出土したことで石器製作跡の可能性が注目されています。

今回調査された第４次調査においては、縄文時代から平安時代の遺構・遺物が発見されました。縄文時代では、後期前半の大型の柄鏡形敷石住居跡が１軒と配石遺構群が、また平安時代では、焼土遺構と配石遺構・集石遺構群などが発見されています。特に、敷石住居跡は、炉跡を中心として十字型に石が敷かれるという全国的にも極めて珍しい発見となりました。また、この敷石住居跡を構成している各要素も、県内初の発見で注目されています。大月市・都留市・富士吉田市を含めた南北都留地域は、敷石住居跡を検出する遺跡の分布が目立つ地域であり、敷石住居跡の発生の問題に大きく関わっております。そのような状況下での今回の発見は、県内外の研究者の間から注目されることは必至であり、そのためにも、事実をありのままに報告することが重要であると考えています。

最後に、今回の発掘調査にあたって御協力いただいた関係者、関係機関並びに調査・整理作業に従事された多くの方々にお礼を申しあげる次第であります。

2001年３月

山梨県埋蔵文化財センター
所　長　大　塚　初　重

例　言

1　本書は、平成10年度（1998）に桂川流域下水道終末処理場建設に先立ち発掘調査された、山梨県大月市梁川町塩瀬下原遺跡（第4次調査）の発掘調査報告書である。
2　調査は山梨県教育委員会が県土木部より委託され、山梨県埋蔵文化財センターで実施した。
3　発掘調査及び出土品の整理は埋蔵文化財センターで行い、笠原みゆき・伊藤伸一が担当した。
4　本書の編集は笠原が行った。なお、第3章第1節出土遺物縄文時代の土器については考古博物館学芸員三田村美彦が、第3章第4節・第4章第1節については埋蔵文化財センター次長田代孝がそれぞれ執筆した。
5　調査区内の杭打ち、及び標高杭の設定は東雲測量がおこなった。
6　遺構の土壌分析と報告は株式会社パリノ・サーヴェイが、黒曜石の産地同定は沼津高等専門学校の望月明彦氏が行った。石器の実測・トレースの一部は株式会社アルカに、鉄製品の保存処理は帝京大学山梨文化財研究所に委託した。
7　写真撮影は、遺構については笠原・伊藤が、遺物については日本写真家協会の塚原明夫氏が行った。
8　石器鑑定は保坂康夫氏に指示を受けながら笠原が、石材鑑定は河西学氏による。
9　1号敷石住居跡内環礫方形配石遺構の被熱状態の分析については、帝京科学大学、中條利一郎教授の協力を得た。
10　本報告書にかかる出土品及び記録図面・写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
11　発掘調査および整理作業にあたっては以下の諸氏・諸機関に御指導・御協力を賜った。記して謝意を表する。
秋山圭子・石井寛・閻間俊明・岡野秀典・河西学・樽原功一・小西直樹・小林達夫・小林安典・小宮山隆・佐野隆・杉本正文・中沢道彦・長岡文典・奈良泰史・林部光・長谷川孟・福田正人・堀江武史・松本司・宝伏徹・村松佳幸・竹田眞人・山下孝司・山本暉久・山本典之（五十音順）大月市教育委員会・大月市文化財審議委員会・上野原町文化財審議委員会

凡　例

1　遺跡全体におけるX・Y数値は、平面直角座標第Ⅷ系（原点：北緯36度00分00秒、東経138度30分00秒）に基づく各座標数値である。各遺構の平面図の北を示す方位は、すべて座標北をさす。
2　掲載した図面の縮尺は各図面ごとに記してある。
3　遺構掃図中の表記は次のとおりである。
a掃図中の断面図脇にある数値は標高を示す。
b掃図中の土坑・焼土遺構のスクリントーンは炭化材の広がりを示す。
4　土色（覆土）の説明には「標準土色帳（1994年版）」（農林省水産技術会議事務所監修・財団法人日本色彩研究所監修）を参考に記述した。
5　遺構および遺物写真の縮尺は統一されていない。
6　本書で用いた地図は建設省国土地理院発行の地形図（1：50,000）である。

目　次

序
例言・凡例
本文目次
挿図・図版目次
表目次
写真目次
第１章　序説……1
　第１節　調査にいたる経緯と調査体制……1
　第２節　調査概要……1
　第３節　調査方法……2
　第４節　基本層序……2
第２章　遺跡の位置と環境……2
　第１節　遺跡の位置と地理的環境……2
　第２節　周辺の歴史的環境……2
第３章　遺構と遺物……9
　第１節　縄文時代の遺構と遺物……9
　　・１号敷石住居跡……9
　　・土坑……10
　　・焼土遺構……15
　　・配石遺構……15
　　・出土遺物……16
　第２節　弥生時代から古墳時代の遺構と遺物……21
　第３節　平安時代の遺構と遺物……21
　　・土坑……21
　　・焼土遺構……23
　　・配石遺構……26
　　・集石遺構……27
　　・出土遺物……28
　第４節　中世以降の遺構と遺物……29
　　・焼土遺構……29
第４章　若干の考察とまとめ……30
　第１節　渥美窯の大甕について……30
　第２節　１号敷石住居跡の検証……30
　第３節　まとめ……32

附編－１　塩瀬下原遺跡（第４次調査）の自然科学分析
附編－２　塩瀬下原遺跡（第４次調査）出土の黒曜石製石器の産地推定

挿図・図版目次

第１図　調査区略図……3
第２図　グリッド配置図……3
第３図　調査区西壁土層断面図……3
第４図　土層柱状図……3
第５図　塩瀬下原遺跡周辺の遺跡分布図……5～6
第６図　遺構配置図１(縄文時代)……11～12
第７図　遺構配置図２(平安時代)……13～14
第８図　１号敷石住居跡空撮１回目－１(付図)
第９図　１号敷石住居跡空撮１回目－２(付図)
第10図　１号敷石住居跡空撮２回目－１(付図)
第11図　１号敷石住居跡空撮２回目－２(付図)
第12図　１号敷石住居跡　ポイント配置図……33
第13図　１号敷石住居跡　断面図……34
第14図　１号敷石住居跡・炉跡　平面及び断面図……35
第15図　１号敷石住居跡環礫方形配石遺構南側
　平面及び断面図……35
第16図　１号敷石住居跡環礫方形配石遺構東側
　平面及び断面図……36
第17図　１号敷石住居跡環礫方形配石遺構西側
　平面及び断面図……36
第18図　１号敷石住居跡下　焼土坑１　平面及び断面図……37
第19図　１号敷石住居跡下　焼土坑ポイント配置図……37
第20図　１号敷石住居跡下　焼土坑２　平面及び断面図……37
第21図　敷石分割図……38
第22図　焼土遺構－１　平面及び断面図(１～５号)……39
第23図　焼土遺構－２　平面及び断面図(６～９・11号)……40
第24図　焼土遺構－３　平面及び断面図(10・12－16・20号)……41
第25図　焼土遺構－４　平面及び断面図(17－19・21～26号)……42
第26図　焼土遺構－５　土坑－１　平面及び断面図(28～36、
　土１～５・10・29号)……43
第27図　土坑－２　平面及び断面図(６～９・11～14号)……44
第28図　土坑－３　平面及び断面図(15～22号)……45
第29図　土坑－４　平面及び断面図(23・24・26～28・30・35号)……46
第30図　土坑－５　平面及び断面図(25・31～33・34・36号)……47
第31図　配石遺構－１　平面及び断面図(１号)……48
第32図　配石遺構－２　平面及び断面図(２・３号)……49
第33図　配石遺構－３　平面及び断面図(４号)……50
第34図　配石遺構－４　平面及び断面図(５・７・17号)……51
第35図　配石遺構－５　平面及び断面図(９号)……52
第36図　配石遺構－６　平面及び断面図(10・11号)……53
第37図　配石遺構－７　平面及び断面図(12号)……54
第38図　配石遺構－８　平面及び断面図(13－１号)……55
第39図　配石遺構－９　平面及び断面図(13－２号)……56
第40図　配石遺構－10　平面及び断面図(14～16号)……57
第41図　集石遺構－１　平面及び断面図(１～４・６号)……58
第42図　集石遺構－２　平面及び断面図(５・７・８号)……59
第43図　集石遺構－３　平面及び断面図(９～11号)……60
第44図　H－６・H－７土器集中　ポイント配置図……60
第45図　H－６土器集中　A・B敷石図……60
第46図　土器実測図－１(１住下焼１－４・５、１住下焼２－１～３、
　１住１～９)……61
第47図　土器実測図－２(１住11～26)……62
第48図　土器実測図－３(１住27～43)……63
第49図　土器実測図－４(９配１～13、10配１～６)……64
第50図　土器実測図－５(11配１～16)……65
第51図　土器実測図－６(12配１～３、13配１～10、36焼１)……66
第52図　土器実測図－７(H－６土器集中１～４、
　H－７土器集中１～４)……67
第53図　土器実測図－８(H－７土器集中５～９、
　遺構外１－１～８)……68
第54図　土器実測図－９(遺構外２－１～14)……69
第55図　土器実測図－10(遺構外３－１～10)……70
第56図　土器実測図－11(遺構外４－１～６)……71
第57図　土器実測図－12(遺構外５－１～15)……72
第58図　土器実測図－13(遺構外６－１～21)……73
第59図　土器実測図－14(遺構外７－１～21)……74
第60図　土器実測図－15(遺構外８－１～14)……75
第61図　土器実測図－16(遺構外９－１～20)……76
第62図　土器実測図－17(遺構外10－１～32)……77
第63図　土器実測図－18(遺構外11－１～32)……78
第64図　土器実測図－19(弥生１～10、土師器坏11～29)……79
第65図　土器実測図－20(土師器甕30～53)……80
第66図　土器－21・その他実測図(須恵54～61・65、灰釉62～64、
　陶器66、古銭67・68、鉄製品69～75)……81
第67図　石器実測図－１(打製石斧１～７)……82
第68図　石器実測図－２(打製石斧８～13)……83
第69図　石器実測図－３(打製石斧14～21、横刃型石器22)……84
第70図　石器実測図－４(打製石斧23・24、磨製石斧25～33)……85
第71図　石器実測図－５(磨石34～39)……86
第72図　石器実測図－６(磨石40～48)……87
第73図　石器実測図－７(磨石49～55)……88
第74図　石器実測図－８(磨石56～62)……89

第75図　石器実測図－9（磨石63～69）……90
第76図　石器実測図－10（磨石70～78）……91
第77図　石器実測図－11（磨石79～84）……92
第78図　石器実測図－12（磨石85～92）……93
第79図　石器実測図－13（磨石93～96、磨＋敲石97～100）……94
第80図　石器実測図－14（磨＋敲石101・102、磨＋敲＋くぼみ石103、
くぼみ＋敲石104、くぼみ＋磨石105・106）……95
第81図　石器実測図－15（くぼみ石107～109、敲石110、
磨り面のある台石111・112）……96
第82図　石器実測図－16（磨り面のある台石113～115）……97
第83図　石器実測図－17（磨り面のある台石116・117）……98
第84図　石器実測図－18（磨り面のある台石118・119）……99
第85図　石器実測図－19（磨り面のある台石120・121）……100
第86図　石器実測図－20（多孔石122・123）……101
第87図　石器実測図－21（石皿124～127）……102
第88図　石器実測図－22（石皿128～133、石錘134～139、玉140）…103
第89図　石器実測図－23（石棒141～146）……104
第90図　石器実測図－24（石棒147～149）……105
第91図　石器実測図－25（礫器150～153）……106
第92図　石器実測図－26（打製石斧未製品154～158）……107
第93図　石器実測図－27（打製石斧未製品159～168）……108
第94図　石器実測図－28（石鏃169～191、石錐192～197、
削器198・199）……109
第95図　石器実測図－29（楔形石器200～204、石核205～210、
二次加工剥片211）……110

表目次

表1　周辺の遺跡一覧表（大月市）……7～8
表2　石器観察表……111～112

写真図版目次

写真図版1　調査前風景・1号敷石住居跡
写真図版2　1号敷石住居跡
写真図版3　1号敷石住居跡・住居跡下焼土遺構1・2
写真図版4　焼土遺構
写真図版5　焼土遺構・土坑
写真図版6　土坑・配石遺構
写真図版7　配石遺構・集石遺構
写真図版8　集石遺構・土器集中区・調査風景
写真図版9　出土遺物（石器）
写真図版10　出土遺物（石器）
写真図版11　出土遺物（石器・縄文土器）
写真図版12　出土遺物（縄文土器・土偶）
写真図版13　出土遺物（縄文土器）
写真図版14　出土遺物（縄文土器・土製品・弥生土器・土師器）
写真図版15　出土遺物（土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄製品・古銭）

付編1－パリノ・サーヴェイ

表3　分析試料の一覧……114
表4　放射性炭素年代測定結果……115
表5　微細遺物同定結果……115
表6　土壌理化学分析結果……116
表7　植物珪酸体および灰像分析結果……117
表8　炭化材の樹種同定結果……118

第96図　植物珪酸体群集および組織片の産状……117
第97図　1号・10号・25号におけるリン酸
－カルシウム含量の相関関係……119
第98図　1号住居跡におけるリン酸
－カルシウム含量の相関関係……120

写真図版16　植物珪酸体
写真図版17　炭化材(1)
写真図版18　炭化材(2)
写真図版19　炭化材(3)

付編1－望月

第99図　東日本の黒曜石産地……123
第100－1・2図　判別図……125
表9　判別図に用いた産地原石判別群……124
(SEA-2110L蛍光X線分析装置による)
表10　塩瀬下原遺跡出土黒曜石製石器の産地推定結果……126

第1章 序　　説

第1節　調査にいたる経緯と調査体制

本遺跡は、桂川流域下水道終末処理場の建設に伴い、平成5年度から6年度（1994年1月17日～24日・10月24日～12月28日）に行なわれた試掘調査によって確認されたものである。その面積は20,000㎡にもおよび、平成7年度からすでに発掘調査がおこなわれ、現在までの3カ年の期間に、Ⅰ期工事部分の施設建物部分の調査がほぼ終了している。（第1図）今回はⅡ期工事の1回目であり、通算、4年目の調査となる。調査区域は汚泥消却施設が建設される予定であり、予定区域の西端部分1,500㎡ほどが今回の調査対象である。平成9年度（1997年5月22日～27日）に行われた試掘調査では、試掘トレンチを7箇所入れ、その内の4箇所から数十点の遺物の出土と、敷石遺構の存在が報告され、過去3年間に調査された集落の西端と解釈された。調査期間は平成10年6月8日～平成11年3月17日の8ヶ月である。

調査体制　調査主体　山梨県教育委員会
調査期間　山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者　主任文化財主事　伊藤伸一・文化財主事　笠原みゆき
作業員および整理員　天野宇吉・天野カツヨ・天野喜吉・天野伴代・天野泰善・天野美津子・天野みつ子・甘利清臣・甘利文代・甘利とよ子・雨宮一二三・石井あけみ・石塚敏子・伊藤順子・井上美和・奥秋英子・長田てる美・小俣孝子・上條美里・上條邦子・川口雅人・久嶋すみ・河野彰夫・小菅春江・小林重成・坂本君子・坂本忠裕・坂本ふくよ・佐々木栄子・佐々木さゆり・佐々木泰晋・佐々木富士子・佐々木八重子・佐藤明信・佐藤イネ・佐藤久義・斉藤律子・清水真弓・志村恵子・鈴木のぶ子・鈴木八重子・田代久子・田代光男・中井清美・名取洋子・西室智津子・古屋茂子・丸山英子・望月千里・矢崎緑・山崎公江・米山美智子・渡辺純一（五十音順）

第2節　調査概要

塩瀬下原遺跡（第4次調査）は、遺構確認面が縄文時代と平安時代の2時期にわたる複合遺跡であった（第6・7図）。その概要は、下層の縄文時代では、十字型の敷石をもつ大型の敷石住居跡1軒、配石遺構8基、土坑7基、焼土遺構5基、遺物の集中する箇所が2カ所見つかっている。上層の平安時代の遺構は、土坑の覆土中に焼土が含まれるもの（焼土遺構）32基、土坑20基、配石状遺構7基、集石状遺構11基、ピット十数基が確認された。その他、中世以降の焼土遺構が1基、弥生時代～古墳時代の遺物は数点出土している。

今回の調査で、最も注目される遺構は縄文時代後期の十字型の敷石を持つ敷石住居跡で、その構造や大きさから県内では唯一、関東でも最も珍しいといわれる部類に含まれるものであった。この遺構が珍しい理由は、1．関東地方最大級の大型の柄鏡形敷石住居跡であること。2．敷石の一部が炉を中心に十字形をしていること。3．環礫方形配石遺構と呼ばれる小石を帯状に配置する遺構がコの字形に検出できたこと。4．入り口部分と考えられる敷石の両脇に、門柱のように大きな石を立てていること。5．敷石住居跡の上層には、薗鉢状の石が円形に巡る状態が確認でき、この遺構に対して様々な考え方がなされていること、などがあげられる。詳しい説明は、第3章第1節に記載する。縄文時代のその他の遺構としては、配石遺構がほとんどだが、9号配石遺構では、4つの足をもつ完形の石皿が、配石を構成する1つの要素として使用されていた。また、12～16号配石遺構は1号敷石住居跡の周りを環状に囲む様相が窺える。

平安時代の遺構では、土坑内に焼土を含む遺構が33基検出されたことがあげられる。この遺構の性格ははっきりしないが、墓坑の可能性が高いと考えている。また、配石状遺構としたものは、方向に統一制があり、様相も共通していて、何かを区画したものと考えられる。配石状遺構の遺物として北宋銭が出土しており、墓廟の可能性も否定できない。また、調査区西側に多い配石状遺構と東側に多い集石状遺構のつながりも興味深い。

第３節　調査方法

調査方法は、平成９年度（1997）の試掘調査による結果に基づいて、地表面から１ｍほど、遺構確認面より数十cmほど上位まで重機による覆土の掘削をおこない、それ以後は人力によって遺構・遺物を確認する作業をおこなった。遺構・遺物の記録は、主に平板を利用した測量をおこなっている。また、発掘調査区の正確な位置と、出土遺物の迅速な取り上げを目的として、国土座標Ｘ＝－44,370.00、Ｙ＝＋50,000.00を基準に５ｍごとの方形区画（グリッド）を設定した。（第２図）

第４節　基本層序

今回の調査では調査区西壁の土層観察と断面図を作成し（第３図）、その中で標準的な堆積を示していると考えられる部分を柱状図に示した（第４図）。Ⅰ層・Ⅱ層は耕作面で小礫の混ざる柔らかい暗褐色土で、Ⅲ層の暗褐色土から平安時代の遺物が出土する。遺構の確認はⅣ層からであり、この層には炭化材が多く含まれている。Ⅴ層は平安時代と縄文時代の遺物が混入する。Ⅵ層から遺物の出土が縄文時代に集中し始め、Ⅶ・Ⅷ層から縄文時代の遺構が検出される。しかし、遺跡全体が山側から谷側に、また東から西に向かって傾斜が大きく、場所によっては、この層位に当てはまらない。特に、調査区東側は、何度も土砂くずれがあったのか、角張った礫や、抱えきれないほどの大礫が多く見られる。

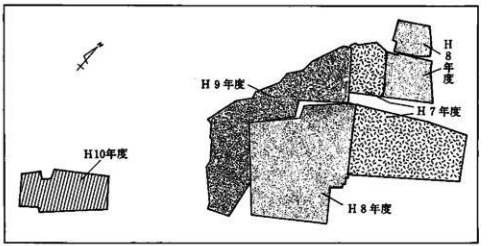
第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

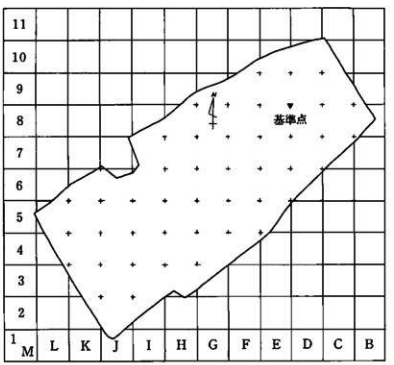
遺跡が所在する山梨県大月市梁川町塩瀬955外は、大月市と東側に隣接する上野原町四方津との境近くに位置している。近くには通称桂川（相模川）が流れ、周辺は倉岳山などの山に囲まれた地域である。遺跡周辺の環境をみていくと、まず、四方を山に囲まれた地域であることがわかる。大月市は、相模川を挟んで北側に関東山地が広がり、その南端に藤の木―相川構造線が走っている。また、南側には丹沢山地が広がり、その北端と藤の木―相川構造線の間に広がる地域を中央低地と分けている。遺跡はこの相模川に沿って形成される中央低地に位置する。また、遺跡のすぐ下を流れる桂川は、山中湖に水源を発し大月市に至るまで北上し、そこで流れを北から東へ、また、名も相模川と変えて上野原を通り越し相模湖へ流れ込む。その途中で大きな本支流とその支流が流入するが、その多くは勾配がきつく浸食され、合流地点で峡谷を示すものが多い。遺跡周辺もこの流れが形成した河岸段丘が発達した地域で、現在の川面から段丘上までは比高差約60ｍを測る。この段丘は、大月市史によれば中位段丘１面鳥沢面となる。この段丘下には、標高約225ｍほどと、約238ｍ付近に平坦面があり、遺跡はこの約238ｍ付近の平坦面の地表下から確認されている。

第２節　周辺の歴史的環境

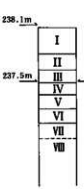
遺跡が所在する大月市梁川町塩瀬は、試掘調査を行うまで遺跡の分布の空白部分であった。大月市域の遺跡の分布をみると本流・支流それぞれの川に沿って点在していることがわかる。塩瀬下原遺跡の周辺には、御前山と称される中世以降の狼煙台跡があるのみであった。本遺跡は縄文時代中期末～後期を中心とする時期と平安時代の２時期の遺構・遺物が確認されている。今回、参考として、周辺の遺跡分布は大月市以外の都留市・道志村・秋山村・上野原町と広範囲に記した（第５図）。しかし、ここでは、塩瀬下原遺跡で生活が営まれていた時期に、その周辺がどのようになっているのか、その様相を外観していくことにする。まず、遺跡周辺の縄文時代中期末から後期前半に相当する遺跡をあげてみる。県のGIS作成資料によれば、大月市の遺跡数は158カ所におよび、その内の120カ所で縄文時代の遺構・遺物が発見されている。しかし、これらの遺跡が縄文時代のどの時期のものなのかその詳細



第1図　調査範囲略図　　$S=\frac{1}{2000}$



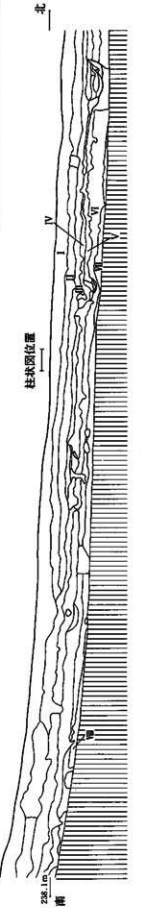
第2図　グリッド配置図　　$S=\frac{1}{600}$



I 暗褐色土：締り、粘性欠ける。礫、スコリア多い。
II 暗褐色土：締り、粘性欠ける。I 層より礫、スコリア多い。
III 暗褐色土：締り大け、粘性ややあり。平安遺物包含層。
IV 黒褐色土：締り欠け、粘性ややあり。炭多く含む。平安遺構確認面。
V 暗茶褐色土：締りややあり、粘性強い。砂含む。平安～鎌大遺物出入層。
VI 暗茶褐色土：締り、粘性あり。ややロ質、鎌大遺物包含層。
VII 黒褐色土：締り、粘性ややあける。砂質！。
VIII 黒褐色土：締りやや欠け、粘性あり。

第4図　土層柱状図

$S=\frac{1}{40}$

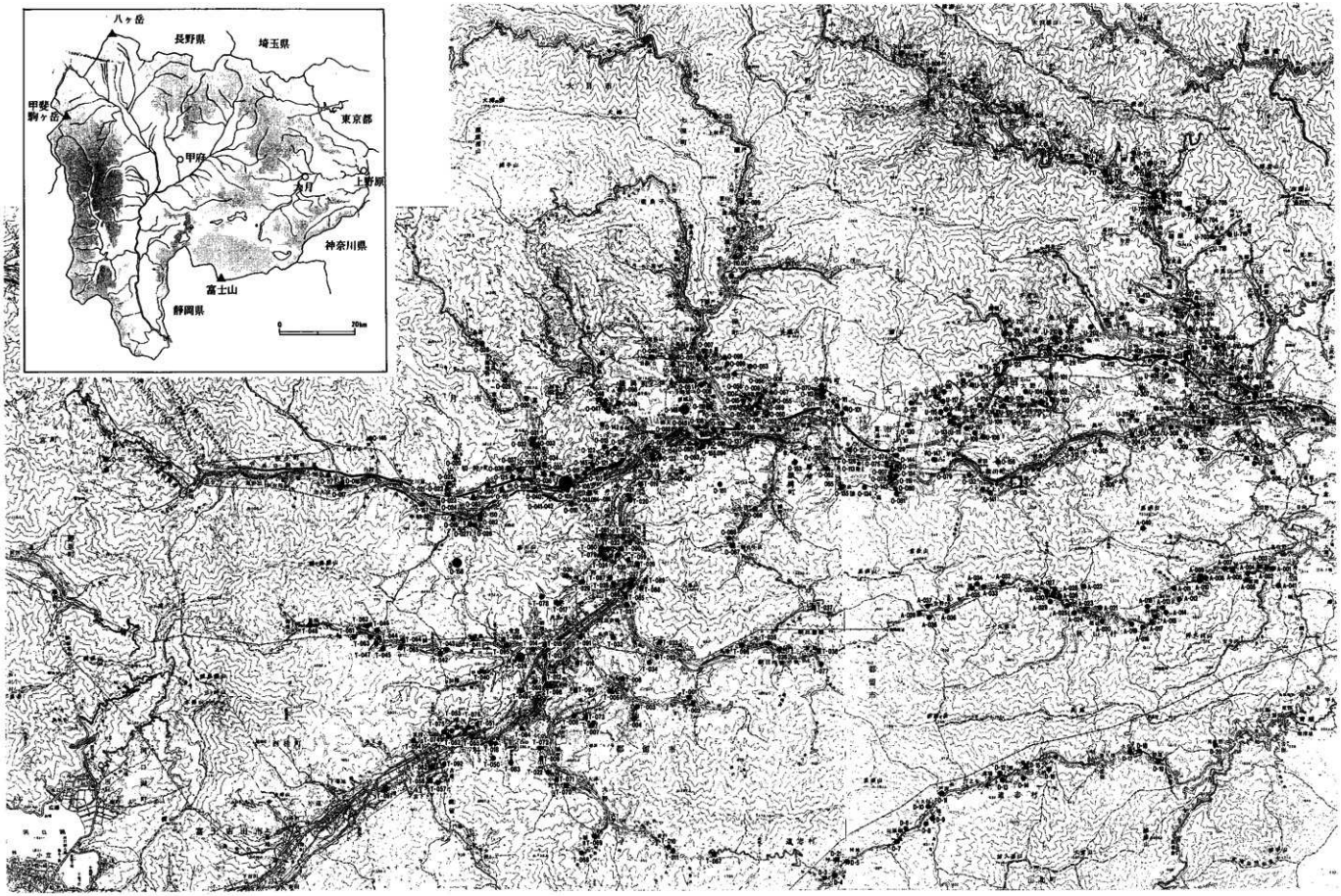


第3図　調査区南壁土層断面図　　$S=\frac{1}{100}$

第1～4図　調査区略・グリッド配置・土層断面・柱状図

が分からないため、大月市史・山梨県史・既刊の報告書で知り得るものについてのみ記述していく。大月市内で、本遺跡に最も近い縄文時代後期の遺跡は、梁川町下畑本郷遺跡(O-081)である。遺構は確認されていないが、縄文中期末から後期の遺物が発見されていることが大月市史に記されている。次に近いのは富浜町の宮谷遺跡である。この遺跡は中央自動車道建設時から発掘調査がなされ、現在では、宮谷白山(O-069)、宮谷金山(O-070)、宮谷1(O-073)、宮谷2(O-071)、宮谷3(O-072)、宮谷金山古墳(O-112)と細分されている。縄文時代後期の遺構が確認されたのは宮谷金山遺跡で、土坑と遺物が検出されている。次は下畠遺跡(O-016)、寺原1(O-059)、寺原2(O-009)遺跡などである。この遺跡も詳細は不明で、市史による遺物の出土が確認されているのみである。この3つの遺跡は、相模川とそれに流入する葛野川の合流地点に点在する遺跡群に含まれ、これらの遺跡はまだ未調査であるが、縄文時代の大集落の可能性がある地域といえる。葛野川を遡っていくと、太田2遺跡(O-053)、正原2遺跡(O-099)、川津畑遺跡(O-089)が確認されている。今度は、相模川を大月市の中心に向かって遡ると、10軒ほどの敷石住居跡と数件の竪穴式住居跡が出土している大月遺跡(O-044)、相模川を挟んで対岸に位置する天神遺跡(O-087)がある。大月遺跡は、宮谷遺跡と並んで古くから大月市の貴重な遺跡として周知されており、10回にわたる調査が進められ縄文時代中期末から後期前半にかけて営まれてきた集落跡であることが確認されている。集落の西南には、環状の配石群が第7次調査で発見されており、まだ、明確な墓域が確認されていないが、ここに1つの拠点が置かれていたといえる。大月遺跡の北西では、相模川は桂川と笹子川にわかれ、大月市域の遺跡は笹子川流域に移行する。大月町花咲遅郷1遺跡(O-043)、初狩町遅野遺跡(O-082)、外ガイド遺跡(O-026)、寺門A(O-024)、寺門B(O-023)遺跡である。外ガイド遺跡については、山梨リニア実験線に伴い発掘調査が実施され、配石遺構、掘立柱建物跡、柄鏡形敷石住居跡、石組み炉、埋甕など多くの遺構と遺物が検出されている。以上のように、縄文時代中期末から後期にかけての遺跡を概観してきたが、調査がなされていない遺跡が多く不明な点が多い。しかし、遺跡の分布は初狩町・大月町・七保町・富浜町・梁川町と5カ所ほどに集中する様子が窺えた。120箇所にも及ぶ縄文時代の遺跡のうち、塩瀬下原遺跡と同時期に存在する遺跡の数は、わずか15遺跡ど少ない。一般的に縄文時代後期は、縄文時代中期に増加した人口が激減する傾向が指摘されている。この大月市域についても同様の傾向が見られるようである。

本遺跡は、現在の行政区域では大月市の東端に位置するが、遺跡の分布から見ると、上野原町や秋山村に近接している。調査で検出された大型の敷石住居跡は、山梨県内では唯一の遺構であるが、神奈川県地域では数基の発見がある。このことからすると、相模川に沿った縄文時代の人々の移動が考えられ、今後、隣接する上野原町やその他の地域の遺跡との関係を考えていかなければならない。



第5図　塩瀬下原遺跡周辺遺跡分布図　　S=1/100,000

●周辺の遺跡一覧表

番号	市町村名	遺跡コード	遺跡名	種別	時　代
O－1	大月市	2060001	沖平遺跡	散布地	縄文
O－2	大月市	2060002	お弥かげ遺跡	散布地	縄文
O－3	大月市	2060003	太田１遺跡	散布地	縄文/古墳
O－4	大月市	2060004	中曽根遺跡	散布地	縄文
O－5	大月市	2060005	沢中原Ａ遺跡	散布地	縄文
O－6	大月市	2060006	岩殿中倉遺跡	散布地	縄文
O－7	大月市	2060007	葛野小泉遺跡	散布地	縄文/弥生/古墳/平安
O－8	大月市	2060008	クワド遺跡	散布地	縄文
O－9	大月市	2060009	寺原２遺跡	集落跡	縄文/弥生/古墳/平安
O－10	大月市	2060010	幸ノ田遺跡	散布地	縄文
O－11	大月市	2060011	西ノ上Ｂ遺跡	散布地	縄文/平安
O－12	大月市	2060012	後林遺跡	土坑群	縄文
O－13	大月市	2060013	幸道１遺跡	集落跡	縄文
O－14	大月市	2060014	幸道２遺跡	集落跡	縄文
O－15	大月市	2060015	大境遺跡	散布地	縄文
O－16	大月市	2060016	下畠遺跡	散布地	縄文
O－17	大月市	2060017	吉久保遺跡	散布地	縄文
O－18	大月市	2060018	原遺跡	散布地	縄文
O－19	大月市	2060019	堰遺跡	散布地	縄文
O－20	大月市	2060020	下門原遺跡	散布地	縄文
O－21	大月市	2060021	横道Ｂ遺跡	散布地	縄文
O－22	大月市	2060022	横道Ａ遺跡	散布地	縄文
O－23	大月市	2060023	寺門Ｂ遺跡	散布地	縄文
O－24	大月市	2060024	寺門Ａ遺跡	散布地	縄文
O－25	大月市	2060025	寺門口遺跡	散布地	縄文
O－26	大月市	2060026	外ガイド遺跡	集落跡	縄文/平安
O－27	大月市	2060027	上原遺跡	散布地	縄文
O－28	大月市	2060028	桑西宮の前遺跡	散布地	縄文
O－29	大月市	2060029	石神原遺跡	散布地	縄文
O－30	大月市	2060030	大覇遊仙閣遺跡	散布地	縄文
O－31	大月市	2060031	太田屋敷遺跡	散布地	縄文
O－32	大月市	2060032	上真木辻遺跡	散布地	縄文
O－33	大月市	2060033	根の神遺跡	散布地	縄文
O－34	大月市	2060034	梅久保遺跡	散布地	縄文
O－35	大月市	2060035	銭神遺跡	散布地	縄文
O－36	大月市	2060036	後小路遺跡	散布地	縄文
O－37	大月市	2060037	権現原遺跡	散布地	縄文
O－38	大月市	2060038	沢中原Ｃ遺跡	散布地	縄文
O－39	大月市	2060039	小佐野遺跡	散布地	縄文
O－40	大月市	2060040	青木原遺跡	散布地	縄文
O－41	大月市	2060041	原平Ｂ遺跡	集落跡	縄文/弥生/奈良/平安/中世/近世
O－42	大月市	2060042	原平Ａ遺跡	集落跡	縄文/弥生/奈良/平安/中世/近世
O－43	大月市	2060043	遅野１遺跡	散布地	縄文
O－44	大月市	2060044	大月遺跡	集落跡	縄文/奈良/平安
O－45	大月市	2060045	四本木遺跡	散布地	縄文
O－46	大月市	2060046	岩下遺跡	散布地	縄文
O－47	大月市	2060047	指平遺跡	散布地	縄文
O－48	大月市	2060048	浅利平石１遺跡	散布地	縄文
O－49	大月市	2060049	日影遺跡	散布地	縄文
O－50	大月市	2060050	畑倉ヤスバ遺跡	散布地	縄文
O－51	大月市	2060051	木戸狩遺跡	散布地	縄文
O－52	大月市	2060052	ちば遺跡	散布地	縄文
O－53	大月市	2060053	太田２遺跡	散布地	縄文/古墳
O－54	大月市	2060054	和田原遺跡	散布地	縄文/古墳
O－55	大月市	2060055	東井尻原遺跡	散布地	縄文
O－56	大月市	2060056	東梨木戸１遺跡	散布地	縄文
O－57	大月市	2060057	東梨木戸２遺跡	散布地	縄文
O－58	大月市	2060058	西梨木戸遺跡	散布地	縄文/古墳
O－59	大月市	2060059	寺原１遺跡	散布地	縄文
O－60	大月市	2060060	八幡２遺跡	散布地	縄文
O－61	大月市	2060061	八幡１遺跡	散布地	縄文
O－62	大月市	2060062	藤崎丘１遺跡	散布地	縄文/弥生
O－63	大月市	2060063	藤崎丘２遺跡	散布地	縄文/弥生
O－64	大月市	2060064	藤崎丘３遺跡	散布地	縄文/弥生
O－65	大月市	2060065	藤崎丘４遺跡	散布地	縄文/弥生
O－66	大月市	2060066	下小沢遺跡	散布地	縄文
O－67	大月市	2060067	朝日小沢遺跡	散布地	縄文
O－68	大月市	2060068	むらさき遺跡	散布地	縄文
O－69	大月市	2060069	宮谷山遺跡	散布地	縄文
O－70	大月市	2060070	金山遺跡	散布地	縄文
O－71	大月市	2060071	宮谷３遺跡	散布地	縄文
O－72	大月市	2060072	宮谷２遺跡	散布地	縄文
O－73	大月市	2060073	宮谷１遺跡	散布地	縄文
O－74	大月市	2060074	堰の内１遺跡	散布地	縄文
O－75	大月市	2060075	堰の内２遺跡	散布地	縄文
O－76	大月市	2060076	堰の内３遺跡	散布地	縄文
O－77	大月市	2060077	堰の内４遺跡	散布地	縄文
O－78	大月市	2060078	堰の内５遺跡	散布地	縄文

O—79	大月市	2060079	矛窪隈遺跡	散布地	縄文
O—80	大月市	2060080	下畑下原遺跡	散布地	縄文
O—81	大月市	2060081	下畑本郷遺跡	散布地	縄文
O—82	大月市	2060082	連野遺跡	散布地	縄文
O—83	大月市	2060083	房氏遺跡	散布地	縄文
O—84	大月市	2060084	遅郷２遺跡	散布地	縄文
O—85	大月市	2060085	遅郷３遺跡	散布地	縄文
O—86	大月市	2060086	遅郷４遺跡	散布地	縄文
O—87	大月市	2060087	天神遺跡	散布地	縄文/弥生/古墳
O—88	大月市	2060088	柳田遺跡	散布地	縄文
O—89	大月市	2060089	川津畑遺跡	散布地	縄文
O—90	大月市	2060090	足ノ口遺跡	散布地	縄文
O—91	大月市	2060091	地蔵窟遺跡	散布地	縄文
O—92	大月市	2060092	延命寺遺跡	散布地	縄文
O—93	大月市	2060093	御所遺跡	集落跡	縄文/平安
O—94	大月市	2060094	清水入遺跡	散布地	縄文
O—95	大月市	2060095	中組遺跡	散布地	縄文
O—96	大月市	2060096	浅利平石２遺跡	散布地	縄文
O—97	大月市	2060097	富岡遺跡	散布地	縄文
O—98	大月市	2060098	正原１遺跡	散布地	縄文
O—99	大月市	2060099	正原２遺跡	散布地	縄文
O—100	大月市	2060100	花輪遺跡	散布地	縄文/弥生/古墳
O—101	大月市	2060101	宮ノ上１遺跡	散布地	縄文
O—102	大月市	2060102	宮ノ上２遺跡	散布地	縄文
O—103	大月市	2060103	神沓遺跡	散布地	縄文
O—104	大月市	2060104	七保中学校校庭遺跡	散布地	弥生/古墳
O—105	大月市	2060105	前沢内屋敷遺跡	古墳	古墳
O—106	大月市	2060106	坂田古墳	古墳	古墳
O—107	大月市	2060107	西ノ上Ｃ遺跡	古墳？	古墳
O—108	大月市	2060108	強瀬西畑遺跡	古墳	古墳
O—109	大月市	2060109	強瀬子ノ神遺跡	古墳	古墳
O—110	大月市	2060110	富岡遺跡	古墳	古墳
O—111	大月市	2060111	八幡塚古墳	古墳	古墳
O—112	大月市	2060112	宮谷倉山古墳	古墳	古墳
O—113	大月市	2060113	鳥沢倉山古墳	古墳	古墳
O—114	大月市	2060114	浅利入遺跡	散布地	弥生/古墳
O—115	大月市	2060115	川向遺跡	窯跡？	
O—116	大月市	2060116	吉久保洞穴１遺跡	散布地	平安
O—117	大月市	2060117	吉久保洞穴２遺跡	散布地	平安
O—118	大月市	2060118	円通寺跡(三重塔跡地)	寺院跡	奈良
O—119	大月市	2060119	徳田氏館跡	城館跡	平安
O—120	大月市	2060120	近久保経塚	経塚	近世
O—121	大月市	2060121	芝草遺跡	集落跡	平安
O—122	大月市	2060122	寺床遺跡	地下式	中世
O—123	大月市	2060123	獄上地遺跡	散布地	平安
O—124	大月市	2060124	犬崎遺跡	散布地	縄文/平安
O—125	大月市	2060125	沢中原Ｂ遺跡	散布地	縄文
O—126	大月市	2060126	沢田遺跡	散布地	弥生
O—127	大月市	2060127	寺向遺跡	散布地	縄文
O—128	大月市	2060128	入倉遺跡	散布地	縄文/平安
O—129	大月市	2060129	芹ガ井戸遺跡	散布地	縄文/平安
O—130	大月市	2060130	原田遺跡	散布地	縄文
O—131	大月市	2060131	山谷遺跡	散布地	縄文
O—132	大月市	2060132	立野遺跡	散布地	縄文
O—133	大月市	2060133	上和田遺跡	散布地	平安
O—134	大月市	2060134	小篠遺跡	散布地	縄文
O—135	大月市	2060135	諏成遺跡	散布地	縄文
O—136	大月市	2060136	太田ヶ原遺跡	集落跡	縄文/弥生/平安
O—137	大月市	2060137	西畑遺跡	集落跡	縄文/平安
O—138	大月市	2060138	塩瀬下原遺跡	集落跡	縄文/平安
O—139	大月市	2060139	安楽寺東遺跡	散布地	縄文
O—140	大月市	2060140	御所平遺跡	散布地	
O—141	大月市	2060141	綱之上遺跡	散布地	縄文/平安
O—142	大月市	2060142	猪平Ｂ遺跡	散布地	縄文
O—143	大月市	2060143	南堰之内遺跡	集落跡	奈良
O—144	大月市	2060144	堰の内遺跡	集落跡	縄文/平安/中世
O—145	大月市	2060145	花咲館種堂	城館跡	
O—146	大月市	2060146	鐘ヶ沢屋敷	城館跡	
O—147	大月市	2060147	矛窪御前山	城館跡	
O—148	大月市	2060148	岩殿城跡	郡城跡	中世
O—149	大月市	2060149	駒宮砦	城館跡	
O—150	大月市	2060150	河内屋敷	城館跡	
O—151	大月市	2060151	駒橋御前山	城館跡	
O—152	大月市	2060152	笹子峠烽火	城館跡	
O—153	大月市	2060153	猿橋の城山	城館跡	
O—154	大月市	2060154	秋神屋敷	城館跡	
O—155	大月市	2060155	丹後屋敷（鍛冶屋敷）	城館跡	
O—156	大月市	2060156	綱ノ上御前山	城館跡	
O—157	大月市	2060157	和光屋敷	城館跡	
O—158	大月市	2060158	近ヶ坂館種堂	城館跡	

第３章　遺構と遺物

第１節　縄文時代の遺構と遺物

・１号敷石住居跡（第８～11図は付図）

本敷石住居跡は、やや楕円形とも隅丸の長方形ともとれる居住部分に、不整形の柄がついた形態の柄鏡形敷石住居跡である。居住部の中央よりやや西側に炉が存在し、この炉を中心に平石が十字型に敷かれていた。住居跡自体が大型であることや敷石が十字型をしていることから、関東地域でも珍しい遺構として注目されている。また、敷石の上には薄鉢状の礫群が環状に巡っている。これらの遺構を調査・確認した順に説明していく。

・敷石上の礫群について

環状の礫群は敷石より30cmほど上層に配列されており、二重にめぐる様相が見られる。外側は長軸0.4ｍ・短軸0.2ｍほどの薄鉢状の礫が１列にめぐる直径約9.5ｍの円形で、標高は237.6～237.7ｍほどである。内側は、外側より１ｍほど間隔を置いて配列され、その直径は約８ｍを測る。東南側（山側）の幅が最も広く、山側から谷川に向かって斜めに礫が重なっている。北西側（谷側）に向かって礫が長さ0.8～0.9ｍ・幅0.3ｍと大型化し、配列も１列となる。標高は、237.5～237.6ｍほどである。敷石が確認される以前は配石遺構と認識しており、その都度、取り除いてきた礫を図面上で重ね合わせていくと、東南部分は方形または台形状に礫が配置され、部分的に意図的な空間が見て取れる。また、その一部が円形に巡る箇所があり、内側には礫が少ない状態である。さらに、焼土や炭化材の広がる範囲が数カ所確認されている。標高は237.3～237.4ｍほどで、この段階では、敷石は確認されていない。また、内側の列から外側の列を含む形で、北東-南東の方向に礫が集中する箇所がある。この北東側の礫群近くには、土器片が集中していた。

・敷石部分について

調査は第３トレンチを中心に、北側の標高の低い位置から行った。トレンチ内では、当初から敷石が確認されており、この敷石を最終目標に約５cmづつ掘り下げていった。敷石上の礫群を検出し終えた時には、柄部分から十字型の敷石が確認されていて、敷石と敷石上の礫群とは最大約30cmの比高差があった。最終的に検出された敷石の奥壁部分については、敷石上の礫群の真下に位置している。奥壁の縁石部分が、敷石上の礫群の内側の東南端部分の真下に位置する構造になっている。敷石は大小様々な平石の辺と辺を合わせて、その隙間に小さな礫を埋め込む様にして補強している。居住部全体の大きさは、北東―南西方向が、縁石から縁石まで約７ｍで、南東―北西方向が縁石から柄部分の始まりまで約6.8ｍほどである。円形というより隅丸方形のようである。奥壁部分には縁石が間隔を開けて配置され、奥壁側の敷石では、コの字型の環礫方形配石遺構がある。居住部の内側全体が火を受け、敷石は変色および亀裂がはいっており、床面は赤く変色している。しかし、床面直上に炭化材などは確認されなかった。

・十字型の敷石について

十字型の敷石は各遺構全体と同様、南東―北西に軸をもつ。炉を中心に南東に２ｍ・北西に2.2ｍの距離を測り、平石を１枚ずづつ並べ、その隙間や周りに小礫を埋め込んで固定している。この軸に直行して帯状の敷石が配置され、十字型の敷石が形成されている。十字型の横軸は、炉跡を挟んだ左右の敷石の幅が対称ではなく、内側から外側に向かって、その幅は広くなる。北東側の内が１ｍ・外が1.35ｍ、南西側の内が0.7ｍ・外が１ｍとなる。この横軸の敷石は、外側に向かって太くなる矢印型にも見える。矢印の先端から先端までの長さは、4.4ｍを測り、南西側の敷石の先端には、矢印を誇張するかのように拳大ほどの礫を１列に配置している。十字型の敷石と柄の敷石の間近くで石棒（第89図―141）が検出された。

・環礫方形配石遺構について（第15図～第17図）

環礫方形配石遺構は、居住部奥壁側の敷石の間にコの字型に配置された小礫の帯である。ここでは、東・南・西の順に記述していく。まず、環礫方形配石遺構東側は、長さ約2.2ｍ、幅0.35ｍ・厚さ0.1ｍほどの帯である。周辺

の敷石より約7cm落ち込んでいる。また、上層の礫群との差は20cmほどある。遺物は、石器2点・土器片9点が出土している。石器は磨石（第72図—44）と石棒（第89図—142）の破片である。

環礫方形配石遺構南側では、長さ約3.7m、幅0.2～0.4m・厚さ0.1mほどの帯である。周辺の敷石より約7cm落ち込んでいる。遺物は、石器7点、土器片3点、炭化材1点が出土している。石器は4点が磨石（第72図—45～48）で、中央より西側から磨製石斧の破片（第70図—28）が出土している。また、その近くで瑪瑙製の玉（第88図—140）が三分の一程度の破片で出土した。小礫をはずしていくと、帯のほぼ真ん中には、敷石が1つ残っていた。この敷石は、居住部分の十字型敷石の軸を延長したものと方向を同じにしている。この敷石の周辺には環礫方形配石遺構の小礫よりやや大きめの石で補強され、周囲の敷石と様相が似ている。また、レベルも違和感がない。

環礫方形配石遺構西側では、長さ約2.4m、幅0.3～0.5m・厚さ0.1mほどの帯である。遺物は、磨石（第73図—49・50）が2点、黒曜石の破片が1点、土器が2点出土している。磨石は敷き詰められた小石の上に置くように配置され、その他の遺物は、小石と一緒に敷き詰められている。敷石部分が一部環礫方形配石遺構の下に入り込むようになっている。

・炉跡について

炉は玄武岩を6個使用して円形を呈している。石の外側で0.7m・内側で0.4～0.5m、深さ約0.45mを測る。炉の西側は地盤が緩いためか本来のレベルよりかなり沈んでいた。炭化材・焼土を含む黒褐色土が30cmほど堆積し、その下層に焼土がある。遺物は出土していない。

・敷石下の焼土遺構について（第18図から第20図）

敷石を全部はずし、床面全体を10cmほど掘り下げたところ、今まで床面全体に広がっていた焼土と炭化材が、炉跡周辺に狭まった。不整形に広がる範囲の内側を少しずつ掘り下げていくと、焼土と炭化材が濃くなったため、土層観察用に半裁して様子を見ることにした。その結果、2つの土坑が確認できた。南東側を焼土遺構1・北西側を焼土遺構2とした。1は長軸約1m・短軸0.8m・深さ0.55mの楕円形である。炭化材・焼土を含む暗褐色土の下には、焼土が全面にひろがり、そのほぼ中央に堀之内2式の深鉢が埋まっている。土器と焼土を取り除くとその下には炭化材の量がかなり濃い密度でふくまれる黒褐色土が堆積している。2は直径1.4m・深さ0.8mの円形をしている。1・2とも底面は鍋底状をしている。1同様、炭化材・焼土を含む暗褐色土を取り除くと、全面に広がる焼土と堀之内1式の深鉢が確認でき、その下層には、やはり炭化材の量がかなり濃い密度でふくまれる黒褐色土がある。2は1より炭化材が明瞭に敷き詰められた状態が確認できた。また、2では、焼土直上から磨製石斧が2点（第70図—25・27）、磨石が1点（第73図—51）出土している。磨製石斧は1つは完形で、もう1つは破片であるが、土器同様、かなり火を強く受けており、表面の劣化が激しい。これらの石器は、深鉢より少し上層の焼土が全面に確認されてすぐの位置から検出された。

・土坑（第28・29図）

20号土坑

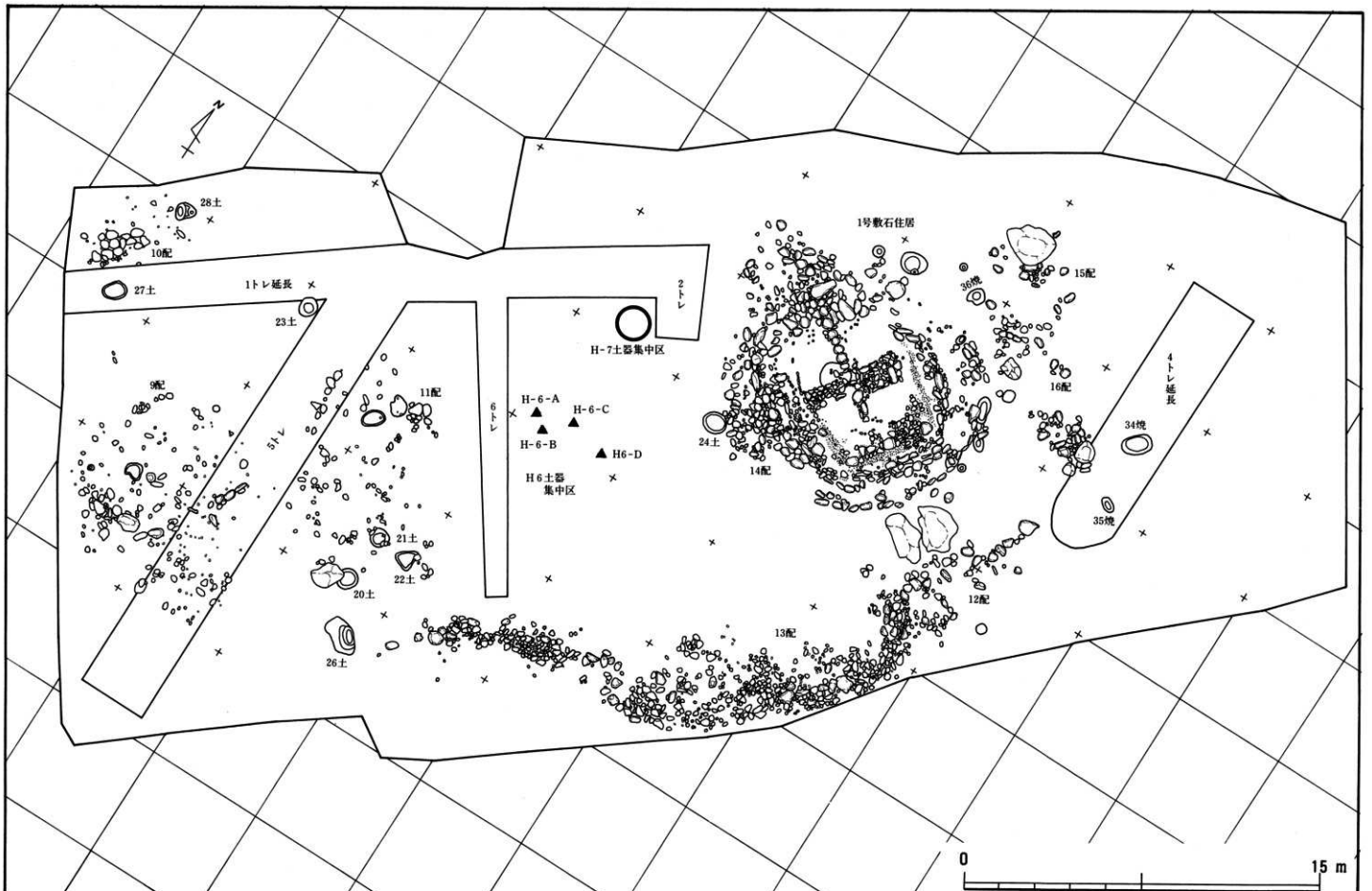
Ⅰ—4グリッド。直径0.85m・深さ0.3mの円形。底面は鍋底状である。遺物は縄文土器片が2点出土している。土坑の東外側に、炭化材の集中する箇所がある。

21号土坑

Ⅰ—4グリッド。直径0.8mほどの円形で、深さは0.2mをはかる。底面は鍋底状である。土坑内の南端にピットがある。遺物は出土していない。

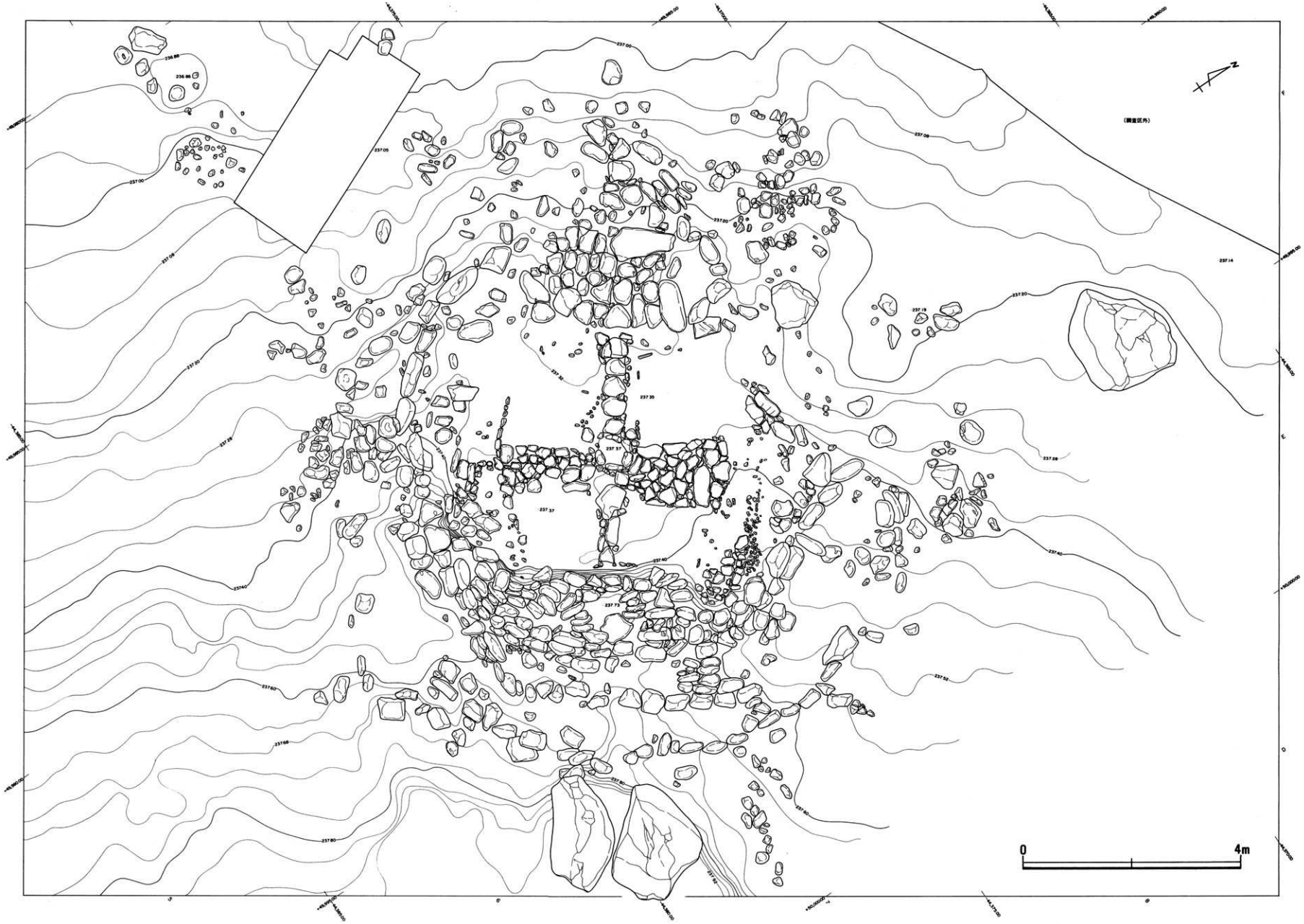
22号土坑

H—4～Ⅰ—4グリッド。長軸は現存長1m・短軸0.83m・深さ0.2～0.4mを測る。底面は鍋底状である。土坑の西壁は堀り足りないと考えられる。遺物は出土していない。



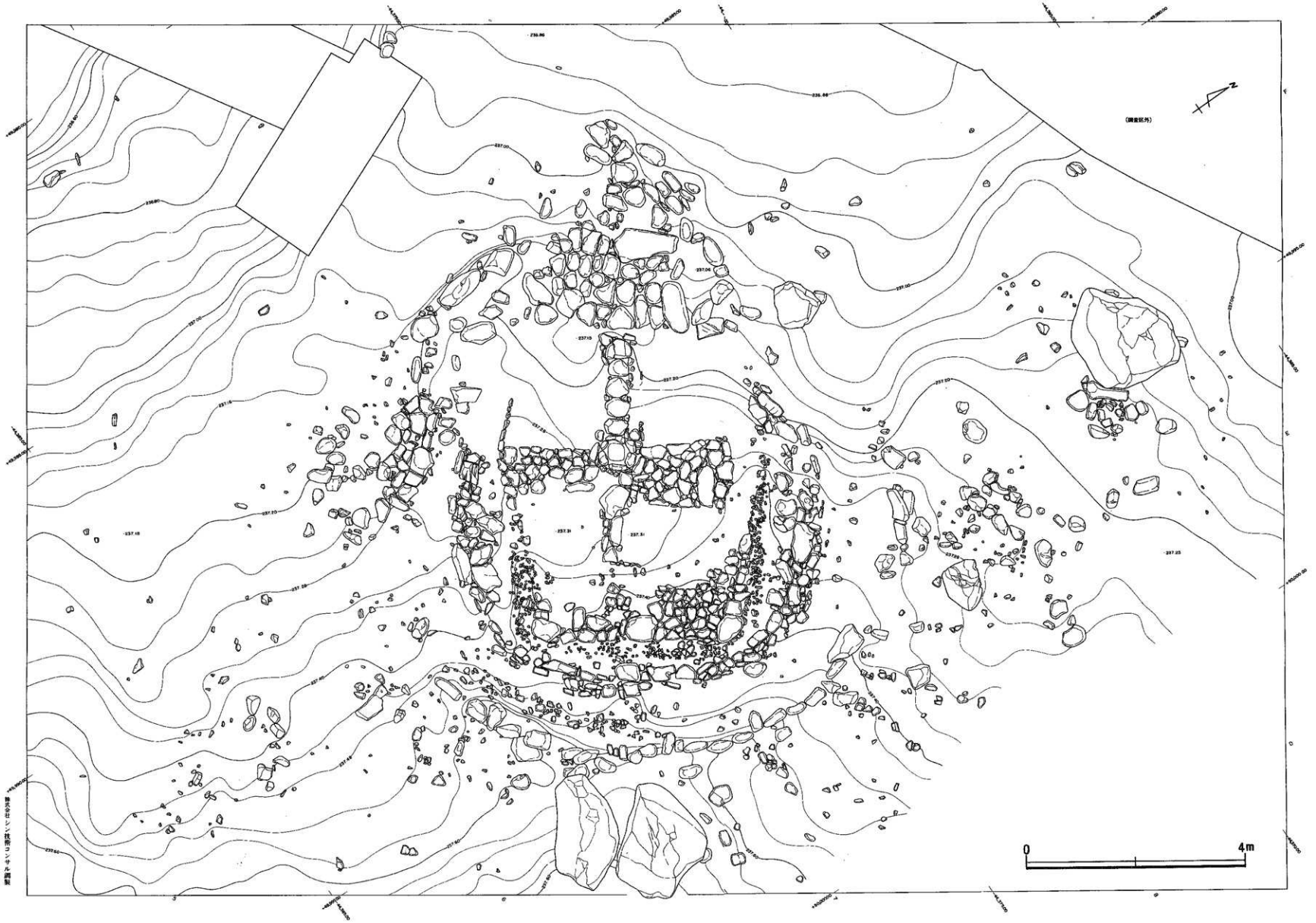
第6図　遺構配面図－1（縄文時代）

第7図　遺構配置図－2（平安時代）

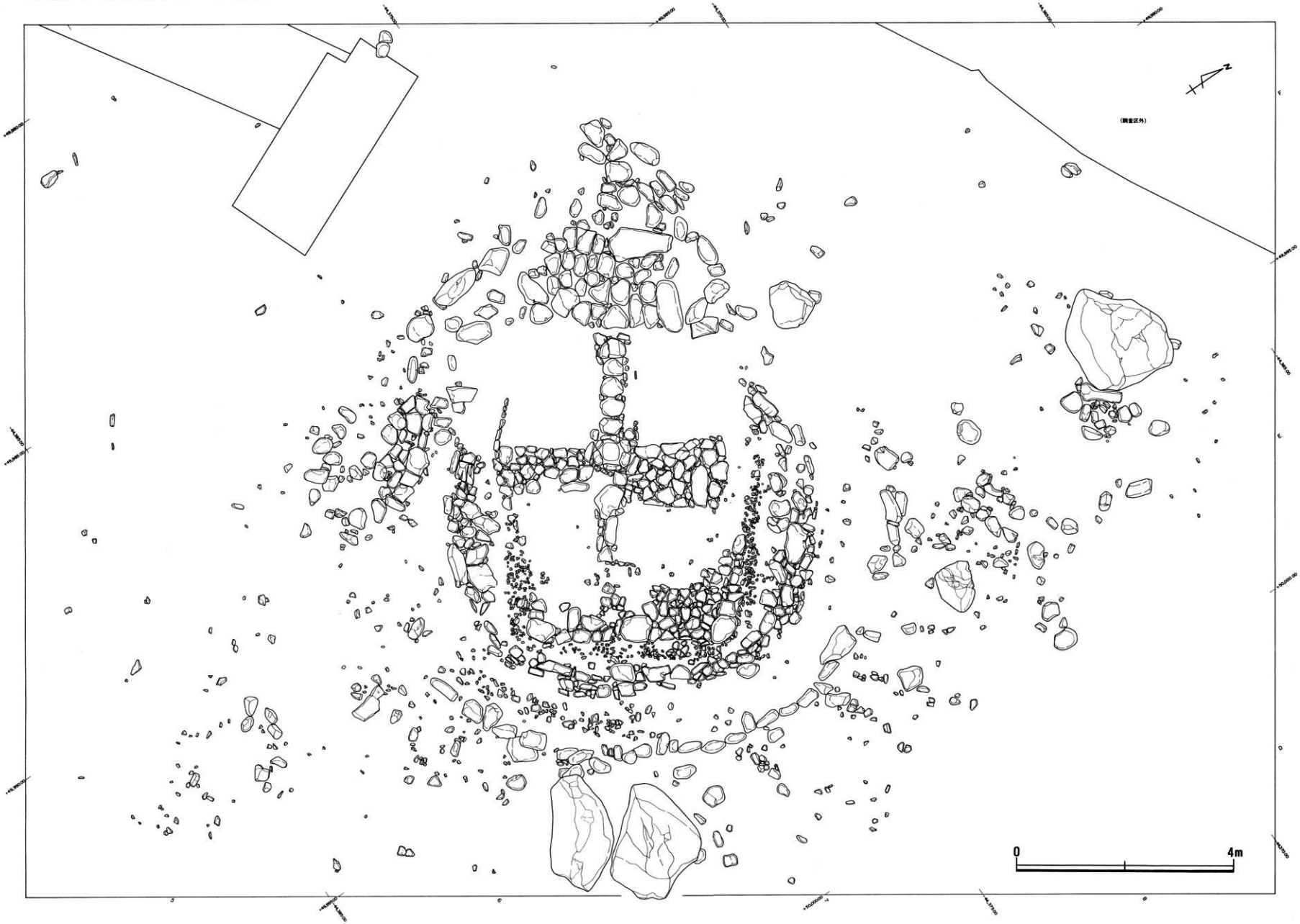


第8図　1号敷石住居跡 空撮1回目-1

第9図　1号敷石住居跡 空撮1回目-2



第10図　１号敷石住居跡 空撮２回目-1



第11図　1号敷石住居跡 空撮2回目-2

23号土坑

J－5グリッド。長軸0.93m・短軸0.75m・深さ0.4～0.53mを測る。底面は鍋底状を呈している。遺物は出土していない。

24号土坑

G－6グリッド。直径0.83～0.92m・深さ0.25mの円形。遺物は出土していない。底面は鍋底状である。9号土坑のように炭化材が薄く敷きつめられてその下に焼土が堆積している。

26号土坑

I－3グリッド。長軸1.48m・短軸0.95mの楕円形。深さは0.6m。底面は0.1m幅の平らな面をもち、15cmくらいの礫が床面に置かれていた。遺物は縄文土器が7点出土している。東側には後期堀之内式の遺物が分布する区域がある。

27号土坑

L－4～5グリッド。長軸0.98m・短軸0.72m・深さ0.26－0.35mを測る。底面は鍋底状。遺物は縄文土器が2点、炭化材が1点出土している。10号配石遺構の南東側に位置し、配石遺構との関係が推定される。

28号土坑

L－5～6グリッド。長軸0.85m・短軸0.67mの卵形。深さは0.23mを測る。東側にピット状の落ち込みがある。遺物は出土していない。27号土坑同様、10号配石遺構に隣接する。

・焼土遺構（第26図）

34号焼土遺構

D－8グリッド。長軸1.2m・短軸0.95m・深さ0.27mの楕円形。遺物は炭化材片が5点。

35号焼土遺構

D－8グリッド。長軸0.7m・短軸0.43m・深さ0.18mの楕円形。遺物は無い。34・35号焼土遺構は第4トレンチ拡張部分から検出されている。

36号焼土遺構

F－8グリッド。長軸0.8m・短軸0.58m・深さ0.22mの不整形。縄文土器を6点出土。1号住居跡と隣接している。

・配石遺構（第35～40図）

6・8号配石

1号住居の一部であったため欠番とする。

9号配石

J－3～K－3グリッドを中心に広がる。楕円形を呈するようである。南側の半円に石組みが多く、四つの足がつく石皿（第87図－124）が横に埋められて配石の一部を形成している。北側の端に胴部下端から底部の縄文土器が埋められていた。円で囲まれた内側には焼土が2カ所ほど検出できた。遺物は縄文土器がほとんどで、配石と区画した範囲以外との接合も確認できている。特に13号配石との間（I2・3～H3グリッド）に広がる黒色土中の遺物との接合が多く見られる。

10号配石

L－5グリッド。平らな面をあわせて敷き詰めたもの。縄文時代後期堀之内式の土器片が出土している。調査区の西端に位置し、調査区外への広がりを推定させる。周辺には27・28号土坑がある。

11号配石

I－5～J－5グリッドを中心に敷石とそれを囲むような円形の列で構成されている。敷石の脇には焼土が検出され、遺物は縄文土器がほとんどである。隣接する9号配石同様、明確な範囲がわからず、周辺グリッドとの遺

物の接合が見られる。

12号配石

D－6・7～E－6グリッド。13号配石の延長とも考えられる。1号住居跡の南東側に帯状に広がる。底部を除く以外ほぼ関係の土器が土圧によって押しつぶされた状態で出土している。

13号配石

E－4・5・6～F－4・5～G－4～H－3・4グリッド。広範囲に帯状に広がる。F－5グリッドでは、平たい石を円形に上面に敷き詰めた土坑を伴っている。12・15・16号配石を含めて、1号敷石住居跡を囲んでいるようである。全体から石器と土器片が出土している。

14号配石

G－6・7グリッド。1号住居跡の南西側で斬り合いっている。最も古い段階の敷石の一部の可能性がある。この上面は、敷石上の礫群の一部として存在している。

15号配石

E－9～F－9グリッド。大岩の下に一部が入り込んでいる。ほぼ1ｍ四方に平らな敷石を配置している。16号配石とつながる可能性がある。

16号配石

D－8～E－8グリッド。1号敷石住居跡の北東側に位置している。12・13・15号配合を含めて、帯状につながる可能性がある。

・出土遺物（第45～62図）

本遺跡では、縄文時代後期に相当する土器・石器が多数出土している。この出土土器については、以下のように大別する。

第1群　早期押型文土器群
第2群　早期繊維土器群
第3群　前期末葉土器群
第4群　中期初頭土器群（五領ヶ台式）
第5群　中期中葉土器群（勝坂式）
第6群　中期後葉土器群（曽利式・加曽利E式）
第7群　後期初頭土器群（称名寺式）
第8群　後期前葉土器群（堀之内式）
第9群　後期中葉土器群（加曽利B式）
第10群　晩期浮線文系土器群

このうち本遺跡で出土した縄文時代の土器は、その大部分が第8群の堀之内式と第9群の加曽利B式となり、他は数少ない。よって、第8・9群以外は細別を行っていない。

第8群土器

A類　称名寺式の系統を引く深鉢。
B類　口縁部から屈曲する頸部は無文となり、以下に主たる文様を施文する深鉢。
C類　底部からほぼ直線的に外反する朝顔形の深鉢。
D類　口縁部から屈曲する頸部に主たる文様を施文し、胴下半が無文となる深鉢。
E類　口縁部から胴上半にかけて格目文を施す深鉢。

F類　口縁部から胴上半にかけて縄文を施す深鉢。
G類　口縁部から底部まで無文となる深鉢。
H類　鉢形土器を一括する。
I類　浅鉢形土器を一括する。
J類　注口土器を一括する。

第9群土器

A類　底部からほぼ直線的に外反する朝顔形の深鉢。
B類　口縁部が内湾し、3単位の波状縁となる深鉢。
C類　頸部に若干の括れを有し、胴下半が無文となる深鉢。
D類　口縁部から胴上半にかけて格目文を施す深鉢。
E類　口縁部から底部まで無文となる深鉢。
F類　鉢形土器を一括する。
G類　浅鉢形土器を一括する。
H類　注口土器を一括する。

焼土坑1出土土器（第46図4・5）

いずれも、第8群C類に比定されよう。4は2条の沈線で文様帯を区画し、口唇部には8の字状の貼付文を施す。文様帯内には地文として単節縄文が施文され、渦巻状のモチーフが沈線で描かれる。沈線間は縄文が磨り消されている。5は無文の底部から胴下半にかけての破片である。

焼土坑2出土土器（第46図1～3）

1・2は第8群B類に比定されよう。1は口唇部に沈線が巡り、4単位の突起が施される。突起下には頸部まで沈線が垂下する。胴部上半には地文として単節縄文が施文され、複数の沈線によって渦巻文とそれを連結する弧状文が描かれる。2は、頸部から胴部上半の破片。複数の沈線で弧状のモチーフが描かれる。3は第8群B類の底部破片と思われる。

1号住居跡出土土器（第46図1～10・第47図11～26・第48図27～44）

1～3・15・16は第8群A類に比定されよう。いずれも懸垂化の進んだ文様が沈線によって描かれる。2・3は口縁部に沈線が、16は口縁部に沈線と列点が巡る。17・23は第8群B類に比定されよう。17は口縁部の破片で、有刻の隆帯が垂下する。23は頸部の破片で、横走する有刻の隆帯下には、沈線で懸垂文が描かれる。4～8・19・20・22・24は8群C類に比定されよう。4は口縁部破片で、2条の沈線で文様帯上端を区画し、斜行する2条の沈線と縦位の有刻の隆帯が確認される。5も口縁部破片で、有刻の隆帯が口縁部を巡ると同時に縦位にも施される。6・7は文様帯に複数の沈線で渦巻状のモチーフを描く点で共通するが、6は口縁部に1条の沈線が巡り、渦巻状のモチーフが描かれる箇所は突起状に盛り上がる。文様帯は2条の沈線で上端が区画され、突起状の盛り上がりに対応するように渦巻状のモチーフが複数の沈線で描かれ、単節縄文が施されるが帯状となっていない。7は有刻の隆帯で文様帯上端を区画し、8の字状突起が施され、渦巻状のモチーフは帯縄文となる。8は8の字状突起が施された有刻の隆帯が文様帯の上端を区画し、縦位区画を持つ三角文が施される。縄文は帯状施文とはならない。19は菱形のモチーフが重層的に描かれる口縁部破片。20は口唇部に突起をもつ口縁部破片。22は口唇部内面に刻文が施される。24は帯縄文で渦巻状のモチーフが描かれる。9は第8群D類に比定される。主要なモチーフは8と同様であるが、縄文が帯状施文となっている。10は第8群H類に比定される胴下半の破片で、渦巻状のモチーフが描かれる。縄文は帯状施文となる。11・18は第8群E類に比定され、11は口縁部下に沈線が巡る。12は第8群F類で、器面調

整痕が認められる。13・25は第８群Ⅰ類に比定される。13は口縁部内面に有刻の隆帯で鋸歯状のモチーフを描き、起点となる箇所には竹管状工具による刺突文が施される。27～36は第８群Ｊ類に比定される。27は注口と把手の破片。28は把手と体部上半が残存し、隆帯で文様を描くがモチーフは判然としない。29・30・35は体部の破片で、29は屈曲部に明瞭な稜をもち、30は屈曲部に隆帯が巡る。36は２条の併行する沈線間に列点を施す。32は把手部の破片。32～34は注口部の破片である。37～43は底部破片で、底部外面には37が木葉痕、38～43には網代痕がみられる。

９号配石出土土器・土製品（第49図１～13）

１は口縁部から底部まで無文となり、第８群Ｇ類に比定されよう。２は格目文が施されるもので、第８群Ｇ類あるいは第９群Ｄ類に比定される。３は第９群Ｃ類に比定されよう。口唇部には刻みが施され、口縁部には横走する複数の沈線間に縄文が施文され縄文帯を表出し、「の」の字文が縦位に施文される。４～８は第８群Ｊ類に比定される。４は注口部の破片、５～７は把手部、８は体部の破片で沈線間に列点が施される。10～12は底部破片で、底部外面に網代痕がみられる。13は土偶顔面の破片。

10号配石出土土器（第49図１～６）

１は若干内湾する口縁部破片で、横走する複数の沈線間に縦位の区切文が施される。第９群Ｆ類に比定されよう。２は第７群の口縁部破片か。３は第８群の口縁部突起。４は第８群の胴部破片。５は第９群Ａ類の破片と思われる。６は底部破片。

11号配石出土土器（第50図１～16）

１は口縁部が屈曲する第８群Ｊ類の口縁部破片。２・３は第８群Ｇ類に比定される無文の深鉢。４は縦位に文様が展開する第８群Ｃ類の口縁部破片、５・９は第７群に比定されよう。６は沈線が細線化する第８群Ａ類の口縁部破片。７・８は第８群Ｃ類の口縁部破片で、８には有刻の隆帯が巡る。10・11・13は第８群Ｂ類に比定されよう。10・13は胴部に複数の沈線で懸垂化したモチーフを描く。12は頸部の破片で有刻の隆帯が施文され把手を有すことから第８群Ｊ類か。14は第８群Ⅰ類で、内面に文様が施文される。15は沈線間に列点を施すもので第８群に帰属するが、器種が判然としない。16は第８群Ｊ類の把手部破片。

12号配石出土土器（第51図１～３）

１は第８群Ｇ類に比定される調整痕が顕著な無文の深鉢。２は第８群Ｂ類で、口縁部に沈線が巡る。３は第８群Ａ類の胴部破片で３本の沈線が垂下する。

13号配石出土土器（第51図１～11）

１・３・５は第８群Ａ類で、口縁部に沈線や列点が施され、胴部には複数の沈線が垂下する。４・６は第８群の口縁部破片だが、Ａ類かＢ類か判然としない。７・８は第８群Ｂ類の胴部破片。複数の沈線によって渦巻状のモチーフが描かれる。９は列点と沈線が施される胴部破片。２・11は第８群Ｊ類。２は体部上半に隆帯で楕円状のモチーフが描かれる。11は注口部の破片。10は第８群Ⅰ類の口縁部破片か。

36号焼土出土土器（第51図１）

１は第８群Ｃ類の口縁部破片。帯縄文によって文様を表出している。

Ｈ－６グリッド出土土器（第52図１～４）

１は第９群Ｅ類に比定される。口唇部内面に押捺文が施される。２は第９群Ｆ類に比定される。３本の横走する沈線間に縄文と縦位の区切文が施される。３は鉢形土器だが無文のため、８・９群いずれに所属するか判然としな

い。4は第9群G類に比定されよう。内文は体部中位に施され、底部外面には網代痕がみられる。

H－7グリッド出土土器（第52図1～4・第53図5～9）

1は第9群F類に比定される鉢形土器で、縄文帯に無文帯と縦位の区切文が施される。2は縄文帯内に波状の沈線が縦位に描かれるもので、8群終末から9群に比定されるものと思われる。3・4は格目文の施されるもので、3の口唇部形態は9群A類と類似していることから、9群D類になろう。4は8群E類か9群D類か判然としない。5は底部外面に網代痕がみられるもの。6は8群C類に比定される。有刻の隆帯が2条巡り、8の字の貼付文が付される。隆帯下には2条の横走する沈線間に弧線文が施される。7は第9群F類に比定されよう。横走する沈線間に弧状あるいは斜位の沈線が施される。8は無文の鉢形土器で、第8群H類あるいは第9群F類に比定されよう。9は第9群A類となろう。縄文帯に「の」の字状の文様が施される。

遺構外出土土器1（第53図1～6）

1は第8群H類で、4単位の突起を持つ波状縁となる。内折する口縁部には沈線と列点による文様が施され、体部は無文となる。2～6は第8群B類。2～4は胴部に複数沈線により文様を描き、3は地文に縄文を施文する。5・6は口縁部の破片で5は突起下から隆帯が垂下し、6は有刻の隆帯が弧状に垂下する。

遺構外出土土器2（第54図1～13）

1は第8群A類で、沈線により懸垂化したモチーフが描かれるもの。2～5は第8群C類で、2～3は有刻の隆帯が口縁部に巡り、帯縄文で文様が表出される。4は有刻の隆帯が2条巡り、8の字の貼付文が付される。5は口唇部に突起をもち、入組状のモチーフが口縁部を巡る。口縁下には沈線で渦巻状のモチーフを描く。6・7は第8群B類の胴部破片と考えられ、6は蛇行沈線、7は渦巻状のモチーフが描かれる。8は第9群A類で3単位の突起を持つ。突起下には「の」の字文が描かれ区切文が施された縄文帯が巡る。9～11は鉢形土器となる。9は口唇部の形状や文様から第8群H類に比定されよう。10は体部に沈線で文様を描くがモチーフが判然としない。口唇部の形状を参考にすると9群F類に比定されようか。11は無文となり、底部外面に網代痕がみられる。第8群H類あるいは9群F類に比定されよう。12は内傾する口縁部に環状の把手が付されるもので、第6群加曽利E式の終末に比定される深鉢と思われる。13は幅広の縄文帯に沈線でクランク文が崩れたようなモチーフが描かれる。口唇部には8の字状の貼付文がみられ、口唇部直下内面に文様が巡ることから第8群C類の範疇で捉えたい。14は第9群A類で、3条の沈線が横走するが一部が途切れ、区切文と同様の効果を表出している。

遺構外出土土器3（第55図1～10）

1～5は第9群F類に比定されよう。1～4は体部に複数の沈線が巡り、帯状の文様構成をとり、いずれも縦位の区切文が施される。5は沈線による帯状構成が長円文に変化したもの。6は口唇部に稜をもち、体部には細刻文を充填した3条の沈線が巡るもので、第8群H類に比定されよう。7は無文のもので体部下半が残存していないため、器形が判然としない。8は第9群B類に比定される。3段に渡る縄文帯が縦位の区切文で連結するようなモチーフとなる。9は第9群C類に比定される。口縁部には縦位の区切文の施された縄文帯が巡る。括れ部には有刻の隆帯が巡り、胴部上半には口縁部と同様の縄文帯が巡る。10は第9群A類に比定される。口唇部に押捺文が施され、口縁部には区切文が施される複数の沈線が横走する。

遺構外出土土器4（第56図1～6）

1～3は格目文を施すもので、ずれも第8群E類あるいは第9群D類に比定されるものである。1は口縁部が若干内湾するもの。2は外反する口縁部に横走する2条の沈線区画内に格目文が施される。3は胴下半が無文となるもの。4は単節縄文を地文とし、蛇行沈線が縦位に施文されるもので、その文様構成は遺構外出土土器2の13との

関わりが注目され、第8群あるいは第9群に比定される。5は第8群G類に比定され、外面には調整痕が顕著である。6は口縁部から胴部上半にかけて縄文が施されるもので、第8群F類に比定されよう。

遺構外出土土器5（第57図1～15）

1～4は無文の深鉢で、第8群G類あるいは第9群E類に比定され、1・2は口縁部が内湾する。5～15は底部外面に網代痕を持つものを一括した。

遺構外出土土器6（第58図1～21）

1～12は底部の破片を一括した。1～4・9は底部外面に網代痕をもつ破片。6・8は底部外面に木葉痕をもつ破片。7は底部に穿孔がみられる。12は台部の破片。13・15は第8群C類の口縁部破片。13は口縁部に8の字の貼付文が付される。15は口唇部に沈線が巡り、胴部には縦位に文様が展開するもの。16・18・21は第8群A類の口縁部破片。18は地文に単節縄文が施される。17・19・20は第8群B類に比定されよう。17は頸部の破片で、有刻の隆帯がU字状に付される。19・20は口縁部に突起が付され、20では有刻の隆帯が弧状に付される。

遺構外出土土器7（第59図1～21）

1・3・4は内湾する口縁部に隆帯で文様を描くもので、第7群に比定される甕形注口土器の口縁部破片と思われる。2は第8群C類の口縁部破片で、8の字状の突起が付される。5～10は第9群A類に比定される口縁部破片。5・6・9は縄文帯が巡り、5・6には区切文が施される。7・10は同一個体と思われ、横走する沈線間に斜行する沈線が羽状に施される。8は口縁部に突起をもち、突起下には「の」の字文が施文される。11・12・16は第8群B類に比定されよう。11は頸部に8の字状の貼付文が付され、12は有刻隆帯が巡る。16は複数沈線で文様を描く胴部破片。20は第8群A類。17～19は第8群となるが器種が判然としない。19は頸部に把手を持つもので、B類あるいはJ類と思われる。21は第9群H類の体部破片で、集合細沈線で文様を描いている。

遺構外出土土器8（第60図1～14）

1～3・5～10・13・14は第8群J類に比定されよう。1は注口土器の把手及び、注口部の破片。2・3は注口土器の把手部破片。4は第8群I類の口縁部に付された突起の破片。5～11・13・14は注口土器の把手部破片。12は口縁部に付された突起部の破片だが、器種が判然としない。

遺構外出土土器9（第61図1～20）

1・2・4～6・15・20は第8群J類に比定される注口土器で、1は体部に帯縄文が、2は沈線により文様が描かれる。3は第9群H類に比定され、集合細沈線により文様が描かれる。4～6・15は注口部の破片で5には渦巻状の文様が描かれる。6は注口部と把手が分離している。7～14・16～19も注口部の破片で、第8群J類あるいは第9群H類に比定されよう。20は注口土器把手部の破片で第8群J類に比定されよう。

遺構外出土土器10（第62図1～32）

1は尖底部の破片で早期に属するものだが、無文のため細別時期は判然としない。2～6は楕円の押型文が施されるもので第1群に比定される。8～16は第2群に比定され、胎土に繊維を混入し条痕文が施されるものである。17・18は第3群に比定される口縁部破片で、いずれも口縁部に刺突文が施され、17は刺突文下には集合沈線による文様がみられる。19は第4群に比定される口縁部破片で、口縁部には縦位に細沈線が施文され、頸部には交互刺突文を施す隆帯が巡る。20・22・23・24は第5群に比定される。20・22は結節沈線がみられ、23・24は幅広なキャタピラ文が施される。21・25・26は第6群に比定されよう。21・26は「ハ」の字文が施される曽利式の破片。25は地文の単節縄文に沈線が垂下するもので、加曽利E式の破片であろう。27～30は第7群土器に比定される。27はJ字

文のモチーフが施文されるもの。28・29・30は同一個体と思われ、やや太い沈線で文様を表出している。31は沈線区画内に列点が充填されるもので、第7群あるいは第8群A類の胴部破片である。32は頸部の若干の括れる部位に、押捺を施した隆帯が巡り、口唇部には有刻隆帯で不正円形の突起が付される。口縁部から押捺隆帯下にはLR単節縄文が施文される。

遺構外出土土器及び土製品11（第63図1～32）

1～17は第10群に比定されるもので、1～10・13～17の精製の鉢あるいは浅鉢に比定されるものは、浮線文による菱形のモチーフが描かれる。11・12は甕の口縁部破片と思われ、2条の沈線が巡る。18～20は小型土器を一括した。18は口縁部に把手を付し、2条の沈線が巡る。19・20は無文となり調整痕が確認される。21～28は土器片端部を加工した土製円盤。29～31は土製の壷である。29は無文の小型もので完形となる。30は橋状の把手部周辺に沈線や刺突文が施されるもの。31は端部破片で複数沈線により文様を描く。32は無文の端部破片。このうち、30・31はその文様から第8群土器に伴うものと考えられる。

・出土石器

石器は観察表に詳細を記載したが、打製石斧・横刃型石斧・磨製石斧・磨石・石皿・石棒・石錘・石鏃・石錐・小玉などの石器が出土している。本遺跡は旧河川と山からの土砂の流入のよって、調査区全域で礫が多い。今回の調査では、花崗岩や玄武岩系の丸い石が多く、かなりの量を採取してしまったが、明瞭なスリ痕や敲き痕があるもののみ、実測し図版に掲載した。全体的に製品が少なく、加工途中の、しかも未製品にまで及ばない石材段階のものが多いようである。調査区内で確認された礫類は、遺跡周辺の山地に分布するものがほとんどで、特に記載する石材はなかったが、出土した黒曜石を分類し、抜き出した30点ほどの産地同定をおこなったところ、多くは長野県産であったが、なかには神津島や箱根産が含まれていた。この箱根産の黒曜石は分析したものの中の1点のみだが、めったに遺跡から出土しないというので、その搬入ルートが注目される。また、黒曜石は小さなチップ状のものも含めて約800点ほど出土しているが、石鏃などの製品はわずかで、その多くが加工途中の剥片や石核であった。石核が多いこともこの遺跡の特徴といえる。

第2節　弥生時代から古墳時代の遺構と遺物

弥生時代～古墳時代の遺構は確認できなかったが、平安時代の遺物に混ざって、弥生時代中期・後期と古墳時代前期の遺物が十数点出土している。（第64図）弥生時代中期では壺片（2～4）が、また後期では甕片（1・5～10）がそれぞれD－8・9グリッド・G8～H8に集中している。中期の壺片は関東に分布の中心がある平沢式に類似するものである。後期の甕では2個体分検出されていて、その内の1つは、口唇部に刻みがあり、細い棒状工具で内外面とも磨かれた小型のものである。もう1つは、県史の編纂による弥生後期5A段階の金の尾式に相当する時期のものと考えられる。また、図版に掲載しなかったが古墳時代前期の小型壺型土器の破片が数点出土している。

第3節　平安時代の遺構と遺物

・土坑（第26～28・30図）

1号土坑

J－6グリッド。直径1.1m・深さ0.1mの円形。遺物は無し。1号溝と西側の一部が接している。

2号土坑

J－6グリッド。長軸1.0m・短軸0.9m・深さ0.25～0.75mを測る。32号焼土遺構と隣接している。遺物は縄文土器が数点出土したのみである。

3・4・5号土坑

I－7グリッド。3基が南北に切りあっているが、新旧は明らかではない。3号土坑は、最も南側で推定0.6m

の円形で、深さは0.1m程だが、落ち込みが確認できた。4号土坑は真ん中に位置し、推定長軸0.95m・短軸0.6mの楕円形で、深さは0.1m程である。5号土坑は、3つのうち北側に位置し、一辺0.6mの隅丸方形をしている。深さは、0.1m程で、西側のすみに落ち込みがある。遺物は、3号土坑が土器片4点と炭化種実1点（炭化材片と一緒に採取された）、4号土坑が炭化材片1点、5号土坑が土器が2点出土している。

6号土坑

F－6グリッド。直径0.85mの円形で深さ0.15mを測る。遺物は無し。周辺に炭化材片などが散布している。

7号土坑

H－8グリッド。直径0.7mの円形。深さ0.05mを測る。26号焼土遺構に隣接し、遺物は炭化材片1点のみである。

8号土坑

G－6～H－6グリッド。長軸2.23m・短軸1.13mの瓢箪形を呈し、深さ0.22mを測る。25号焼土遺構と切りあっており、新旧は8号土坑が古く、25号焼土遺構が新しい。遺物は炭化材片が2点採取されているのみである。

9号土坑

G－6グリッド。長軸1.4m・短軸1.0m・深さ0.28mを測る。床面一面に炭化材が敷きつめられている。覆土中に焼土は少なく炭化した材が敷きつめられた下には焼土層が薄く体積している。12号土坑と共通している。遺物は炭化材片が30点採取されている。そのうちの1点は炭化種実である。

10号土坑

G－6グリッド。28号焼土遺構と接している。新旧は不明。推定直径0.68mの円形で、深さは0.1mを測る。遺物は無し。

11号土坑

G－6グリッド。9・10号土坑に挟まれている。長軸0.84m・短軸0.55m・深さ0.07mをはかる。南側に0.4メートルの落ち込みがある。遺物は、縄文土器1点・炭化材片1点が採取されている。

12号土坑

G－6～7グリッド。長軸0.95m・短軸0.8mの楕円形で深さは0.25mをはかる。調査区内の土坑の中では最もしっかりした堀方をもつ。9号土坑と同様、床面全体に炭化材を敷きつめその真下には焼土層が薄く体積している。炭化材は、細めの枝状だったことが肉眼でも確認でき、固く焼き締められた炭のようである。遺物は縄文土器片が1点、炭化材片が23点採取されている。

13号土坑

H－8グリッド。長軸1.05m・短軸0.83m・深さ0.2mの楕円形。底面は鍋底状。西南側が少し飛び出した形をしており、深さもやや窪んでいる。遺物は縄文土器片が1点出土している。覆土上層からの出土のため埋め戻された時の紛れ込みと考えられる。

14号土坑

E－7グリッド。長軸0.85m・短軸0.55m・深さ0.23mを測る楕円形。14号配石遺構の西端に位置している。遺物は土師器坏片が1点出土している。

15号土坑

G－7グリッド。長軸1.1m・短軸0.5mの長楕円形で深さは0.33mほどを測る。7～8点ほどの礫が土坑内中程に入っている。遺物は炭化材片が3点採取されている。そのうちの1つは炭化種実である。土坑南隅の覆土上層からの出土である。

16号土坑

K－7グリッド。長軸0.95m・短軸0.6m・深さ0.05mの楕円形。2号溝の東側に位置している。遺物はない。

17号土坑

J－4グリッド。直径0.76mの円形で深さは0.18～0.26mである。遺物は無し。底面に小さな落ち込みが幾つか

存在するが、根っこによる撹乱と考えられる。

18号土坑

Ⅰ－7～8グリッド。長軸1.18m・短軸0.78（推定）m・深さ0.2mの楕円形。底面は鍋底状を呈する。遺物はない。

19号土坑

Ｅ8～Ｆ8グリッド。長軸2.23m・短軸1.05m・深さ0.1mを測る隅丸長方形。遺物は土器が2点、土師器坏体部片1点、炭化材片が2点採取されている。

25号土坑

Ｋ－5グリッド。推定長軸0.88m・短軸0.76m・深さ0.3mの楕円形を呈する。34号土坑より新しい。遺物は出土していない。

29号土坑

Ｊ－6グリッド。長軸5.33m・短軸0.83mの隅丸長方形。深さは0.3mを測る。1号土坑と切りあっている。新旧は1号土坑を29号土坑が切っている状態である。遺物は覆土中から縄文土器が2点ほど出土している。

30号土坑

Ｋ－6グリッド。長軸2.3m・短軸0.58m・深さ0.47mの隅丸長方形。底面は皿状を呈している。遺物は一括で取り上げた土師器坏片が1点、黒曜石片が3点出土している。

31号土坑

Ｋ－5～6グリッド。長軸2.03m・短軸0.57m・深さ0.1mの隅丸長方形。底面は皿状を呈している。遺物は特になし。33号土坑と切りあっている。新旧は33号土坑が31号土坑より後につくられていると考えられる。

32号土坑

Ｆ6～7・Ｇ－7グリッドにまたがる。長軸3.38m・短軸0.73m・深さ0.45～0.6mを測る。底面は鍋底状になる。遺物は3点、土師器坏片1点と縄文土器2点が出土している。

33号土坑

Ｋ－5グリッド。長軸2.13m・短軸0.63m・深さ0.1mの隅丸長方形。底面は皿状を呈している。31号土坑と切り合いがある。遺物は特になし。

34号土坑

Ｋ－5グリッド。長軸は推定1.8m・短軸0.6m・深さ0.5mの長楕円形で、底面は鍋底状を呈す。25号土坑と斬り合っている。新旧は25号土坑の方が新しい。遺物は出土していない。

35号土坑

Ⅰ－4～Ｊ－4グリッド。長軸1.8m・短軸0.55m・深さ0.07mの長楕円形。底面は皿状を呈している。遺物は特になし。

36号土坑

Ⅰ－7グリッド。長軸2.8m・短軸0.83m・深さ0.25mの隅丸長方形。遺物は出土していない。

・焼土遺構（第22～26図）

1号焼遺構

Ｌ－5グリッド、調査区南西の壁面にて確認されたため、完掘していない。主軸は北西一南東。長径は1.4m・深さ0.57mを測る推定楕円形である。遺物は、土師器甕片が2点出土している。

2号焼土遺構

Ｈ－4グリッド、約0.5mの円形で、深さは0.06～0.12m、こぶし大の礫が5つ底面に配置されているが5つとも焼けた形跡はない。遺物は、堰方から0.05mほど離れたところから土師器坏体部が1点出土している。本来の確認面は、もう少し上位と推定されるため、遺物は、2号焼土遺構に含まれると解釈している。遺構内から縄文土器

3点が一括資料として採取されている。

3号焼土遺構

平面で観察したときは、南西から北東に長軸をもつ楕円形の焼土範囲と、その北西側に位置する炭化材片の範囲に明確に別れていたが、調査をすすめるうちに様相が違う事が判明したため、とりあえず、ここでは、焼土の含まれるほうを3－1、炭化材のみのほうを3－2として記述しておく。

3－1は、K－5グリッド。長軸0.9m・端軸0.55mの楕円形。深さ0.1mを測る。長軸の主軸は北東―南西で、炭化材片が1か所採取できたほか、遺物らしきものは出土していない。3－2は、K－5グリッド。直径0.85mの円形で深さ0.12mを測る。焼土を殆どふくまないが、半裁した断面観察では、炭化材を含む黒褐色層の堆積が認められる。遺物は、縄文土器が1点と炭化材片が4点採取できた。

4号焼土遺構

H－6グリッド。楕箪形で長径1.39m、短径0.85m、深さ0.09～0.15mを測る。遺物は出土していない。主軸は、北西―南東にある。

5号焼土遺構

I－6グリッド。不整形で、東西1.31m、南北1.1m、確認面では、焼土の集中する箇所が3か所あり、その周辺に若干焼土が散る状態であった。ベルトを焼土の中心にあせて十字に設定したころ、それぞれの深さ0.13mほどで、上層0.05mほど焼土の堆積がみられた。遺物は、炭化材片が11点検出されている。

6号焼土遺構

I－4グリッド。平面的には5号焼土遺構のように不整形で、焼土の集中する箇所が大小2か所確認できた。この遺構では、この2か所を分けて調査したところ、1つは長軸1.16m・端軸0.7mの・深さ0.07～0.11mのそら豆型になり（6－1）、もう一つが長軸0.55m・短軸0.42m・深さ0.12mの卵形になった。1～5号焼土遺構に比べ、焼土の堆積が薄く一定でない。しかし、炭化材片が多く含まれ、10点の炭化材片を採取しそのうちの2つは種である。この他、縄文土器土器・石器を1点づつ検出した。

7号焼土遺構

I－5グリッド。5・6号焼土遺構同様不整形で確認されている。これも、3か所の焼土集中箇所がある。全体に焼土が散る。いつくかの土坑のきりあいがあるのかもしれないがはっきりしない。きりあいがある場合、南側から7－1、7－2、7－3とする。7－1は、長径1.3m・短径約1m・深さ0.07mの楕円形、7－2は推定長径1.5m・短径推定0.75m・深さ0.04～0.1mの長楕円形、7－3は3つの中で最も堀り込みがはっきりしていて、東西0.75m・南北0.73mの隅の丸い三角形をしている。それぞれ、皿上に焼土が堆積している。遺物は7－2の中央やや西寄りから、黒曜石の破片が1点検出されている。

8号焼土遺構

J－5グリッド。長径1.5m・短径0.92m・深さ0.2mを測る楕円形。主軸は北北西―南南東。1～7号焼土遺構に比べてしっかりとした堀方をもつ。底面は鍋底型。焼土は皿状にちょっと厚めの堆積。遺物は、炭化材片2点と石器1点が検出されている。

9号焼土遺構

J－5グリッド。長径1.5m・短径1.05m・深さ0.2mを測る卵形。主軸は、ほぼ南北。遺物は炭化材片3点・骨片2点・鉄製品1点が出土している。骨片が出土したのは本遺構と隣のグリッドから検出された10号焼土遺構の2基のみで、貴重な資料だが、人骨か獣骨かの判断はできない。

10号焼土遺構

I－5グリッド。長軸1.7m・短軸0.9m・深さ0.3mを測る隅丸長方形。主軸は北東東―南西西。本遺構は西を20号焼土遺構と北を炭化材片の集中箇所とに隣接しており、それらの周辺全体に細かい炭化材が散らばる状態であった。遺物は炭化材片が6点、骨片が2点出土している。上記で記したとおり、9・10号焼土遺構からのみ、骨片が出土している。

11号焼土遺構

Ｊ－５グリッド。長軸1.43ｍ・短軸0.8ｍ・深さ0.15ｍを測る楕円形。主軸は北北西一南南東。遺物は石が６点・炭化材片が２点出土している。第２層には、灰のような黄薄色の細かい土壌が混ざっている。

12号焼土遺構

Ｊ４－５グリッド。長径1.18ｍ・短径1.1ｍ・深さ0.13メートルを測るほぼ円形。焼土層の上層から平安時代の土師器坏底部が１点出土している。また、覆土中より打製石斧が出土している。

13号焼土遺構

Ｋ－５グリッド。長径1.59ｍ・短径0.75ｍ・深さ0.14～0.24ｍを測る隅丸長方形。主軸は北北西一南南東。覆土の混ざる焼土層が堆積する。すぐ西側には炭化材片の集中する範囲が確認されている。遺物は縄文土器が１点、土師器が１点、炭化材が２点出土している。

14号焼土遺構

Ｊ－４～Ｋ－４グリッド。長径1.36ｍ・短径0.94ｍ・深さ0.2ｍを測る楕円形。主軸は北北西一南南東。遺物は縄文土器が４点、土師器皿底部片が１点、合計５点が出土し、炭化材片２点が検出されている。

15号焼土遺構

Ｉ－７グリッド。西側に８号溝状遺構が隣接する。長径1.66ｍ・短径1.0ｍ・深さ0.15ｍを測る楕円形。主軸は北東東一南西西。遺物は土師器１点、縄文土器３点の合計４点と炭化材片が10点である。

16号焼土遺構

Ｉ－６グリッド。５号焼土遺構の調査後、すぐ横から西側から検出された。長径1.46ｍ・短径0.92ｍ・深さ0.1ｍを測る楕円形。底面は皿状。遺物は出土していない。

17号焼土遺構

Ｉ－８グリッド。北西端の一部が調査区外となる。長径1.55ｍ・短径1.09ｍ。深さ0.14ｍを測る楕円形。遺構内東側床面に直径ほぼ0.6ｍの円形に炭化材片が多く集中しており、堀り下げると深さ0.4ｍほどの小穴となった。この小穴ないは、ほとんど炭化材で充填されているようにみられ、特に５層の下部は炭化材の純層と言っていいほど濃い部分であった。遺物は、縄文土器１点、礫３点、炭化材６点であり、そのうちの一つは、小穴の内の出土で、桃か梅のような種である。

18号焼土遺構

Ｈ－７グリッド。遺構の南西側ほぼ半分は、第２試掘穴によって破壊されている。しかし、その形は不整形でいくつかの重複があるとも考えられる。しかし、平面や断面での観察でもその切りあい関係はわからなかった。長軸は2.5ｍ・短軸は0.82～0.47ｍで深さは0.35ｍである。炭化材の多くは第６層中にあり、そのうちの１点が梅・桃科の種で、全体では４点出土している。土器は４点出土し全部土師器で、甕・坏２点づつである。黒曜石が１点出土している。炭化材は、遺構の南側に集中している。全体に炭化材が散らばっているため、はっきり遺構確認ができなかった。

19号焼土遺構

Ｇ－７・８／Ｈ－７・８グリッド杭にかかる。22号焼土遺構が東側に隣接している。長軸は2.15ｍ・短軸は0.97ｍ・深さ0.13ｍを測る。不整形をしている。遺物は炭化材片３点である。

20号焼土遺構

Ｉ－５グリッド。10号焼土遺構と隣接する。長軸1.32ｍ・短軸0.95ｍ・深さ0.25ｍを測る卵形。遺物は土師器坏底部１点と炭化材片３点が出土している。

21号焼土遺構

Ｈ－６グリッド。長軸１ｍ・短軸0.84ｍ・深さ0.17ｍを測る隅丸長方形。焼土は北西側に多く堆積し、底面には炭化材片の集中が見られる。その範囲は長軸0.78ｍ短軸0.48メートル深さ0.1ｍの楕円形である。遺物は土師器坏体部片１点と鉄製品１点である。

22号焼土遺構

G－8グリッド。直径0.93m・短径0.7m・深さ0.15mの卵形を呈する。底面1皿状。遺物は土器口縁部が1点出土している。口縁部分の輪積の部分がよく観察できる。

23号焼土遺構

L－5グリッド。長軸0.62m・深さ0.3mを測る。調査区北壁から検出された。遺物は縄文土器1点。

24号焼土遺構

F－6－G－6グリッド。直径0.65・深さ0.2mを測る円形。底面は鍋底。36号土坑に隣接し、その周辺には焼土が散る。この土坑は、他の遺構と違い、焼土の純層がなく、炭化材の純層がある。他の遺構と性格を異にするのか。しかし、確認面では焼土が多少ちっていた。遺物は、炭化材1点が出土。多きめの木材片である。

26号焼土遺構

H－8グリッド。直径0.4m・深さ0.04mの円形。底面は皿状。遺物が土師器3点・縄文1点の合計4点とその周囲から4点の炭化材が出土している。遺物は全体に床面より高い位置にある。本来の堀り込みはもっと上層からであろう。隣接する7号土坑と同一の可能性もある。焼土のみの単層。

27号焼土遺構

G－8グリッド。長軸1.34m・短軸0.57m・深さ0.07mの長楕円形。礫は被熱しているようでもある。全体に焼土粒子を含むが多くはない。単一層。遺物は縄文1点・炭化材1点である。30号焼土遺構と隣接する。

28号焼土遺構

G－6グリッド。長軸1m・短軸0.75m・深さ0.2mの楕円形。底面は鍋底状を呈している。かなり高い面から遺物は土師器甕頸部が1点出土している。10号土坑と切りあい、その関辺には9・11・12号土坑が隣接している。

29号焼土遺構

G－9グリッド。長軸1.1m・短軸0.71m・深さ0.15m程の楕円形。底面は鍋底状を呈している。遺物は土師器坏口縁1点のみ出土。堆積土中の中央に焼土の純層が存在しその下層も焼けている。

30号焼土遺構

G－8グリッド。長軸0.54m・短軸0.45m・深さ0.1mの卵形。底面は皿状。遺物は土器1点出土している。27号焼土と隣接する。この当たりの焼土は、若い番号とは違い堀方はっきりせず、焼土の堆積も薄くて疎らであるようだ。確認面が低すぎるのか、遺構本来の性格が違うのかはっきりしない。

31号焼土遺構

G－9グリッド。長軸0.92m・短軸0.61m・深さ0.14～0.28mの楕円形。遺物は出土していない。北側にテラスをもち南側が落ち込んでいる。焼土層が比較的厚く堆積している。

32号焼土遺構

J－6グリッド。長軸1.15m・短軸0.83m・深さ0.3mの楕円形。底面は鍋底状。遺物は縄文土器4点。炭化材3点・石2点・炭化材は堀方周辺からの出土。

33号焼土遺構

E－8～9グリッド。直径0.45mの円形・深さ0.1m。焼土単層。炭化材1点・溶岩1点。ここまでが、平安時代の焼土遺構と考えているが、34・35号焼土遺構の検出されているレベルも他のものとかわらない。36号焼土遺構については、1号住居跡と同じレベルでの検出のため、縄文時代と考える。

・配石遺構（第31～34図）

1号配石

H－3～1－3グリッド。幅0.45・長さ2.25～2.4mの帯状の礫群が東西方向に東からみて逆「イ」の字を形成している。上層に拳大の石が敷き詰められて、下層にいくほど人頭大の大きな石に変わる傾向がある。堆積は0.3m～0.6mあり暗渠にも類似している。遺物は縄文土器片のみである。

2号配石

H－5グリッド。幅0.45・長さ2.2mの帯状の礫群が北西一南西方向に延びる。1号配石と類似している。検出面が1号配石より0.3m低く、上層の拳大の石が削平されていると考えられる。これも「イ」の字型に形成されていたと推定できる。1・2号配石ともその軸を延長してみると不規則で何かを区画しているようではない。墓こうの可能性も指摘されている。遺物は縄文土器片のみである。

3号配石

H－4グリッド。1・2号配石と形を異にし、直径1.5mほどの円形に広がる。拳大～人頭大の石が混在している。遺物は縄文土器片のみである。

4号配石

E－7・8～D－7・8グリッド。北北西一南南東を軸にする長さ7m・幅1mほどの帯状の石群から南西方向に広がる範囲を4号配石とする。この最も北側のまとまりから、北宋銭「至道元寶」が1点出土している。そのほか周辺からは土師器の破片を確認できる。

5号配石

C－7・8～D－7グリッド。拳大～人頭大の石が北東一南西に帯状に広がり、北西隅の小礫の集まりは、集石遺構としたものに類似している。配石中央の石群の脇から、北宋銭「景祐元寶」が1点出土している。4・5号配石遺構は分けるのが難しく、便宜的にわけただけである。この一体から土師器の破片が多く出土しているが、実測に耐えれる大きさのものではない。須恵器の破片は少ない。

7号配石

I－5グリッド。拳大～人頭大の石が直線的に広がる。丸くて平たい大きめの石が列になっている。

17号配石

J－6グリッド。直線的な配石で掌台の丸い石で構成されている。7号配石遺構と連続する可能性がある。

・集石遺構（第41～43図）

1号集石

G－9グリッド。長軸45cm、短軸35cmの円形に3～10cmほどの大きさの礫が集合している。確認面は237.59～237.604mで、深さは25cmを測る。礫を取り除いた床面から微量の焼土が確認されたが、礫そのものは焼けている形跡がない。遺物は特に無い。

2号集石

F－9グリッド。長軸50cm、短軸35cmの円形に3～10cmほどの大きさの礫が集合している。確認面は237.634～237.664mで、深さは15cmほどを測る。1号集石に比べ密集度が低く、検出時には炭化材が散らばっていた。礫を取り除いた床面から微量の焼土が確認されたが、礫そのものは焼けている形跡がない。遺物は無い。

3号集石

C－9グリッド。長軸52cm、短軸46cmの楕円形に5～15cmほどの大きさの礫が集合している。確認面は238.552～238.586mで、深さは20cmを測る。1・2号集石に比べ礫が大きい。遺物は無い。

4号集石

C－9グリッド。長軸75cm、短軸46cmの円形に2～18cmほどの大きさの礫が集合している。確認面は238.65～238.68mで、深さは15cmを測る。確認面での礫は密集しているが大きさに差があり、2面めの礫は10cmほどのものが置かれている。近接する3号集石とは2.2mの距離がある。遺物は無い。

5号集石

D－9グリッド。長軸1m、短軸70cmの不整形に3～20cmの大きさの礫が混ざっている。北東の一部が4号トレンチで壊されている。確認面は238.214～238.29mで、深さは20cmを測る。1～4号集石とは様相を異にしている。11号石の大きさと類似している。遺物は無い。5－2号集石はD－8・9グリッド。長軸83cm、短軸40cmの楕円形

に５～13cmほどの礫が集合している。確認面は238.414～238.571ｍで、深さは10cmを測る。遺物は無い。

６号集石

Ｃ－８・９グリッド。長軸1.7m、短軸40cmほどの帯状に広がるもので、２～10cmの大きさの礫が集合している。確認面は238.549～238.69ｍで、深さは15cmを測る。遺物は無い。

７号集石

Ｃ－８グリッド。長軸1.4m、短軸１ｍほどの不整形に広がるもので、６～30cmの大きさの礫が集合している。確認面は238.512～238.688ｍで、深さは15cmを測る。遺物は無い。

８号集石

Ｃ－９グリッド。長軸1.2m、短軸90cmの円形に４～20cmの大きさの礫が集合している。確認面は238.32～238.46ｍで、これらを取り除いた後の２面目では、10～30cmの礫が中心になる。最終的な深さは25cmを測る。確認当初は１～４号集石に類似した形態をしていたが、下にいくにしたがって大きさを増す形態をするようになる。遺物は無い。

９号集石

Ｃ－10グリッド。長軸2.8m、短軸90cmの帯状の広がりに２～24cmの大きさの礫が集合している。帯の中心部に大きめの礫が集中し、それを取り巻くように小さい礫がある。８号集石と形態は同じである。そして、その間隔は4.4ｍである。遺物は無い。

10号集石

Ｅ－９グリッド。直径60cmの円形で、５～20cmの大きさの礫が集合している。深さは20cmを測る。

11号集石

Ｃ－９グリッド。他の集石と違い20～30cmの礫が集合している。最も近い４号集石から2.3ｍの距離がある。

・出土遺物（第　図）

土師器（第64・65図）

遺跡出土の土師器は、杯片が370点・甕片が265点出土している。ほとんどが破片資料であり、実測できたものは数えるほどしかない。それでも、遺構に関係するものも数点出土しているので記述する。17配石から出土した11は高台付坏で、口径16・底径６・器高6.1cmの法量があり、甲斐型編年Ⅶ期から出現する。また、17は口径18cmにもなる大型のもので、この２つの組み合わせが確認されるのは、甲斐型編年Ⅹ・ⅩⅠ期、年代は10世紀初頭になるであろう。12・14・16は、口径11・器高４～５・底径5.2～5.8cmで、内湾して立ち上がる体部から直にたちあがる口縁部をもつ。見込み部には沈線がある可能性があるが、見込みそのものに暗文があるかどうかは不明。外面は体部半分から下がヘラケズリ、上がナデ。口縁はとくにヨコナデが強い。15は外面全面磨き、内面は暗文。口縁部ヨコナデがある。内湾しながら立ち上がる口縁をもつ。時期が少し古いかもしれない。また、この遺物は、５号配石出土北宋銭の近くから出土しているが、標高が10cmほど高く、遺構が確認される以前に取り上げられている可能性がある。見込み部には沈線がある可能性があるが、見込みそのものに暗文があるかどうかは不明である。16・22は同一個体の可能性が高い。この２点の遺物は３号配石遺構の周辺から出土しており、その幅50cm圏内であるため、遺構に伴う遺物と考えている。標高的にも問題はない。甕は口縁部については甲斐型薄口縁型で、大型と小型がある。薄口縁型はⅥ期から出現しⅩ期までみられる。坏類との関係や羽釜の出土が見られないことから甲斐型編年Ⅹ期頃と考えている。底部はすべて木葉痕である。

須恵器・灰釉陶器（第66図54～65）

土師器に比べ、須恵器・灰釉陶器合わせて45点と出土点数が少ない。しかも、実測可能なものも少ないため、すべて復元実測である。須恵器は坏と甕の破片で、灰釉陶器は長頸壺の胴部と坏の高台部分である。10世紀第２四半期には須恵器の出土が見られなくなる傾向が指摘されているが、土師器に比べてかなり出土量が少ないことと、土

師器の時期から10世紀第１四半期までの時期が与えられるであろう。

鉄・古銭（第66図69～75）

鉄族３点、鋳造された鉄釜の破片が３点、ベルトのバックル（？）が１点出土している。鉄族に関しては、時期が様々である。全体がわかるのは１点で（第66図―69）古墳時代に属する可能性もある。鉄釜は、土師器・須恵器の年代より新しいものと思われ、12世紀の渥美カメを出土した遺構があることから、平安時代以降の遺物のといえる。この鉄釜は、口縁部分が出土しており、それから推定するとかなり大型のものになりそうである。

古銭は「至道元寶」（北宋995年）・「景祐元寶」（北宋1034年）の２点が出土している。

第４節 中世以降の遺構と遺物

・焼土遺構（第25図）

・25号焼土遺構

Ｇ－６～Ｈ－６グリッド。確認面は、炭化材を含む褐色土広がりである。その長軸は東西方向にあり、直径は約110㎝で、南北は約70㎝の長楕円形を呈していた。確認面から土坑底部までの深さは約20㎝であり、陶器片が底部近くで35点ほどが集中して検出されている。陶器片の下部には、覆土より多い炭化材が敷き詰めたように堆積していた。陶器片の取り上げを完了し、底部までを完掘すると直径70㎝の円形の土坑となった。このことから、土坑確認時の平面プランの長楕円形の西側部分は、焼土の広がりを示すものであり、本来の土坑は直径約70㎝の円形を呈するものであることが確認された。

出土遺物は、陶器片が35点ほどである。これらの破片は、口縁部から胴部の状半部近くまでが復元された。（第図　）器形は、口頸部の外反度が大きく、肩部も強く張っている。なお、口唇部には沈線が見られる。口径は40㎝、肩部に最大径があり70.6㎝、胴部は底部に向かって締まる。現高は33.5㎝となっている。紐づくりによる積み上げの跡が認められるが、器面には肩部にあたる一段目と二段目には調整時における叩き目手法による叩き目文が見られる。これらのことから、大甕の年代は12世紀第２四半期としておきたい。

第４章　若干の考察とまとめ

第１節　渥美窯の大甕について

愛知県知多半島と渥美半島は、中世における陶器生産の一大拠点である。知多半島の常滑窯が中世以降も生産が行われ現在に至っているが、渥美窯は中世前半でその生産が終わっている。このことは中世陶器として、山梨に搬入された期間やその製品の数も少ないと予想されるところである。これまでに確認されているものをあげると、次のようなものがある。東八代郡の京原遺跡の壺（12世紀第３四半期）、同郡八代町の金地蔵遺跡の大甕（12世紀第２四半期）、塩山市上萩原の雲峰寺経塚の壺（12世紀第３四半期）、南巨摩郡富沢町の篠井山経塚の大甕（12世紀第２四半期）、甲府市上積翠寺の一の森経塚の経塚容器（12世紀第４四半期）、都留市小形山の中谷遺跡の壺（12世紀第２四半期）等である。渥美窯が開始され間もなく、その製品は各地に運ばれたことが知られているが、山梨の地で発見されているものの多くが12世紀代であることは、そのことを裏付けているといえよう。この時期の渥美窯の製品は、日用雑器としての生産が主体であるが、山梨で発見されている12世紀代の遺物は、碗・鉢などよりも壺・甕類が大部分である。そして、これらの用途は、経塚容器や蔵骨器としてあることから、極めて宗教的用具としての扱いをしていたことが窺われる。

金地蔵遺跡の大甕は、長軸2.5ｍほどの長方形の穴の中に大甕が口縁を南に向けて横たわっていた。また、底部には10cmほどの穴があけられており、内部には人頭骨が存在していたという。さらに、京原遺跡の壺は、直径１ｍ・深さ35cmの土坑内に、口縁部の一部が破損している壺が逆位に置かれており、その上に、板状の石をのせた状態であったという。土坑内には炭化物が多く、壺の内部には焼骨が検出されている。この二例は、渥美窯の製品が蔵骨器としての用途を示すものとしてとらえることができるものであろう。本遺跡の渥美窯の大甕のあり方から、人骨は確認できなかったものの、これらの事例と同様に埋葬用（蔵骨器）として扱ったものと考えておきたい。なお、遺跡の年代と大甕の年代については、必ずしも一致しないことは注意されるところではある。生産地編年をそのまま消費地に当てはめることは、伝世的な扱いを受けていたもの、また、本来の機能を発揮するまで、長期に保管されていたものなど、そのものが、搬入され使用されるまでの時期を慎重に考慮すべきであることは言うまでもない。

第２節　１号敷石住居跡の検証

県内で初めて発見された十字型の敷石を持つ大型の敷石住居跡は、第３章に記述した以外にも、注目される要素をたくさん含んでいるが、今回、その全部について検証することは紙面の都合上不可能である。そのため、前述した遺構について、担当者が発掘調査に基づいた事実を上げながら、それぞれの遺構について考えていく。しかし、各遺構の性格や役割について、細部まで検証できなかったため、事実記載に終始する事をお詫びしておく。まず、この敷石住居跡の問題点をあげると、１．敷石の上層部から検出されている礫群と下層の敷石との関係。２．十字型の敷石と奥壁側の敷石との関係。３．奥壁側の敷石と環礫方形配石遺構との関係という３つがあげられる。

１．上層から発見された礫群とその下層から発見された敷石との関係についてであるが、調査当初、敷居上層の礫群は、環状列石と思うくらいの遺構であった。抱えきれないほどの大きな蒲鉾状の石が円形に巡り、その南東部分は、５～６列の石を台形に配置していたからだ。配石遺構と疑わなかった担当者に、この遺構が、建物の構築材の一部である可能性が指摘されたのは、円形の列石の内側に敷石が確認されはじめた時であった。しかし、敷石と礫群の間には約30cmの土壌の堆積があり、また、上屋構造の外側に積まれていた石が土圧などで、押しつぶされたとは思えないほど石は整然と並べられていた。この遺構は、南東（山側）から北西（谷側）に傾斜する地形に作られている。しかし、台形に組まれた石組みはその平面のレベルがほぼ同じ高さを示していた。また、その組み方も山側から谷側に向かって並べたと考えられるのである。

２・３．上層に配置された礫群を取り除くと、平坦な面を揃えた敷石が検出された。奥壁といえそうな縁石が円

形にめぐり、その内側には三日月状に敷き詰められた敷石と、炉を中心に十字型に敷かれた敷石があった。奥壁側の敷石には、環礫方形配石遺構と呼ばれる小石を帯状に並べた遺構が伴い、その時期差が問題とされた。これを、細かく検討すると、まず、縁石に囲まれた円の直径は約７ｍで、その縁石に沿って敷かれた敷石は、環礫方形配石遺構によって分断されている。ここでは便宜上、縁石に沿った敷石をＡ、環礫方形配石遺構に分断された内側の敷石をＢ、十字型の敷石をＣとして述べていく。（第21図）まず、敷石Ｂについてであるが、環礫方形配石遺構は谷側に開くコの字型をしていて、その内側に敷石Ｂは位置する。環礫方形配石遺構の内側と敷石Ｂが接する両角とその真ん中には、敷石の中でも大きめの平石が敷かれている。この３つの平石の中心から中心までの距離を測ったところ、それぞれ1.7ｍという数値を得ることができた。また、この両角の平石から縁石までの距離を測ったところ、それぞれ1.2ｍという数値が得られた。このことから縁石と敷石Ｂは同じ企画で作られた可能性が高く、縁石と敷石Ａは１つの遺構をなすものであるため、敷石Ａと敷石Ｂは同時期に存在したといえる。そこで問題となるのが、敷石ＡとＢの間に存在する環礫方形配石遺構だが、検出時には、一部敷石Ｂに被さる形であった。これを、４～５回に分けて平面的に取り除いていくと、敷石ＡとＢの間に浅い溝ができた。また、南側の環礫方形配石遺構では、取り除いた下に平石が１枚残っていた。この平石は、他の敷石同様、その周りに小さな石を埋め込んで、隣接する平石との隙間を埋めている。これは、敷石ＡとＢが同一の時期に存在したことが推定でき、環礫方形配石遺構は、敷石ＡとＢの間にあった敷石をはずし、その後作られた可能性が高いといえる。すなわち、敷石Ａ・Ｂと環礫方形配石遺構には、時期差が生じる事になる。次に、敷石Ａ・Ｂと敷石Ｃの関係であるが、敷石Ｃの十字の縦軸は、敷石Ｂの中央にある平石より西に50㎝ずれていることがわかった。しかし、このずれは、環礫方形配石遺構を取り除いたあとに見つかった、敷石ＡとＢをつなぐ　平石とは同じ軸上に位置している。敷石ＡとＢは、敷石Ｂの中心にある平石を軸に左右対称に作られているが、敷石Ｃはその中心軸より西に50㎝ずれ、しかもその延長線上に敷石ＡとＢの間に唯一残っていた敷石があるのである。

敷石上層の礫群が確認された段階での標高は山側から谷側に向かって80㎝ほど傾斜があった。この敷石住居跡が柄鏡型と呼ばれる所以の柄部分を仮に敷石Ｄとして、谷側から掘り進めていくと敷石Ｃにあたる。敷石Ｃ・Ｄの主軸は、敷石上層の礫群の台形部分を貫き違和感なく、軸を通す事ができる。ということは、同時に存在した遺構か否かは明らかではないが、どちらもその存在を意識して作られたと考えられる。また、上層の礫群の台形底辺の真下には、敷石Ａの縁石部分が埋まっている。敷石Ａ・Ｂの真上に石を配置する行為は意図的なものを感じるのである。そして、これらの問題を検証する目安といえるのが、敷石住居内が全面に被熱していることである。敷石及び環礫方形配石遺構全体が、火を受け割れたり酸化してぼろぼろであった。そのため、これらの被熱状態に差があるのか考えた。しかし、見た目では判断できず、とりあえず、環礫方形配石遺構の小礫を平面的に４～５回に分けて取り上げておいたが、これらの被熱を分析する機会に恵まれたためお願いした。そして、表面に近い面から標高が下がるに従い、被熱の度合いも減少していくという結果を得た。この詳細な分析については、後日改めて報告する機会を持ちたいと考えている。

今回発見された十字型の敷石を持つ大型の柄鏡形敷石住居跡は、縄文時代後期堀之内式期に作られたものであることは、出土した遺物から確認できている。堀之内式期は、今から3000年ほど前の数百年にかぎられたものであるが、ここで、検証した遺構は、その一つ一つが、期を同じにしないことが想定される。十字の敷石Ｃと奥壁側の敷石Ａ・Ｂのどちらが先につくられたのかは、今回の検証では明らかにできなかったが、敷石Ａ・Ｂより環礫方形配石遺構が後に作られたことは間違いないと考えている。また、これらの敷石を意識しながら、上層の礫群が作られたことも推定される。したがって、この敷石住居跡は短期間の内に、何度も立て替えもしくは、増築されて、最終段階の環状列石のような体裁をもったものと考えられる。

第3節　ま　と　め

塩瀬下原遺跡は、前回までの発掘調査によって縄文時代中期末～後期にかけての集落跡であることが判明していたが（註1）、第4次調査では、さらに平安時代の遺構・遺物も確認できたことで、この地域の歴史に貴重な資料を提供する事となった。しかし、最も注目されたのは、十字型の敷石をもつ1号敷石住居跡であろう。この住居跡は、縄文後期に属し、県内では初めて検出されたもので県内外の研究者の注目を集めることとなった。1号敷石住居跡の重要性や問題点は、その都度、本文中でふれてきたが、ここでは、他県の例、特に集成ができている神奈川県を参考にしながらみていきたい。

今回の調査で発見された縄文時代の遺構は、環状の礫群と柄鏡形敷石住居跡が重なり合った複雑な遺構（全部合めて1号敷石住居跡とする）と、それを取り囲むような配石遺構などが検出された。敷石住居跡については、かながわ考古学財団が主催したシンポジウムなどの資料（註2）に詳しいが、敷石住居跡の時期を考える上で、ある時期に限ってつくられる要素の1つである環礫方形配石遺構はわかりやすい目安になるであろう。敷石住居の居住部に環礫方形配石遺構をつくるという行為自体は、その発展段階の終末期に限られるといわれ、この資料集の中に掲載されていた環礫方形配石遺構を検出する遺跡は、神奈川県伊勢原市「三ノ宮・下谷戸遺跡（第1東海自動車道No.14遺跡）」、神奈川県伊勢原市「下北原遺跡」、横浜市神奈川区「平台北遺跡」、平塚市「王子ノ台遺跡」、鎌倉市「東正院遺跡」、寒野市「曽屋吹上一配石遺構発掘調査報告書」、愛甲郡清川村「宮ヶ瀬遺跡群鳥場（No.6）遺跡」、津久井郡津久井町「津久井町No.2遺跡（川坂遺跡）」、津久井町青根馬渡遺跡、等である。山梨県内で環礫方形配石遺構が検出された例は無いため、他県の資料に頼らざるを得ないが、環礫方形配石遺構は、その多くが炉を中心に居住部内を方形に区画している。しかし、前述したとおり、本遺構では、炉と環礫方形配石遺構は軸がずれており、同時につくられたとは考えにくい。居住部を方形に区画するには何らかの意味があると推測されるが、その理由は今回も明確にはできなかった。また、敷石上の礫群と敷石の関係は、宮ヶ瀬遺跡群の北原（No.9）遺跡（註3）のJ1号配石遺構とJ4号敷石住居跡の関係と類似している。報告書では、「1列ないし2列で下端の石の上に3～6段ほどの石が積み上げられていたものが、内側に崩れ込んだものと見られる」と石積みであった可能性を指摘している反面、「積極的に同一遺構とみることができない」ともいっている。その理由には、敷石住居跡とその上の礫群との間にある土壌の存在をあげている。多々、論争がなされている建物の構築材の一部との見方に戸惑いがみられる。本遺構についても、「住居の外側に積み上げられた石積みだ」という意見がすでに検討されているが、調査の課程・その結果を細かに検証していくと人為的に礫群を配置したと考えざるを得ない。この立場にたって、敷居住居跡とその上層に配置された礫群は別の遺構と考えたい。しかし、お互いを意識して構築されたことは否定しない。また、敷石下から検出された2基の焼土遺構は、覆土中から、それぞれ完形土器と多くの炭化材を得ることができ、これらについて分析を試みたところ、炭化材からは約4,100～3,740年という年代が、土器内土壌からは動物遺体の存在が導き出された。その結果、これらの遺構が、敷石をつくる以前に存在して、火を使う行為があった事が想像できるのである。この特殊な1号敷石住居跡以外には、この南側に弧を描くように配列された帯状の配石が巡っていて、さらに、外側に円が作られた可能性も考えられる。平安時代は、遺物から10世紀初頭頃に作られた焼土遺構が検出された。この遺構は、楕円形にすり鉢状の底面を持ち、堆積土壌には、焼土がレンズ状に確認されるものが多く、その性格は墓坑とも、土器の焼成遺構とも考えられている。その他、中世以降、多少の変性をもつ遺美産の大甕が出土したり、古代の歴史に不明なところが多い地域に多くの資料を提供できた。

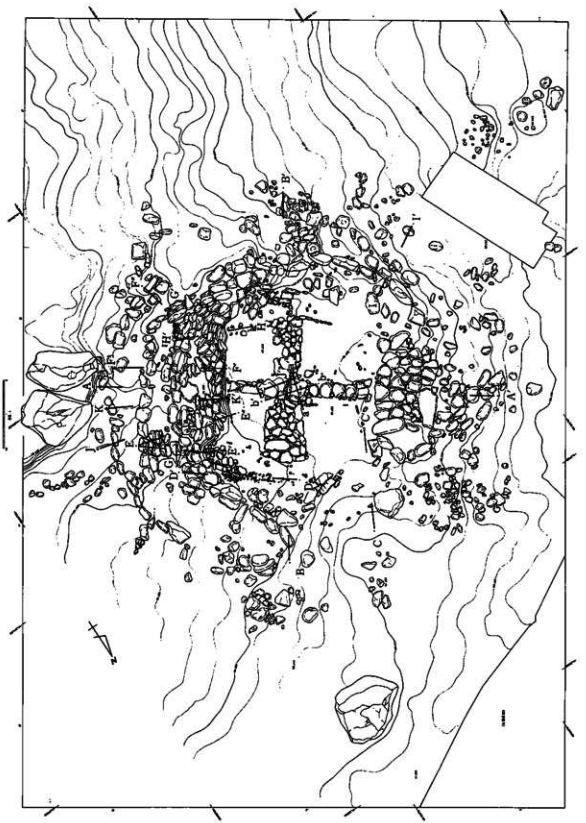
註1　1998　山梨県埋蔵文化財センター『塩瀬下原遺跡概報』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第161集

註2　1996　神奈川県立埋蔵文化財センター『平成7年度かながわの遺跡展－縄の敷石住居－』

　　1996　神奈川県立埋蔵文化財センター・財かながわ考古学財団『敷石住居の謎に迫る』資料集

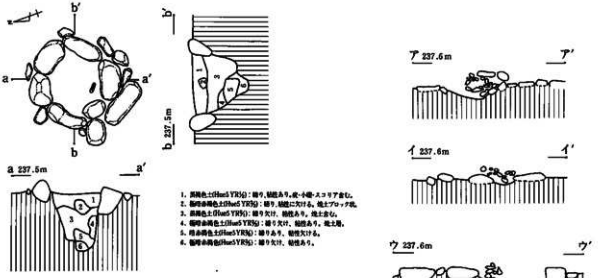
　　1997　神奈川県立埋蔵文化財センター・財かながわ考古学財団『敷石住居の謎に迫る』記録集

註3　1994　神奈川県立埋蔵文化財センター「北原（No.9）遺跡(2)」『宮ヶ瀬遺跡群、』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告21

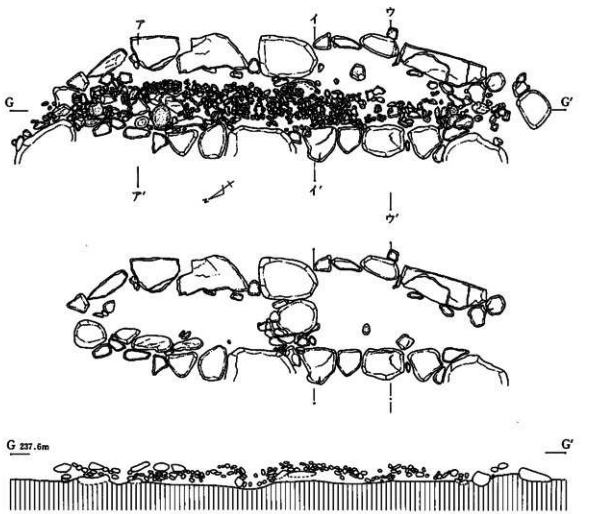


第12図　1号敷石住居 ポイント配置図

第13図　1号竪穴住居跡断面図

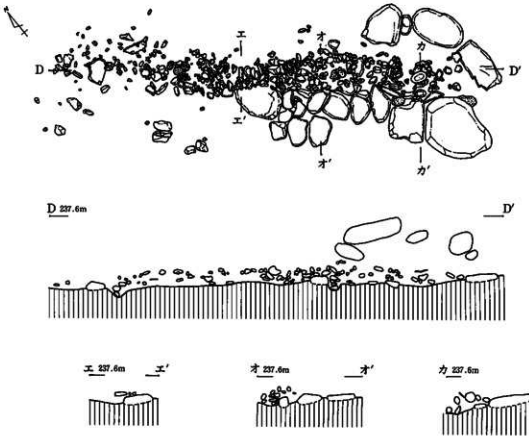


第14図　1住炉跡

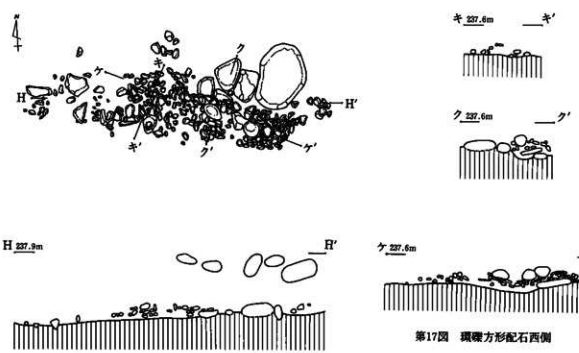


第15図　環礫方形配石 南側

第14・15図　1号敷石住居跡 炉跡・環礫方形配石遺構 平面及び断面図



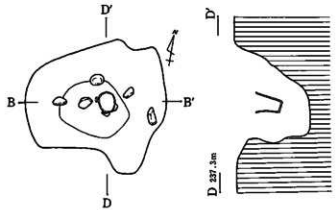
第16図　環礫方形配石 東側



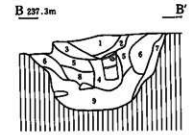
第17図　環礫方形配石西側

0　1m

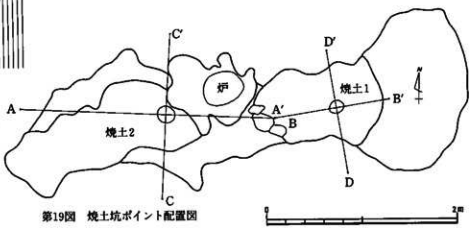
第16・17図　1号敷石住居跡 環礫方形配石遺構 平面及び断面図



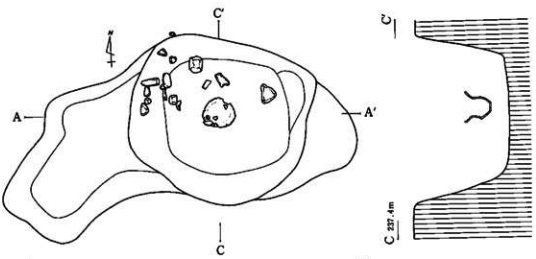
第18図　焼土坑-1

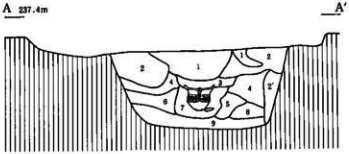


1. 黒褐色土(10ωSYR3/)：
　細り，軟質あり，小礫，スコリア含む。
2. 暗赤褐色土(10ωSYR3/)：
　細り欠け，軟質ややあり。
3. 暗赤褐色土(10ωSYR3/)：
　細り欠け，軟質あり，2層より焼土多い。
4. 暗赤褐色土(10ωSYR3/)：
　細り欠け，軟質あり，炭・焼土含む。
5. 暗赤褐色土(10ωSYR3/)：
　細り欠け，軟質あり，炭・炭含む。
6. 赤褐色土(10ωR4.5YR5/)：
　細り，軟質欠ける，焼土塊。
7. 暗赤褐色土(10ωSYR3/)：
　細り欠け，軟質あり，焼土含む。
8. 暗赤褐色土(10ωSYR3/)：
　細り欠け，軟質あり。
9. 暗赤褐色土(10ωSYR3/)：
　細り欠け，軟質あり，炭多い。



第19図　焼土坑ポイント配置図



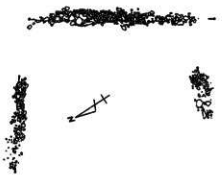


1. 暗褐色土：細り，軟質あり。小礫を多く含む。
2. 暗赤褐色土：細り欠け，軟質ややあり。焼土塊。
3. 暗赤褐色土：2層と類似，焼土塊。
4. 暗褐色土：細り欠け，軟質あり。
5. 暗黄褐色土：細り，軟質欠ける，炭混ざり
6. 暗赤褐色土：細り欠け，軟質あり。
7. 暗褐色土：細り，軟質あり。
8. 暗灰色土：細り，軟質欠ける。
9. 黒褐色土：細り，軟質欠ける，炭化材が多い。

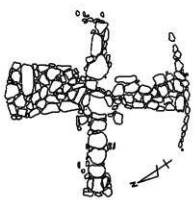
第20図　焼土坑-2

第18･19･20図　1号敷石住居跡下焼土坑1･2 平面及び断面図/ポイント配置図

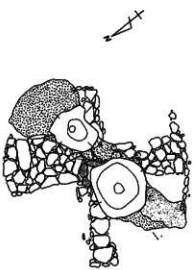
1. 敷石A・B



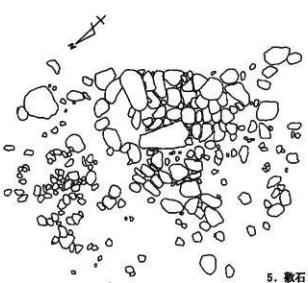
2. 環礫方形配石



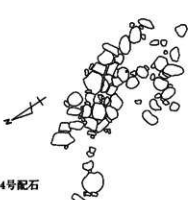
3. 敷石C



4. 敷石Cと焼土遺構

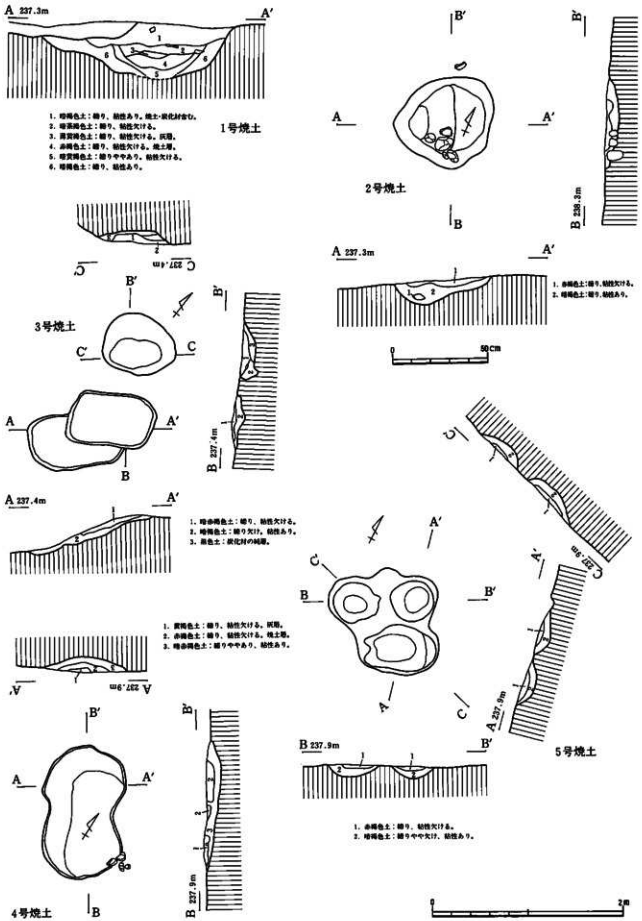


5. 敷石D

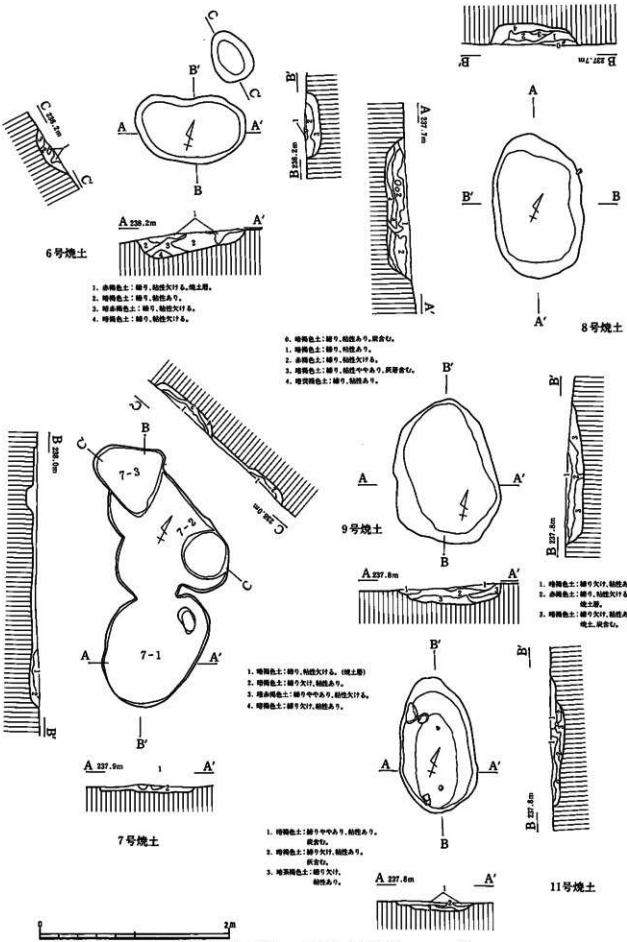


6. 14号配石

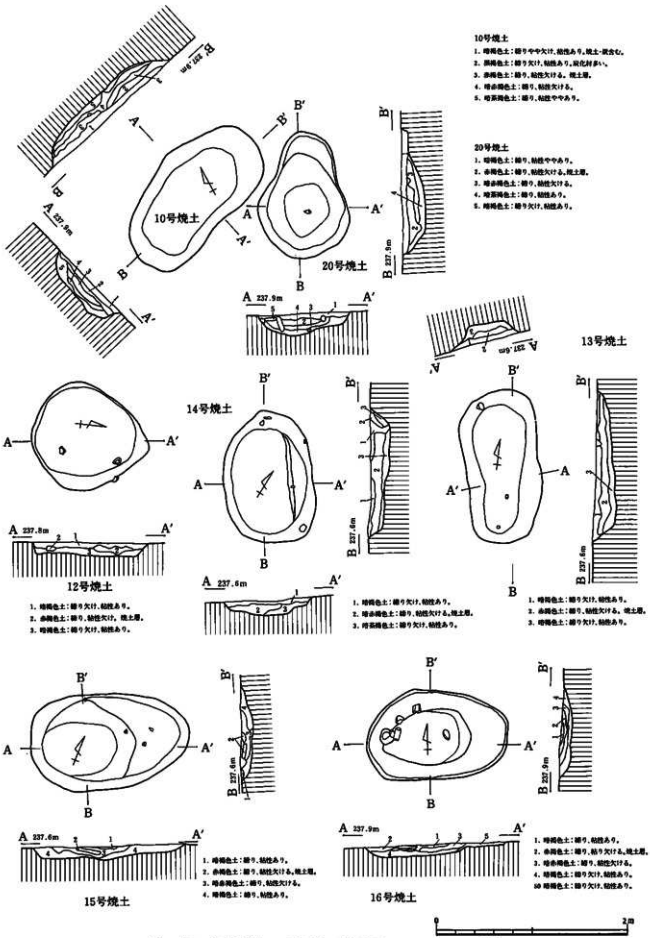
第21図　敷石分割図



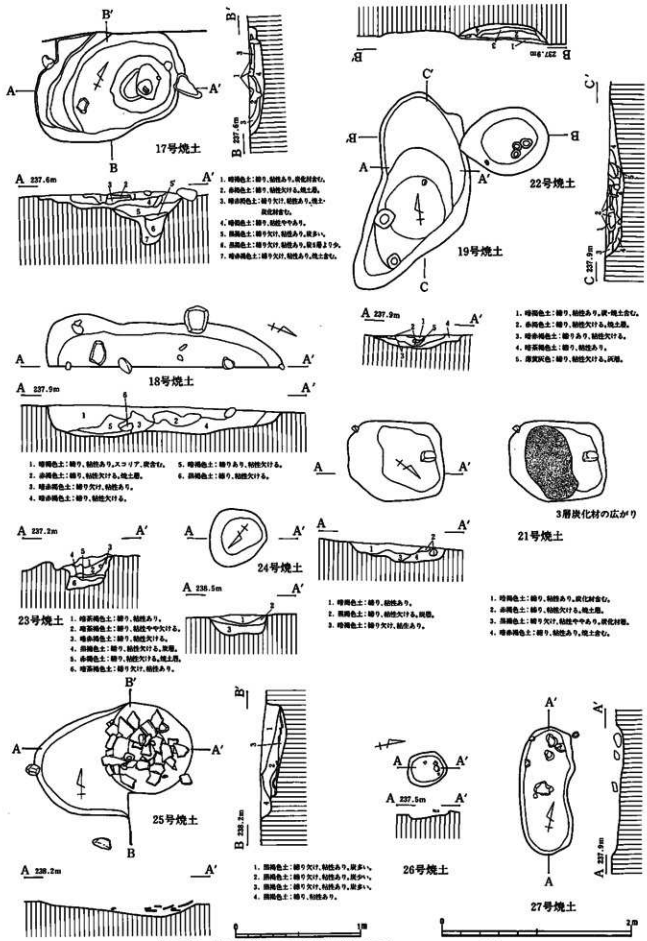
第22図　焼土遺構 平面及び断面図(1～5号)



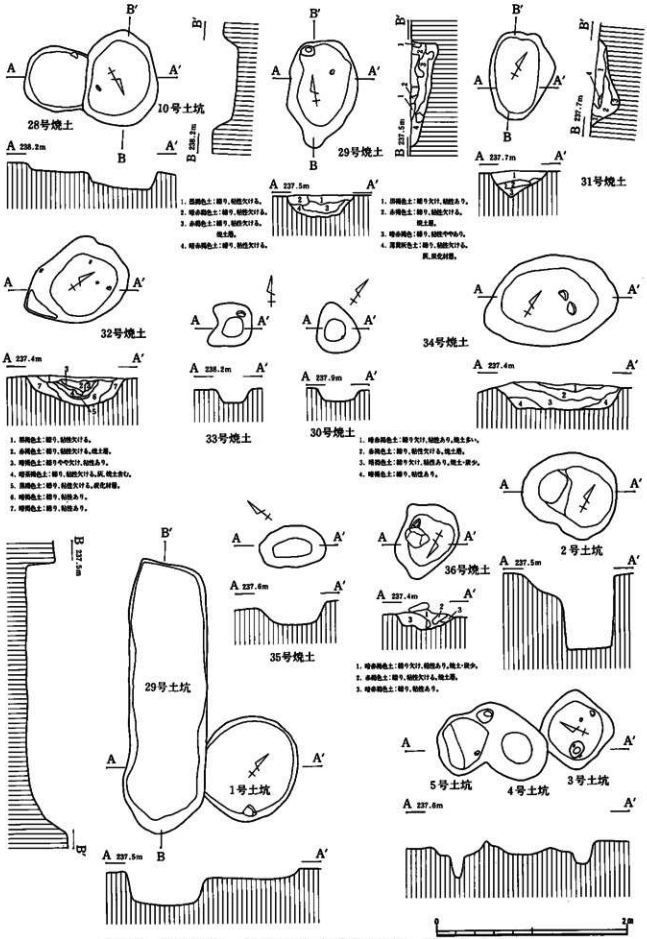
第23図　焼土遺構-2 平面及び断面図（6～9・11号）



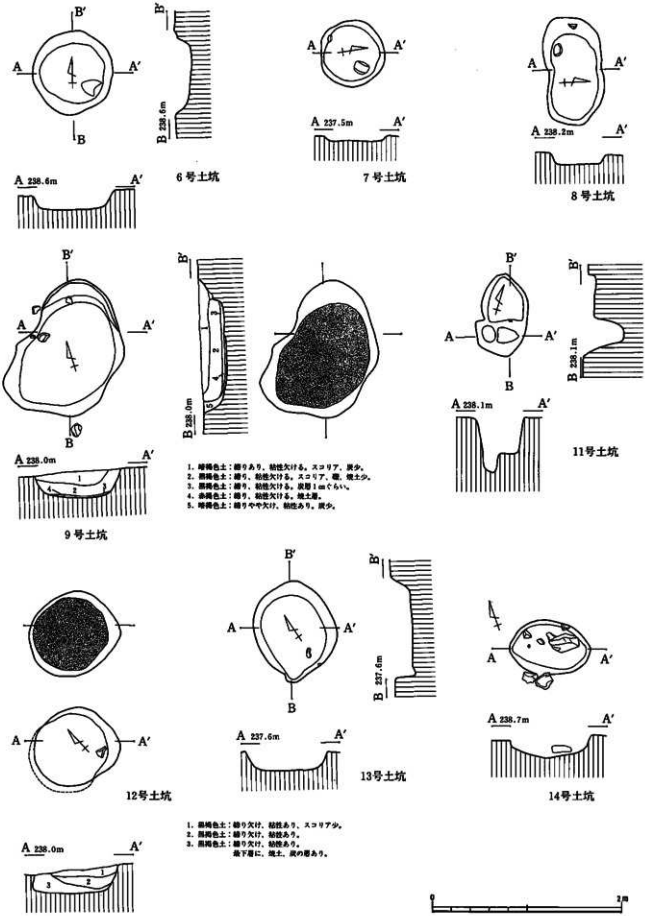
第24図　焼土遺構-3　平面及び断面図(10・12～16・20号)



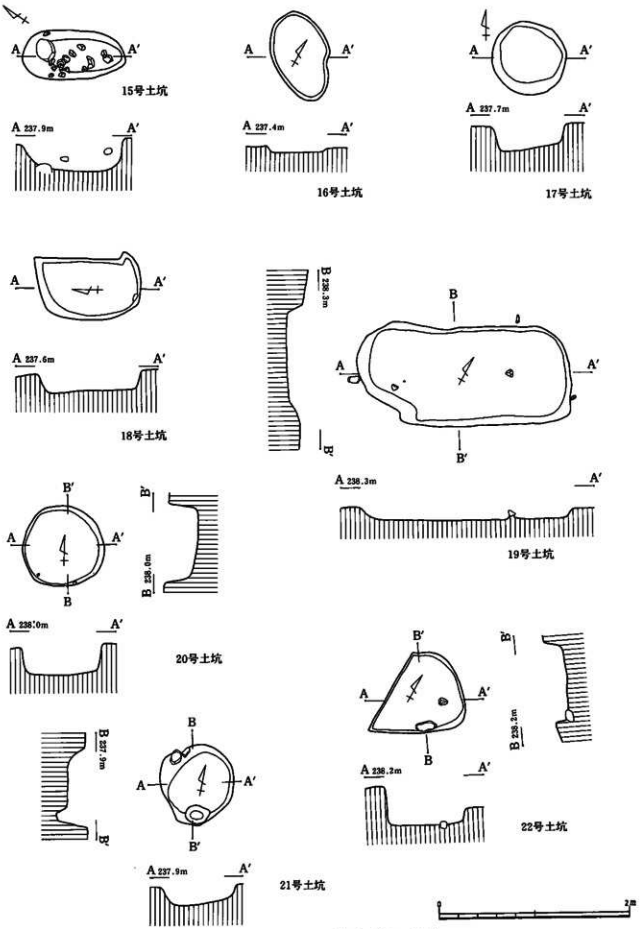
第25図　焼土遺構-4　平面及び断面図(17～19・21～26号)



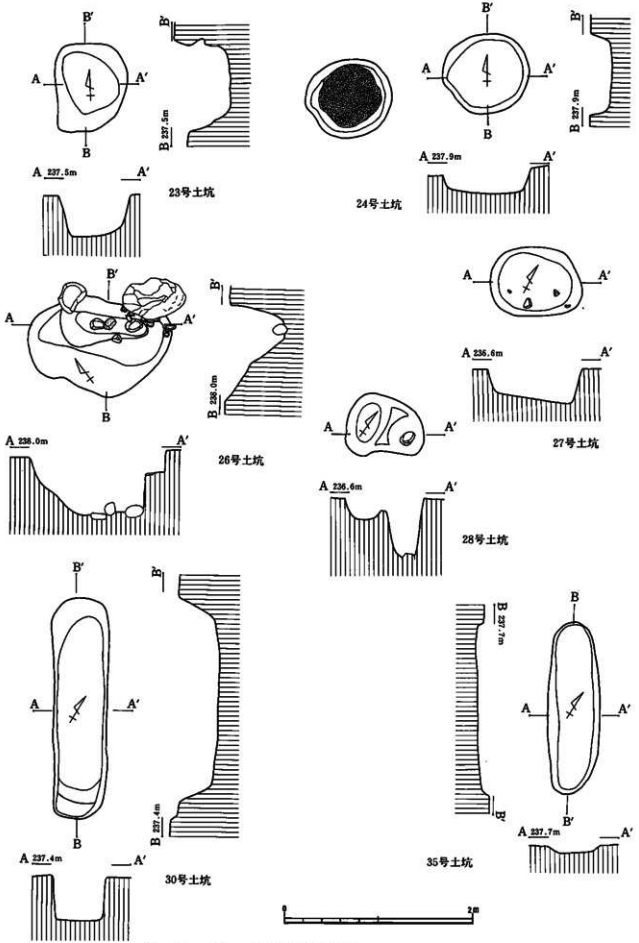
第26図　焼土遺構-5，土坑-1 平面及び断面図(焼28～36，土1～5・10・29)



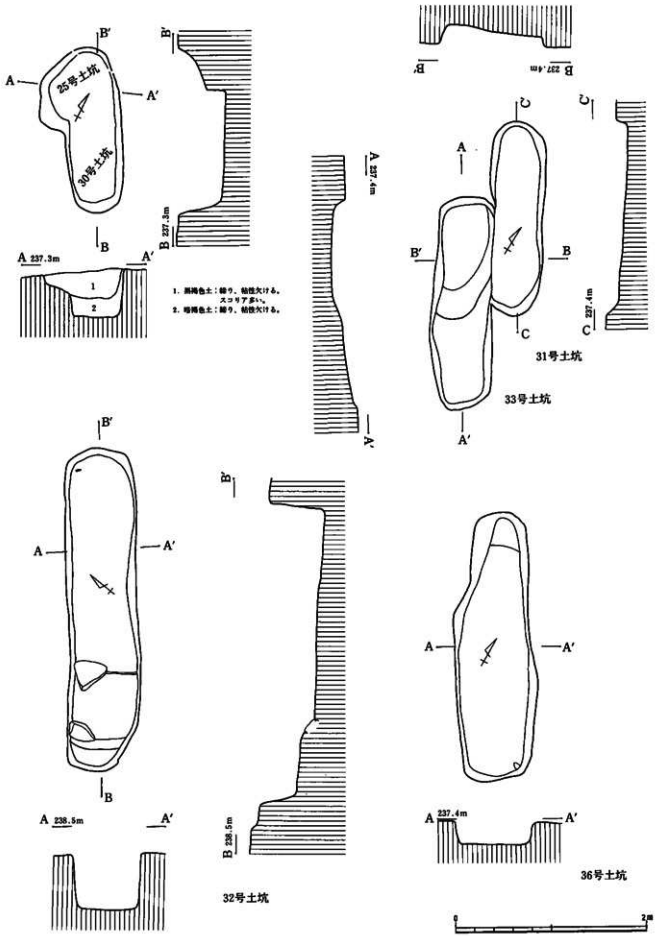
第27図　土 坑-2 平面及び断面図(6～9・11～14号)



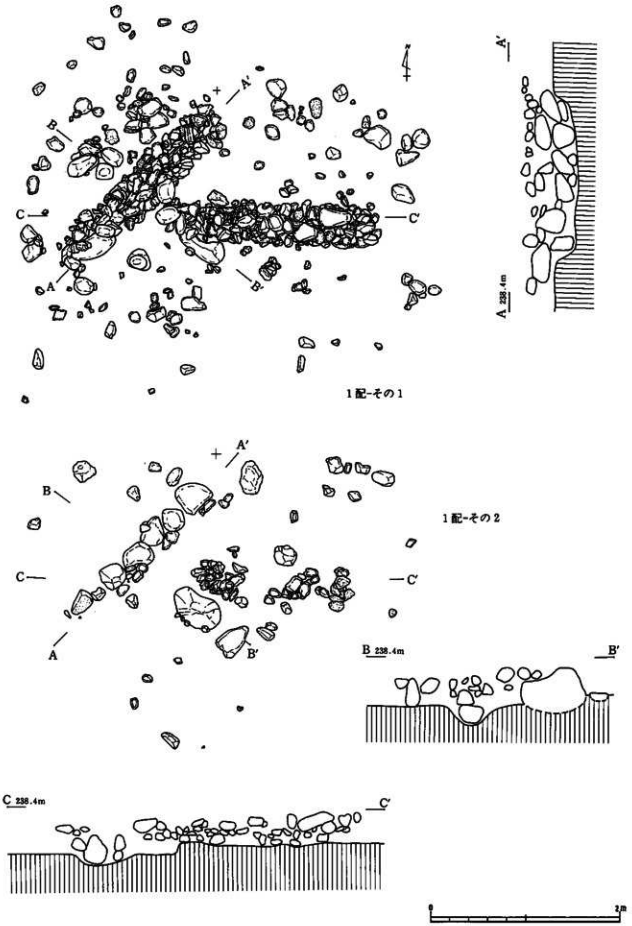
第28図　土坑-3　平面及び断面図(15～22号)



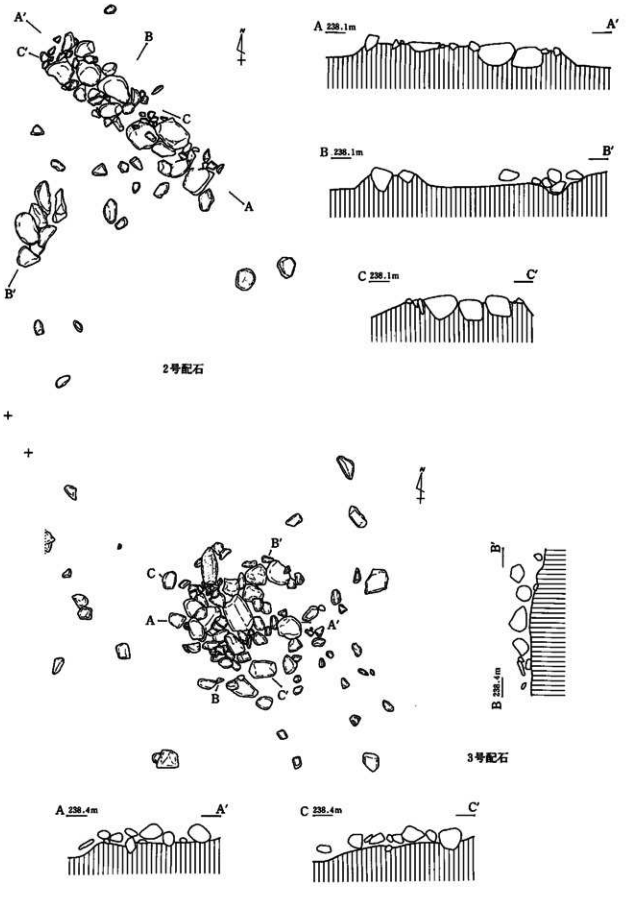
第29図　土坑-4　平面及び断面図(23・24・26～28・30・35)



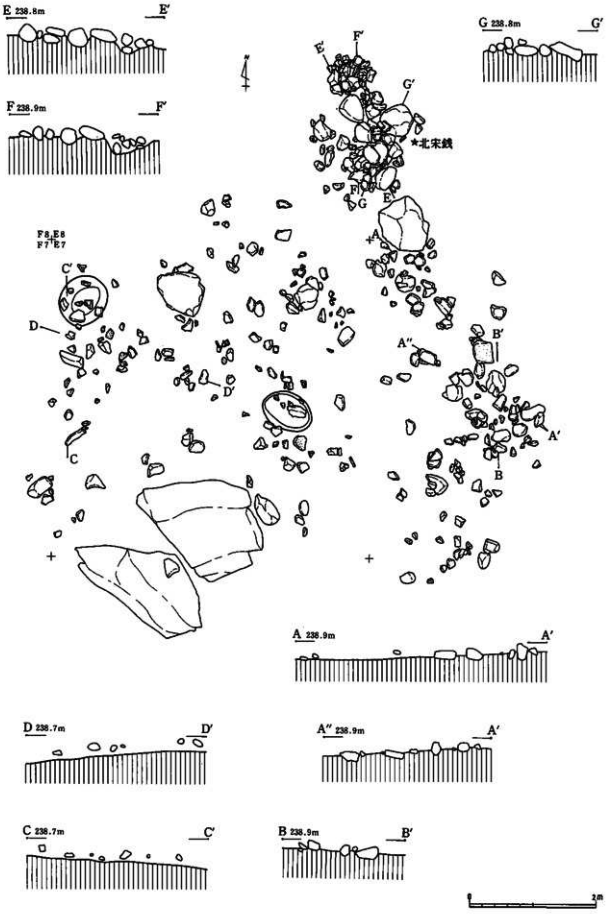
第30図　土 坑-5　平面及び断面図(25・31～33・34・36号)



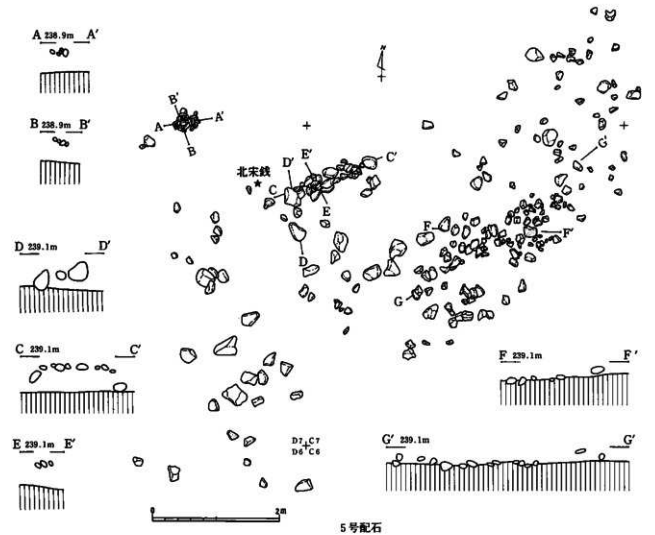
第31図　配石遺構-1　平面及び断面図(1号)



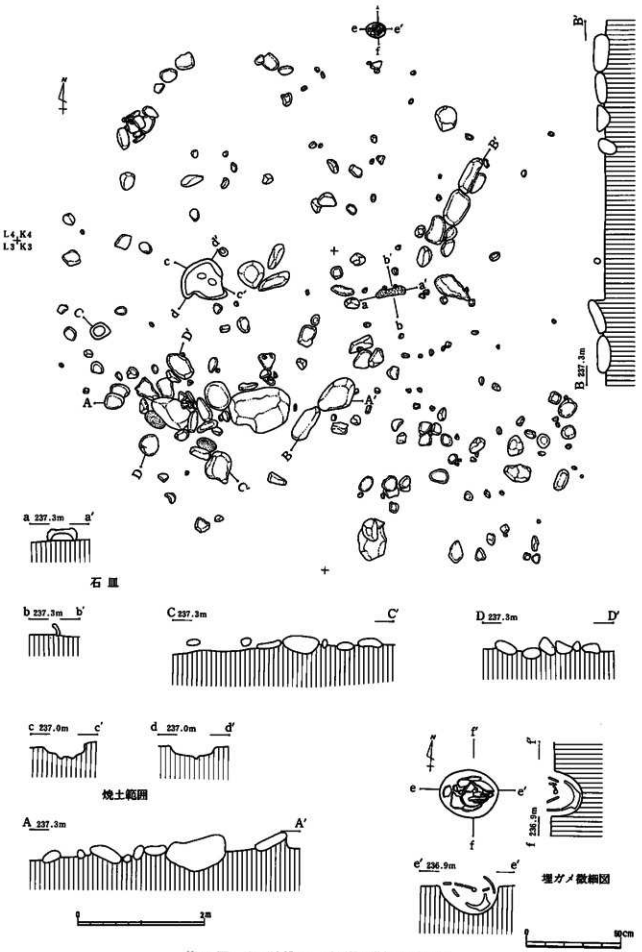
第32図　配石遺構-2　平面及び断面図(2・3号)



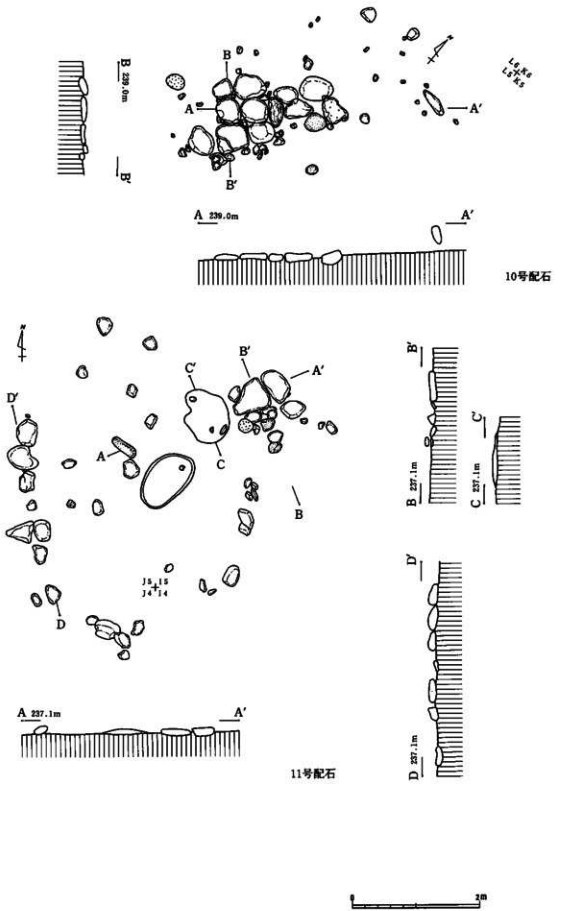
第33図　配石遺構-3　平面及び断面図(4号)



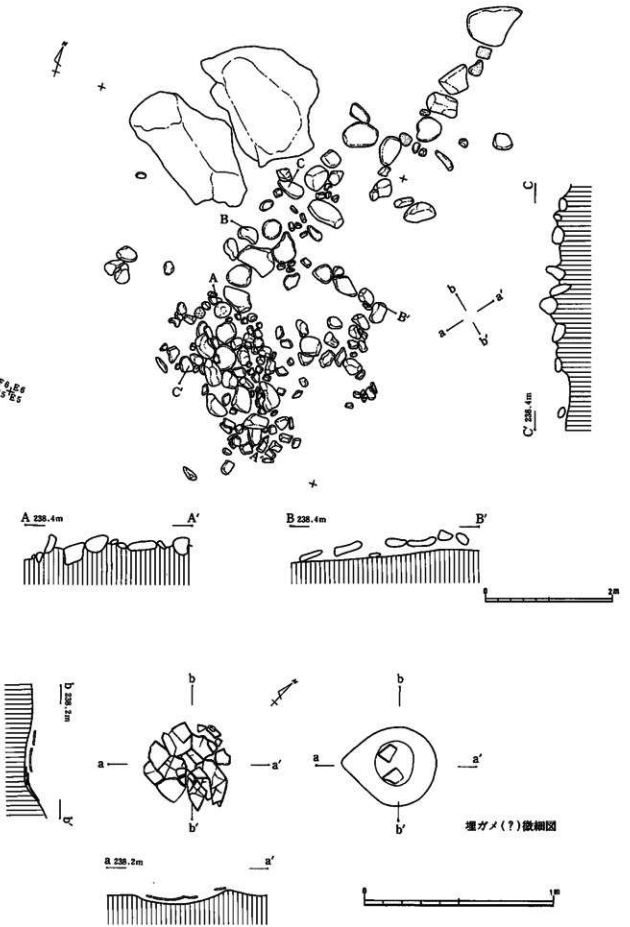
第34図　配石遺構-4　平面及び断面図(5・7・17号)



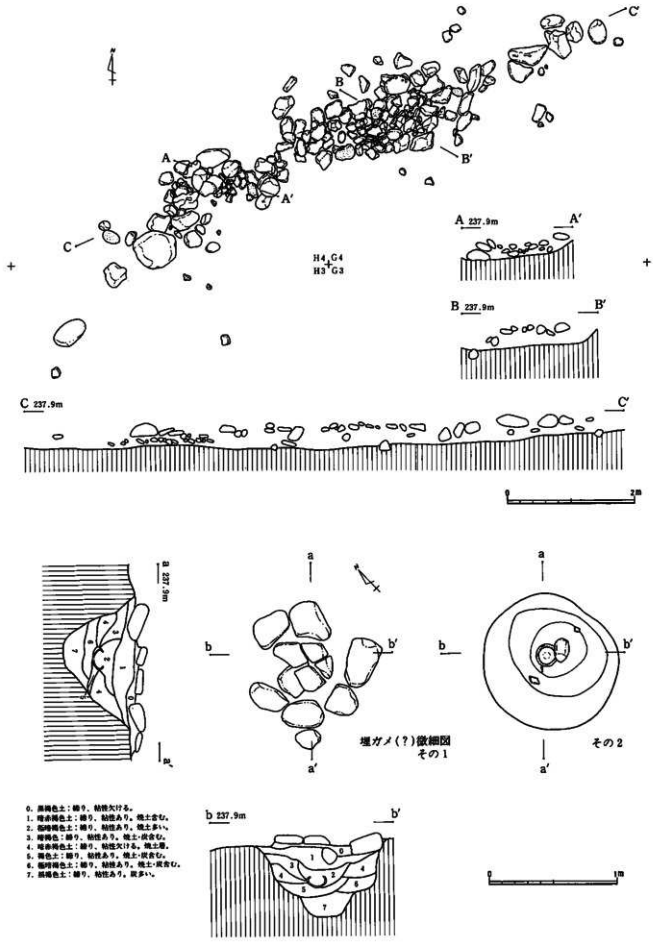
第35図　配石遺構-5　平面及び断面図(9号)



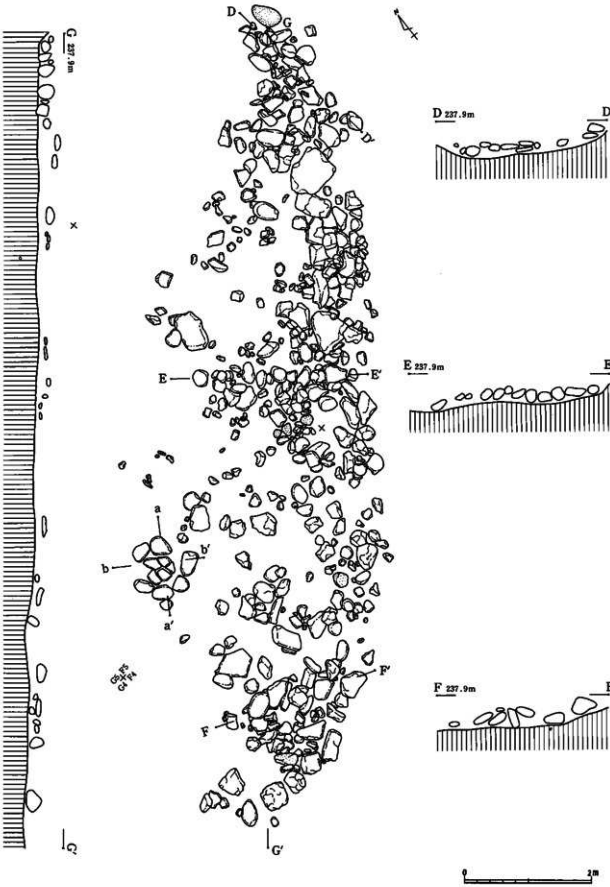
第36図　配石遺構-6　平面及び断面図(10・11号)



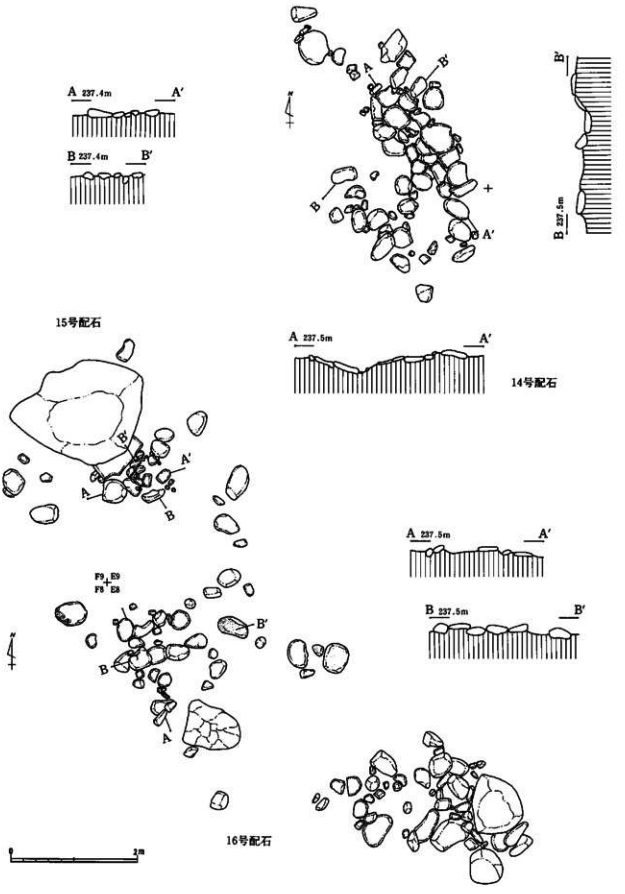
第37図　配石遺構-7　平面及び断面図(12号)



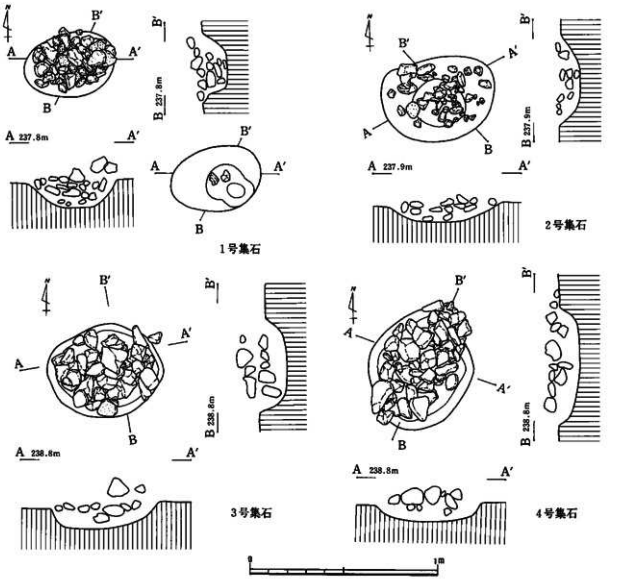
第38図　配石遺構-8　平面及び断面図(13号-1)



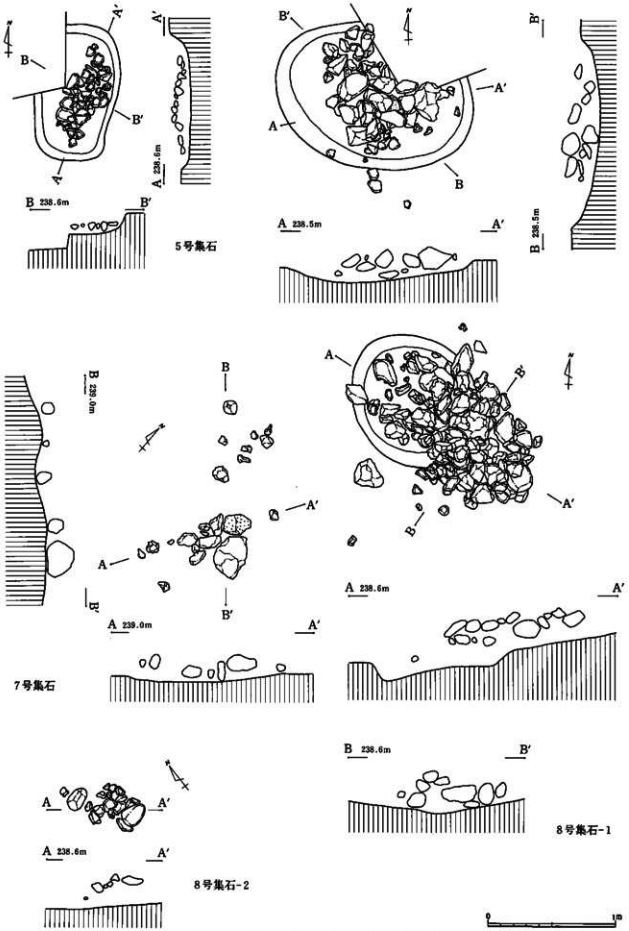
第39図　配石遺構-9　平面及び断面図(13号-2)



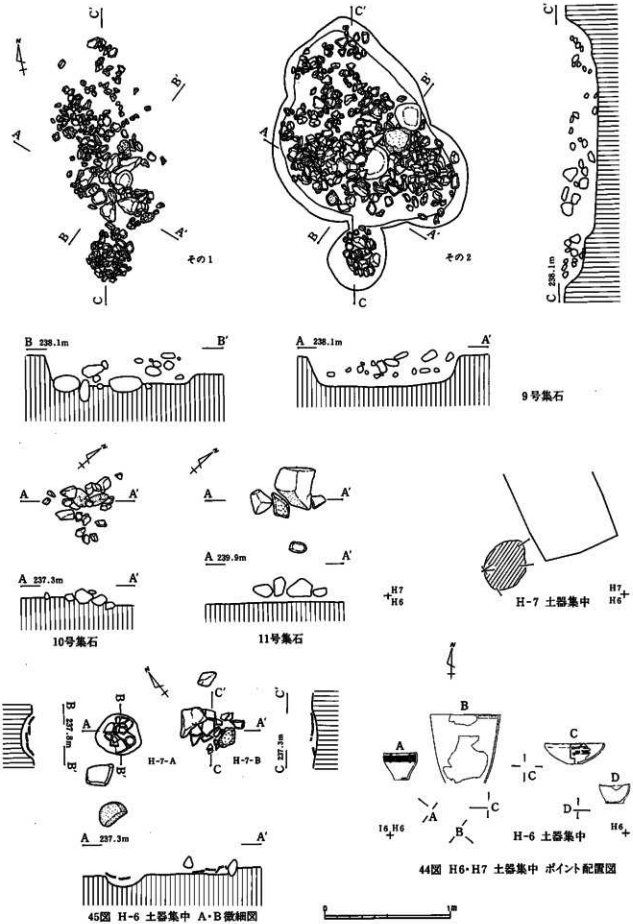
第40図　配石遺構-10 平面及び断面図(14～16号)



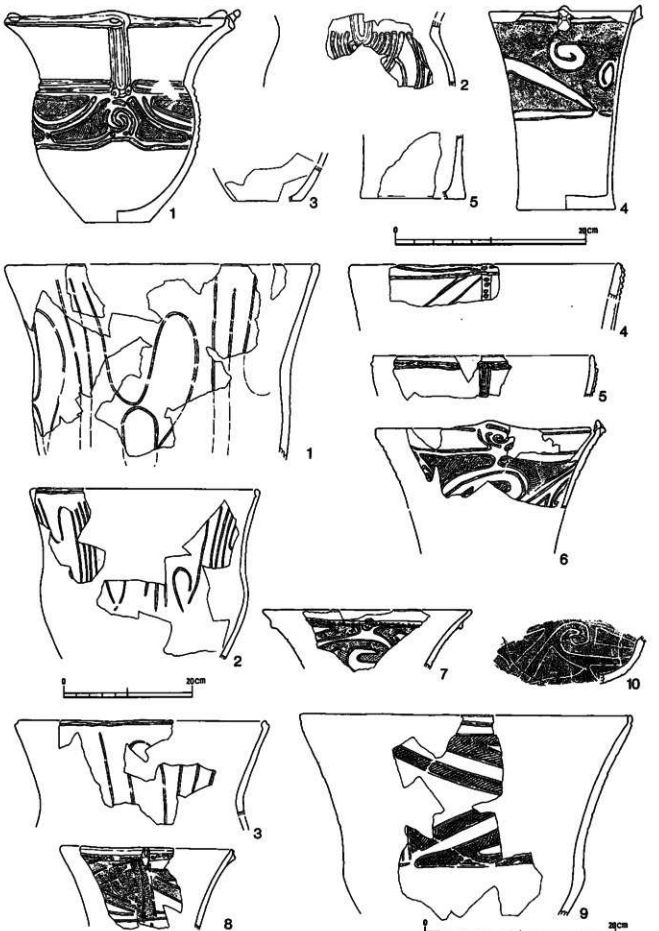
第41図　集石遺構-1　平面及び断面図(1～4・6号)



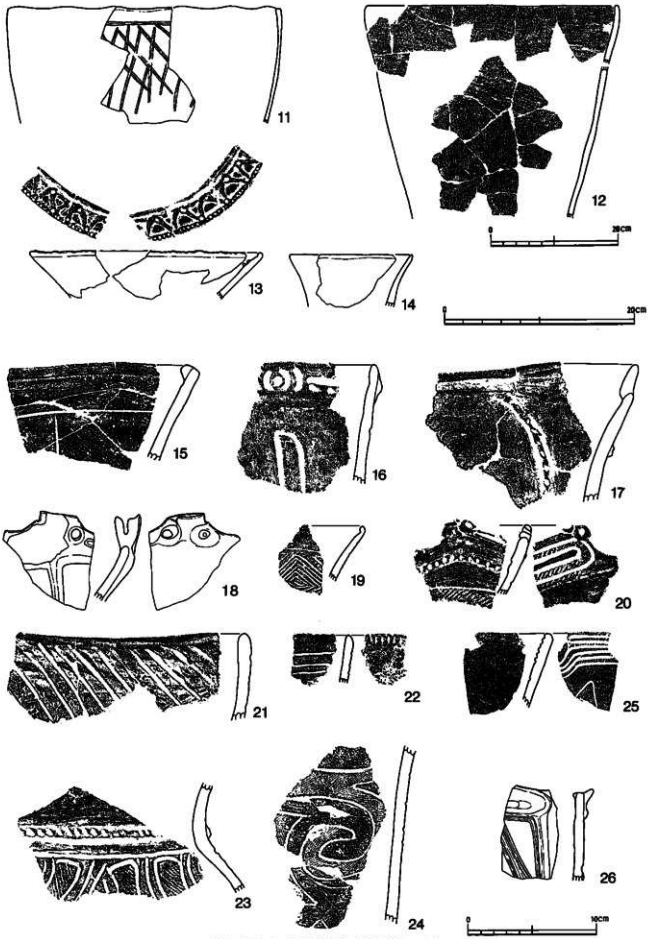
第42図　集石遺構-2　平面及び断面図(5・7・8号)



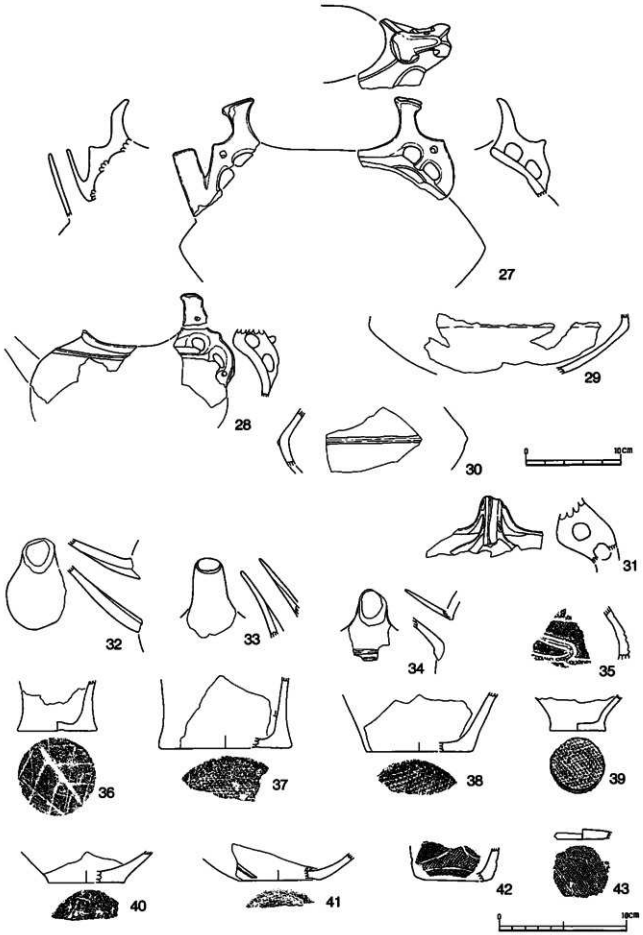
第43～45図 集石遺構-3 平面及び断面図(9～11号)/H-6・H-7 土器集中区



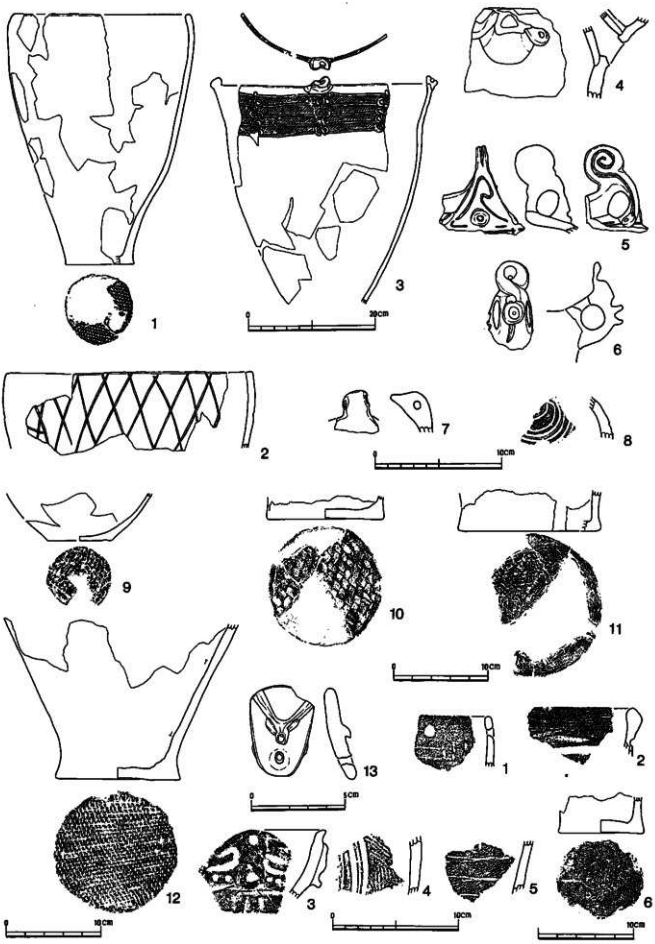
第46図　土器実測図-1（1住下焼土-1・4・5，1住下焼土-2・1～3，1住1～9）



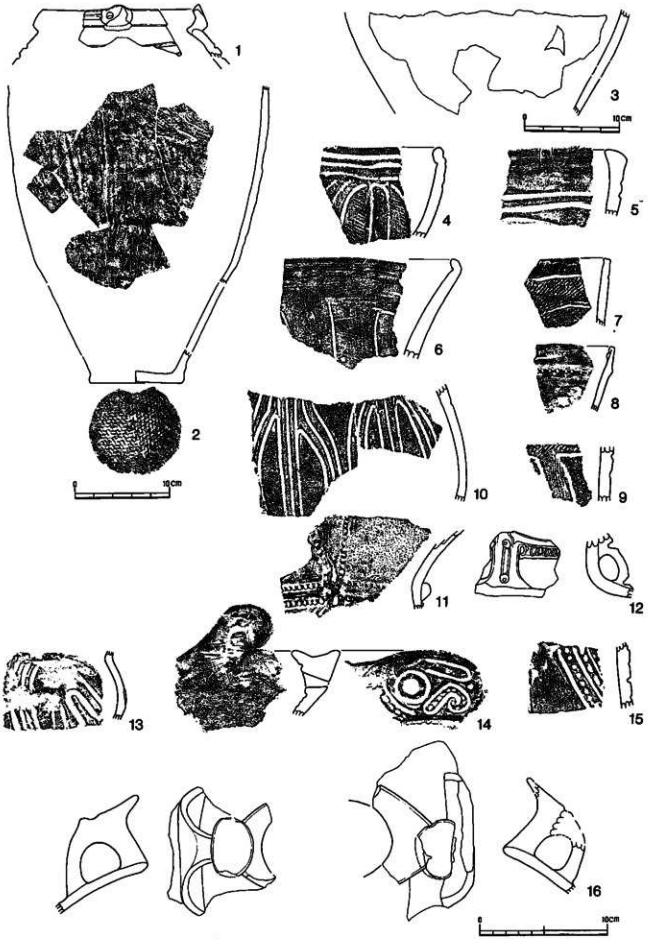
第47図　土器実測図-2（1住11～26）



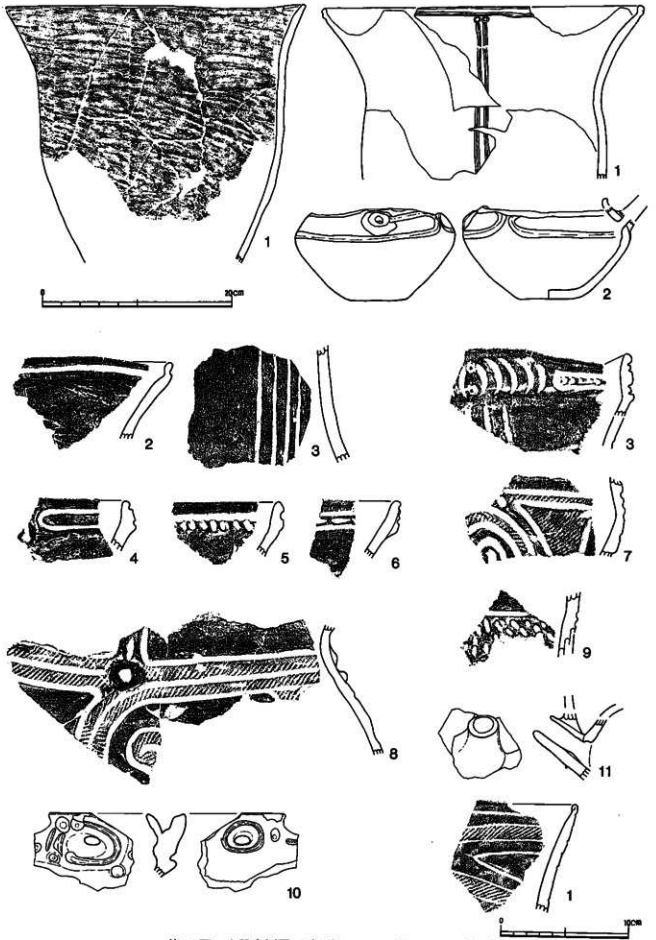
第48図　土器実測図-3(1住27～43)



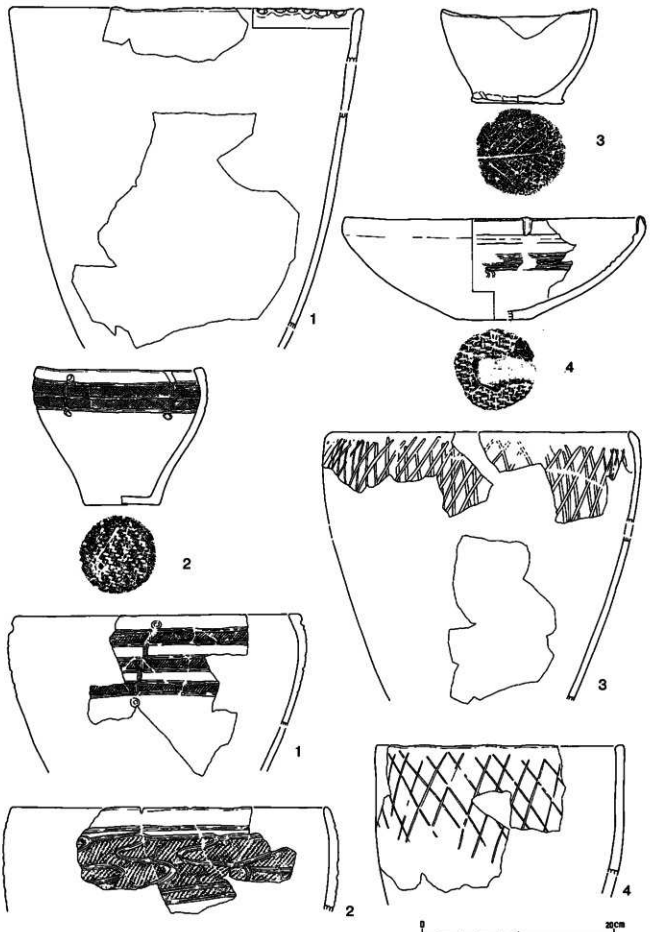
第49図　土器実測図-4（9配1～13・10配1～6）



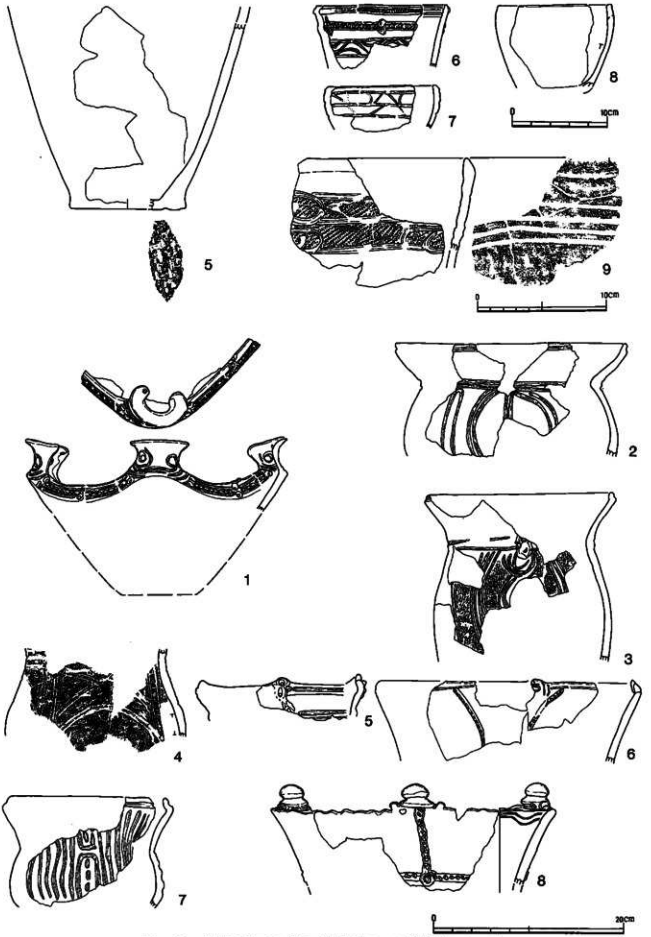
第50図　土器実測図-5 (11配1～16)



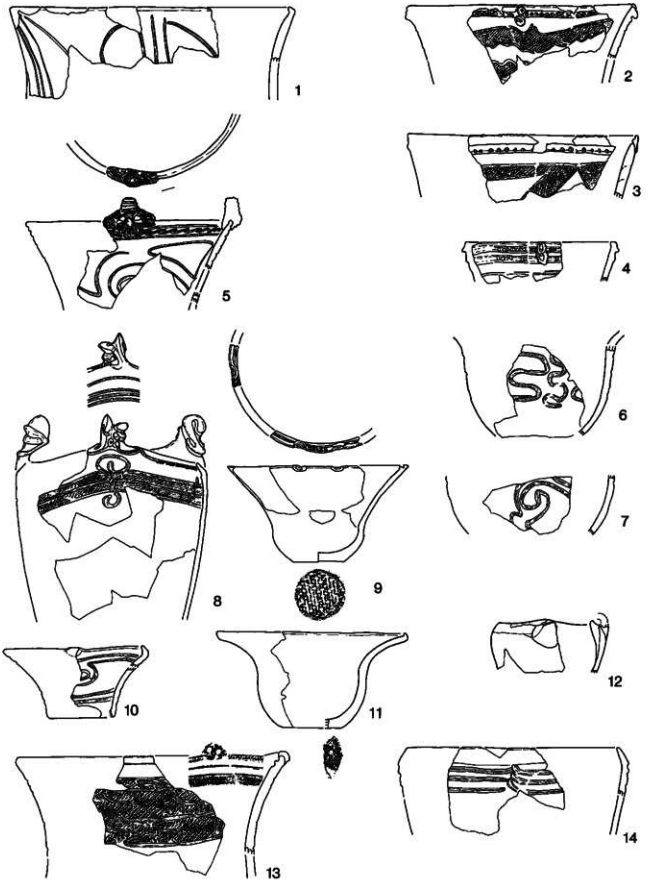
第51図　土器実測図-6(12配1～3, 13配1～10, 36焼1)



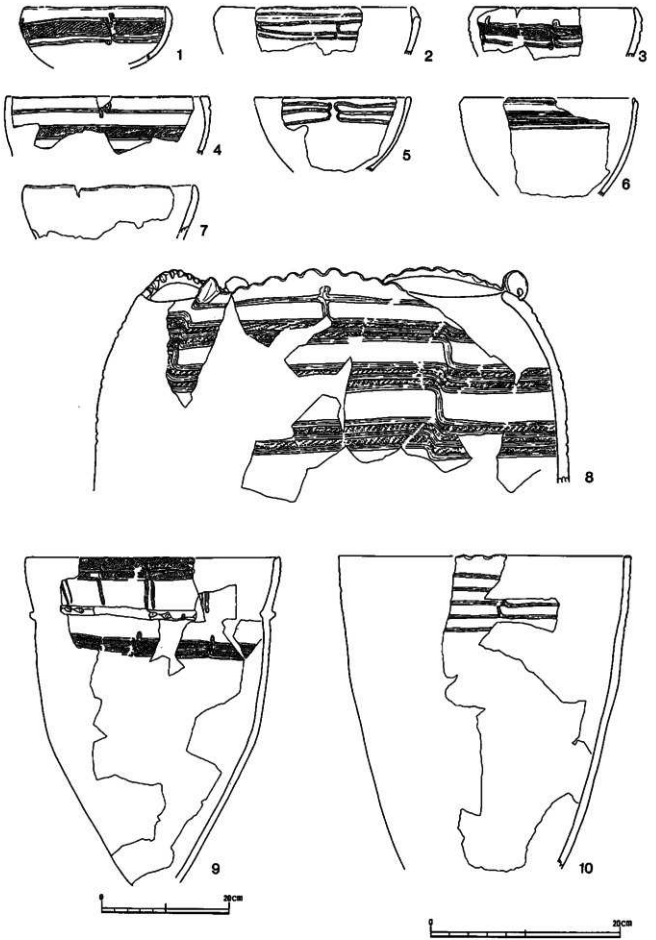
第52図　土器実測図-7(H6土器集中1～4, H7土器集中1～4)



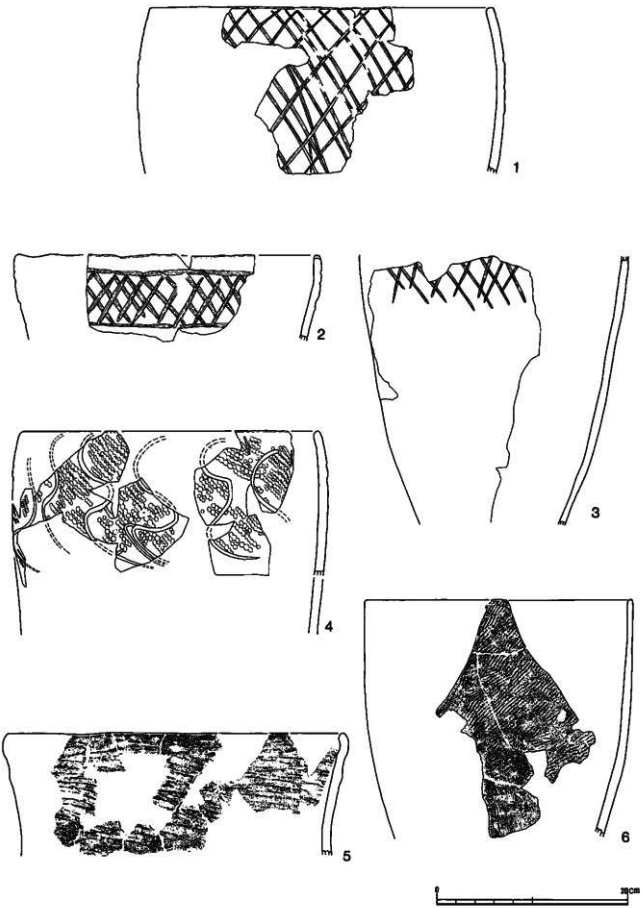
第53図　土器実測図-8(H7土器集中5～9,遺構外1　1～8)



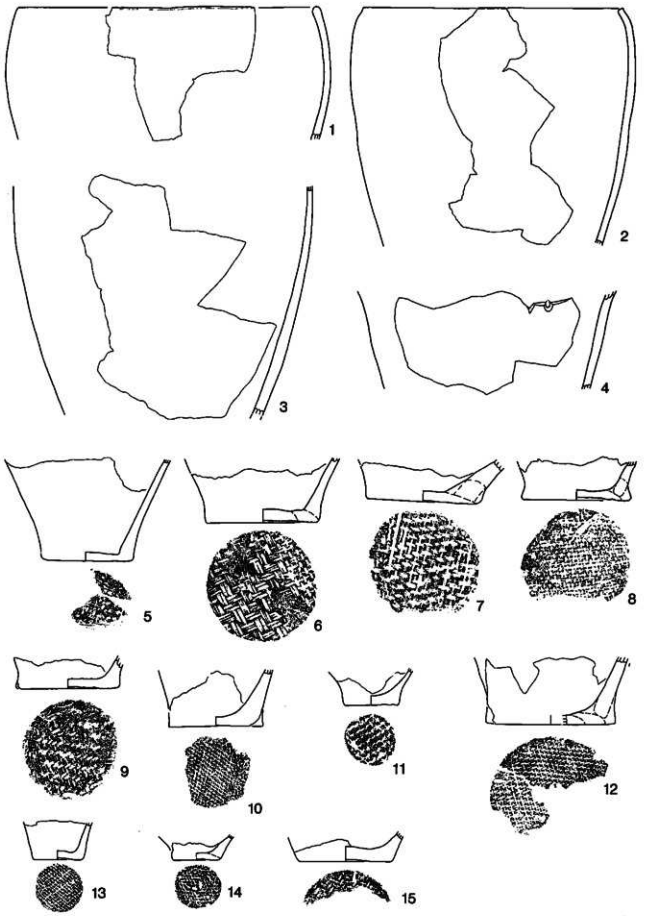
第54図　土器実測図-9(遺構外2　1～14)



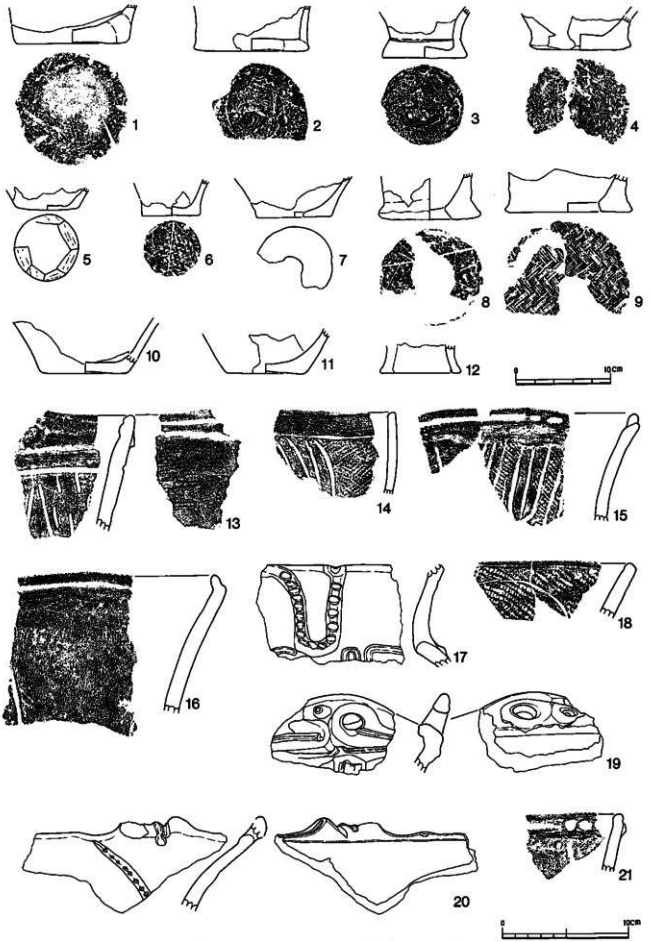
第55図　土器実測図-10(遺構外3　1～10)



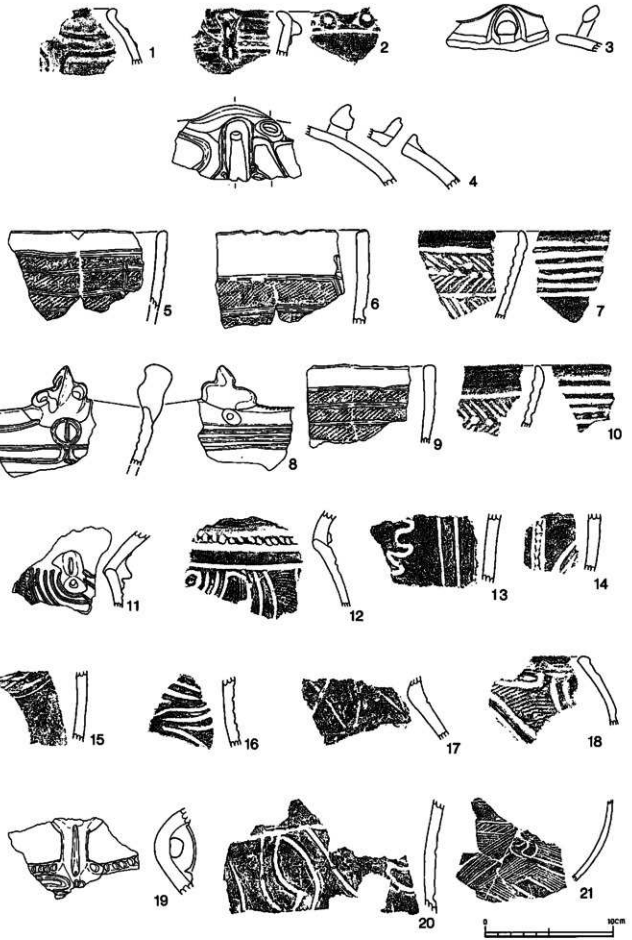
第56図　土器実測図-11(遺構外4　1～6)



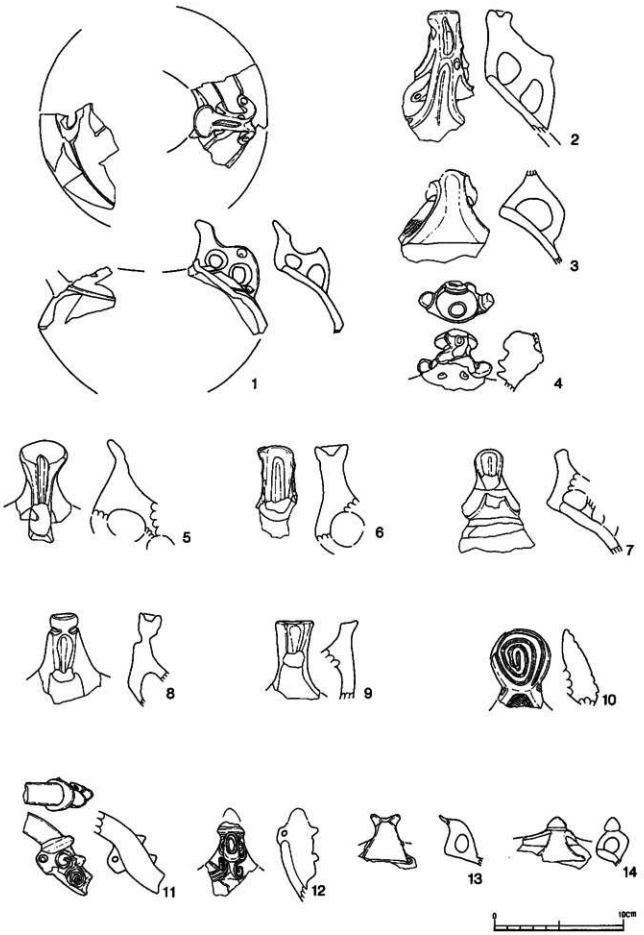
第57図　土器実測図-12(遺構外5　1～15)



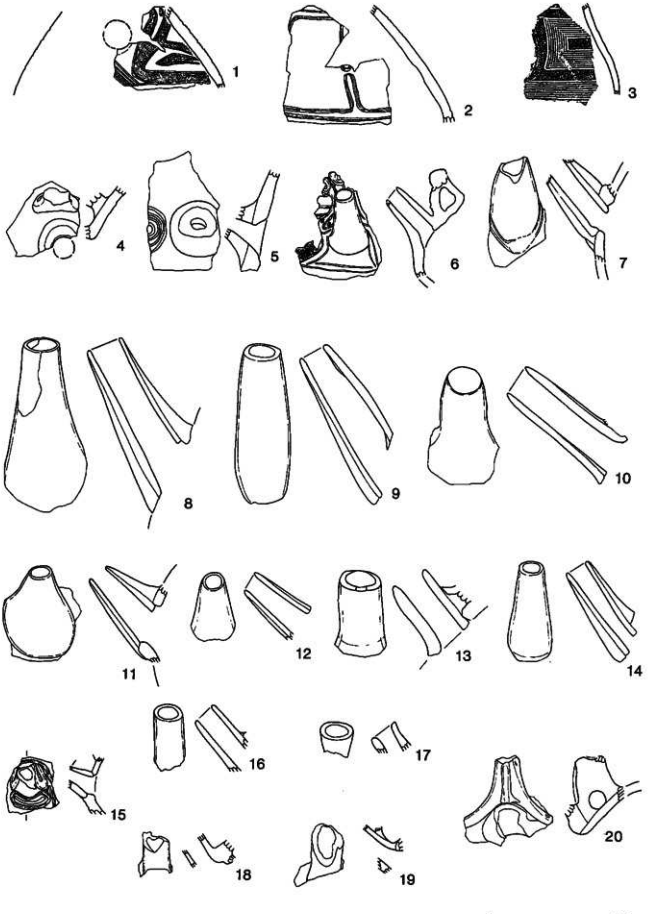
第58図　土器実測図-13(遺構外6　1－21)



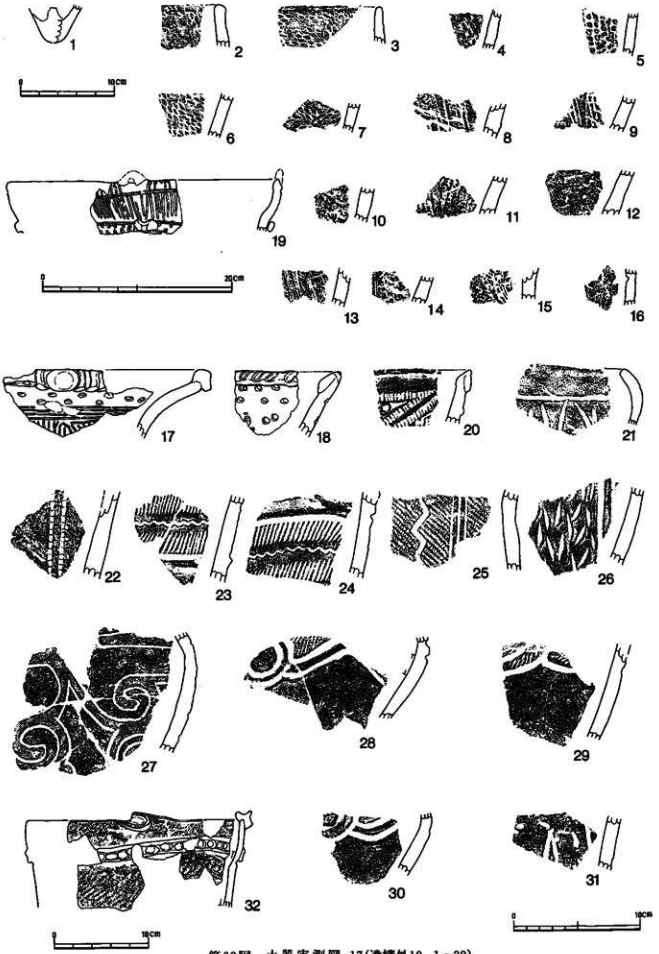
第59図　土器実測図-14（遺構外-7　1～21）



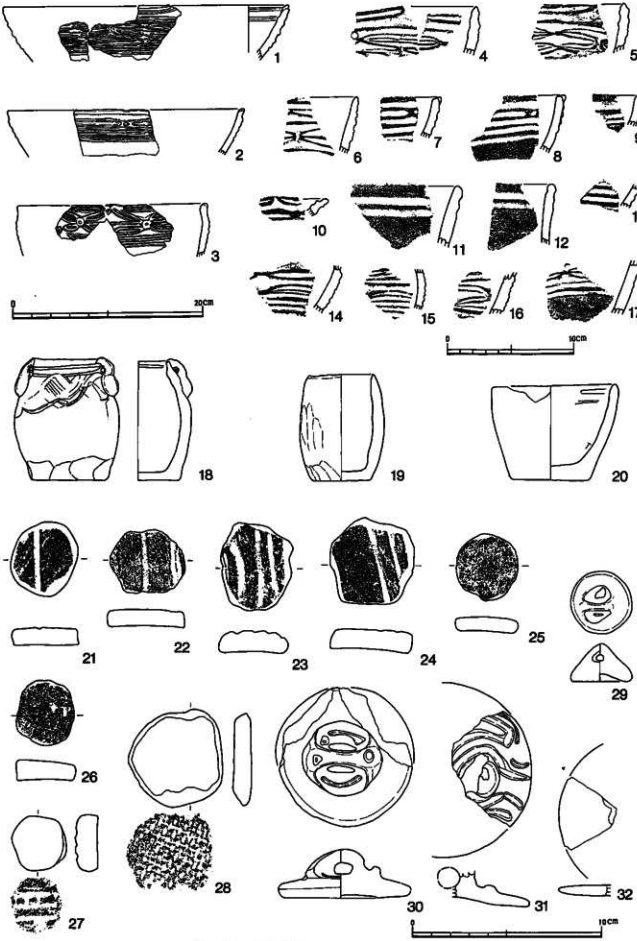
第60図　土器実測図-15(遺構外8　1～14)



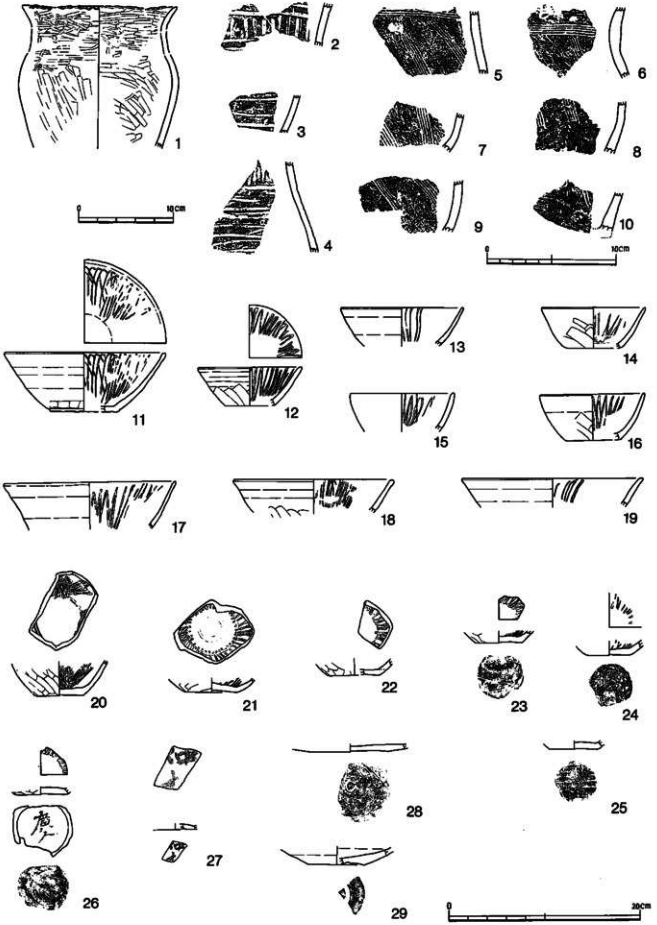
第61図　土器実測図-16（遺構外9　1～20）



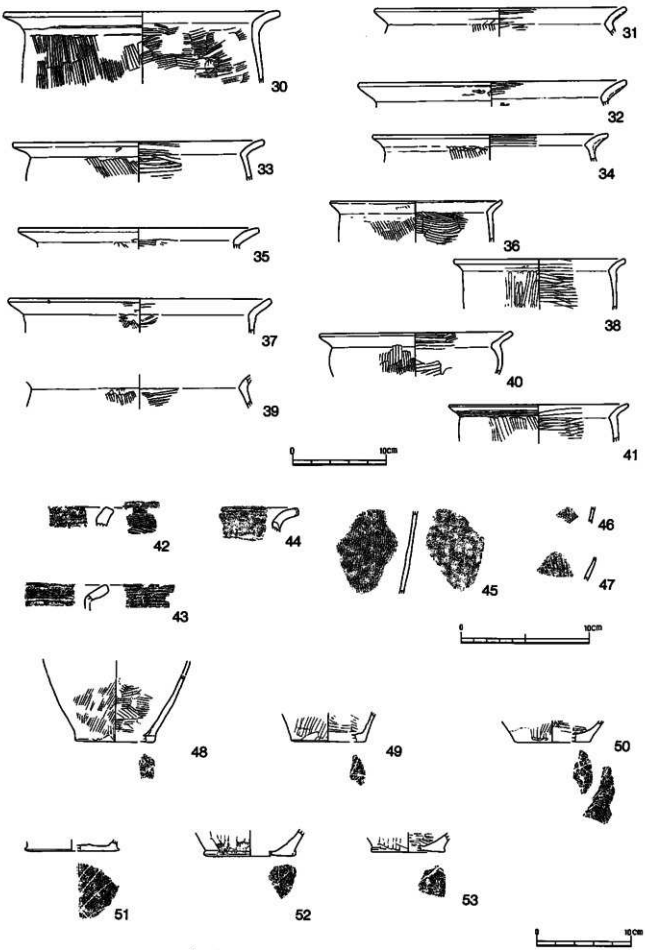
第62図　土器実測図-17(遺構外10　1～32)



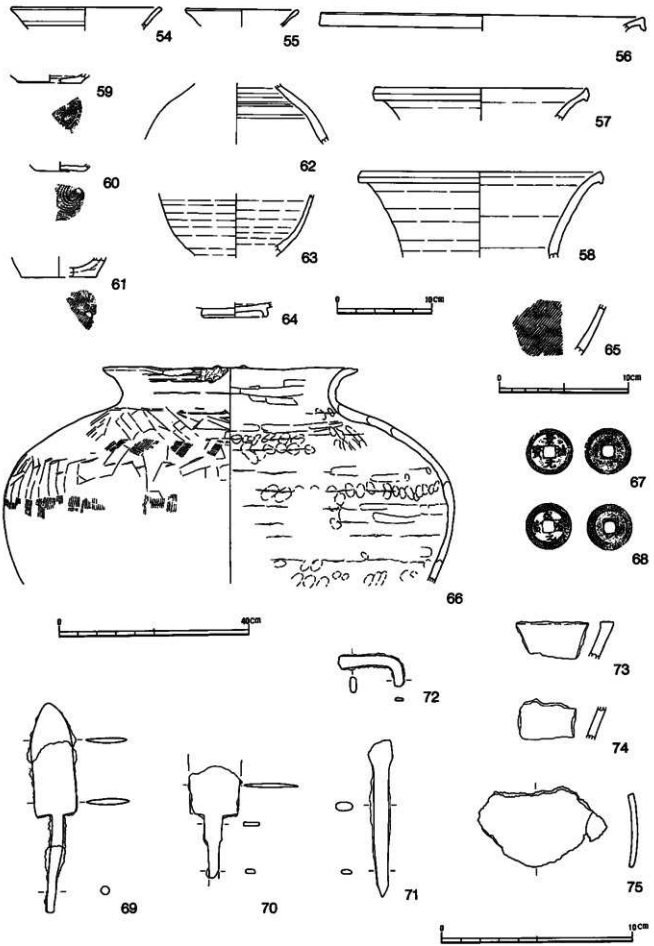
第63図　土器実測図-18(遺構外11　1～32)



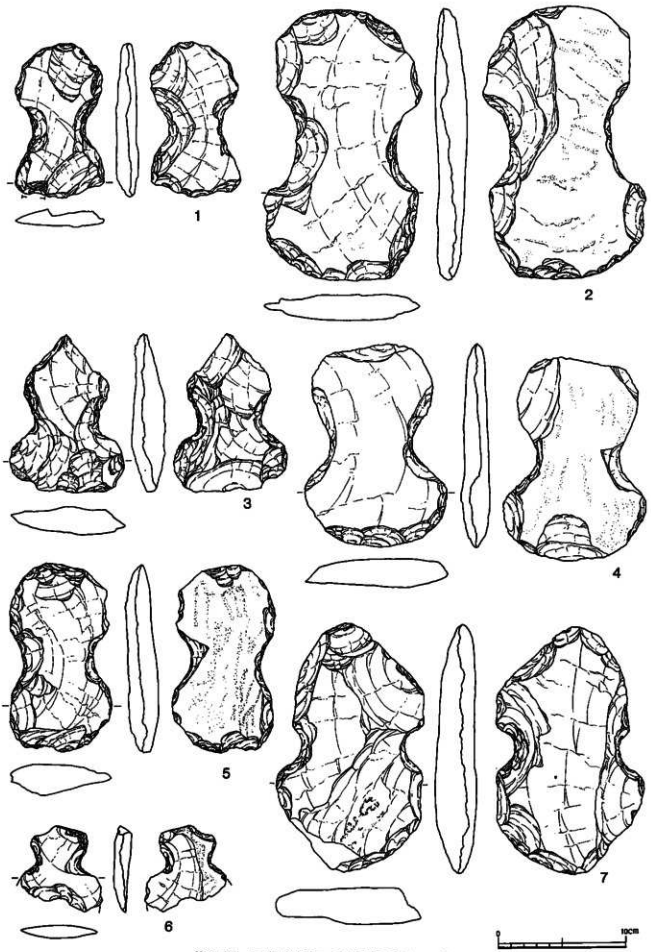
第64図　土器実測図-19(弥生1～10, 土師器坏11～29)



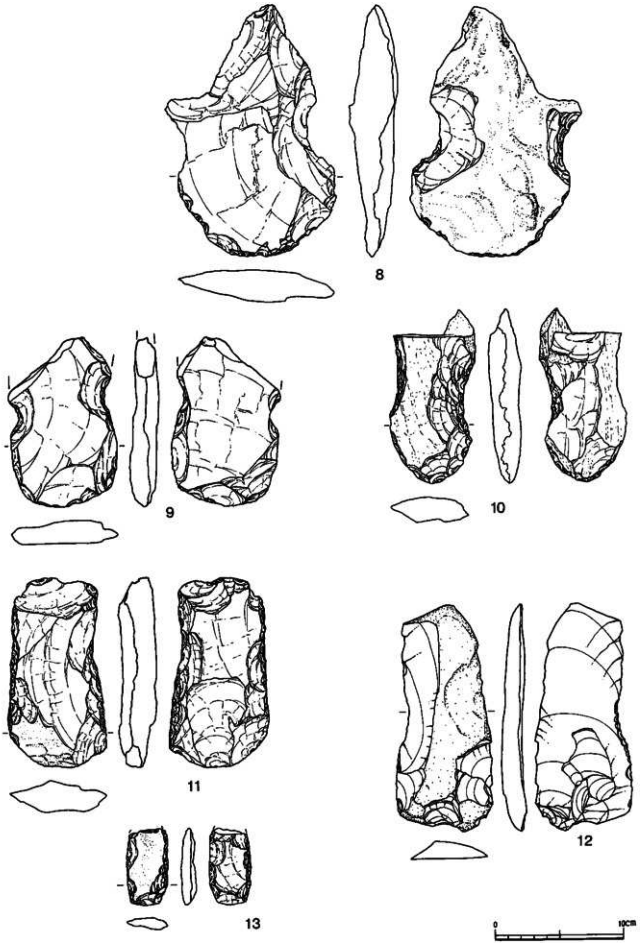
第65図　土器実測図-20(土師器壺30～53)



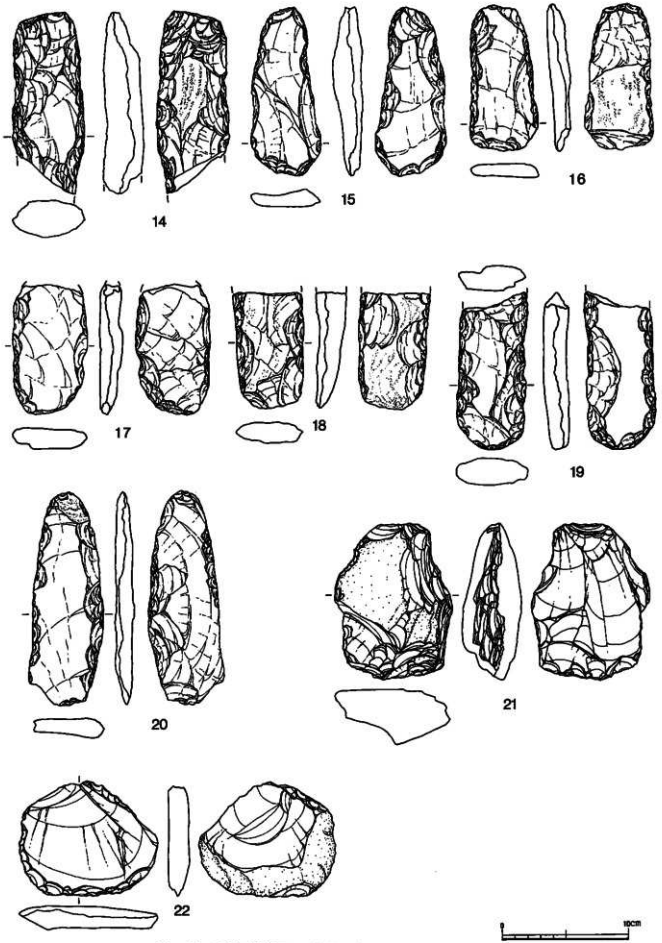
第66図　土器-21，その他実測図(須恵54～61・65，灰釉62～64，陶器66，古銭67・68，鉄製品69～75)



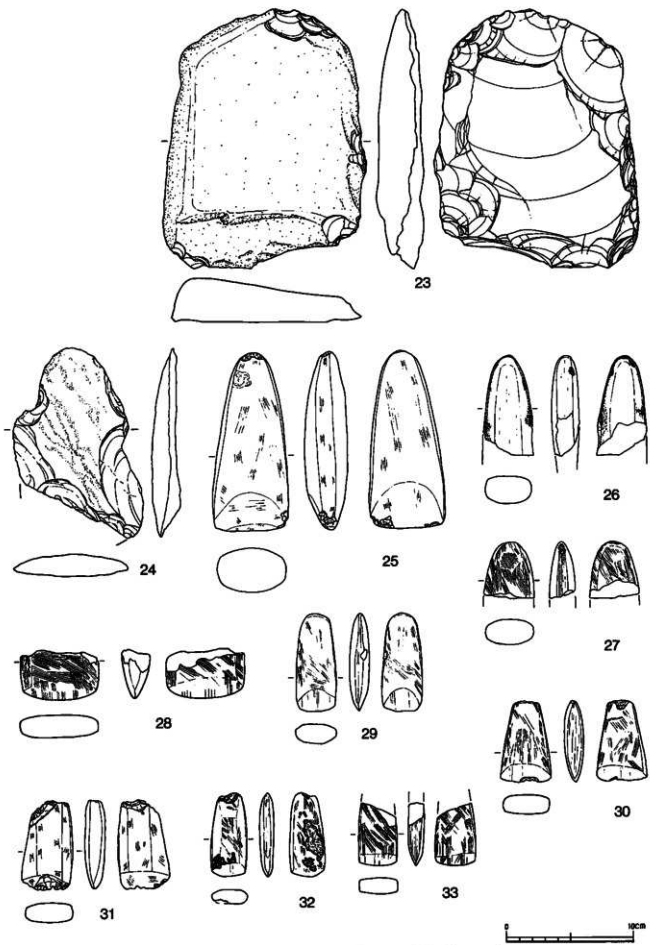
第67図　石器実測図-1（打製石斧1～7）



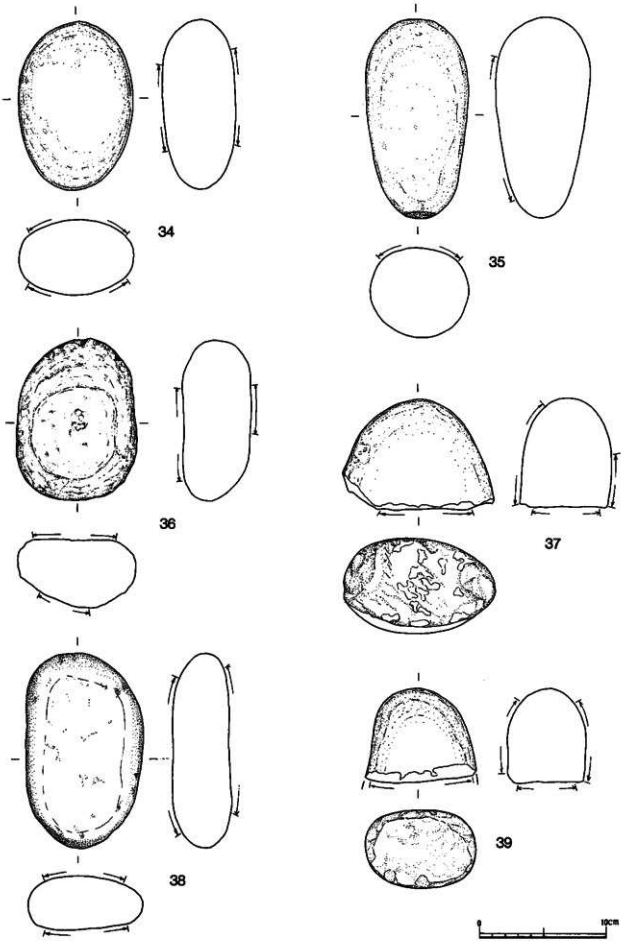
第68図　石器実測図-2（打製石斧8～13）



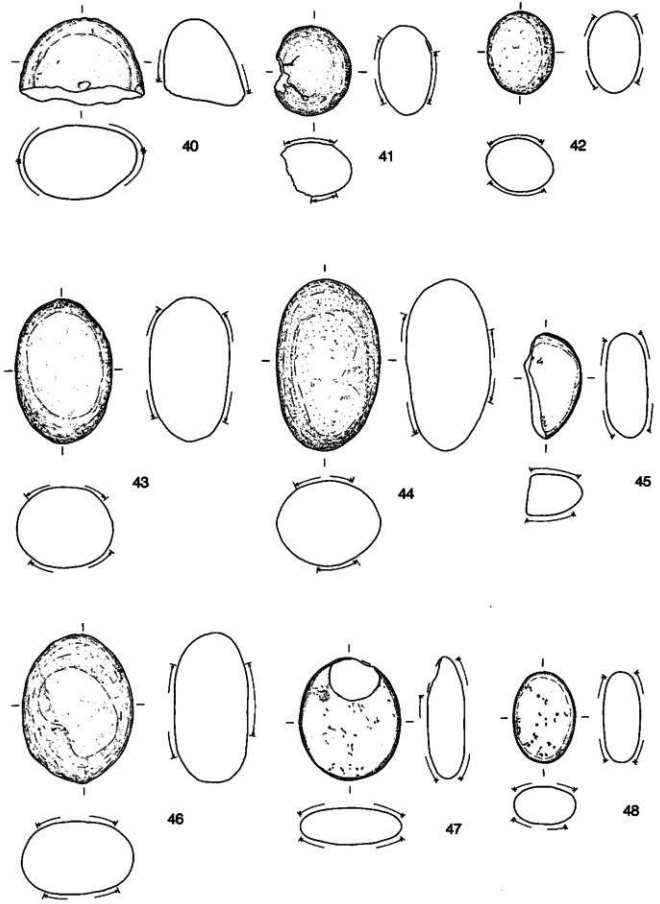
第69図　石器実測図-3（打製石斧14～21，横刃型石器22）



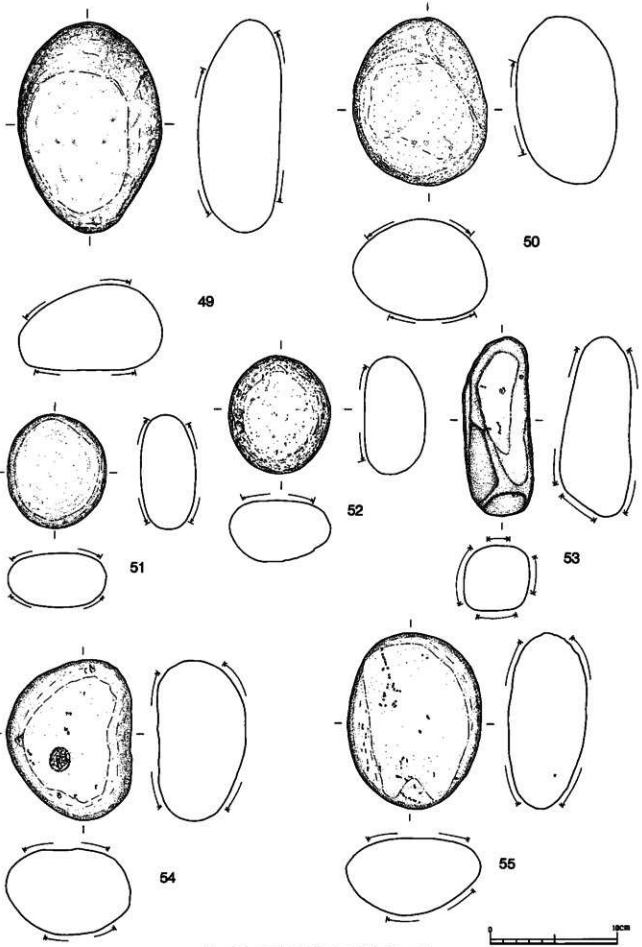
第70図　石器実測図－4（打製石斧23・24，磨製石斧25～33）



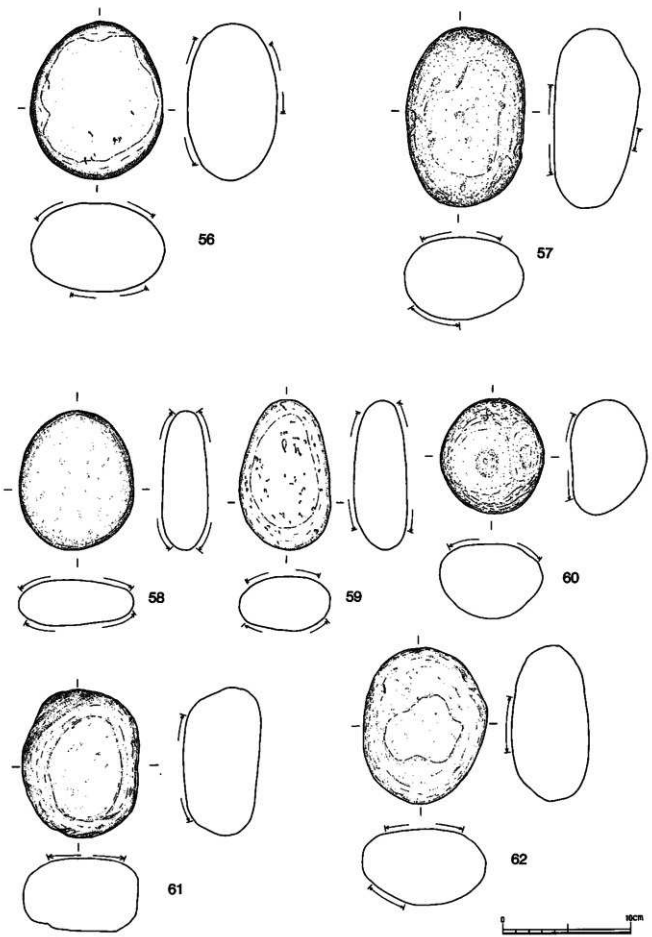
第71図　石器実測図-5（磨石34～39）



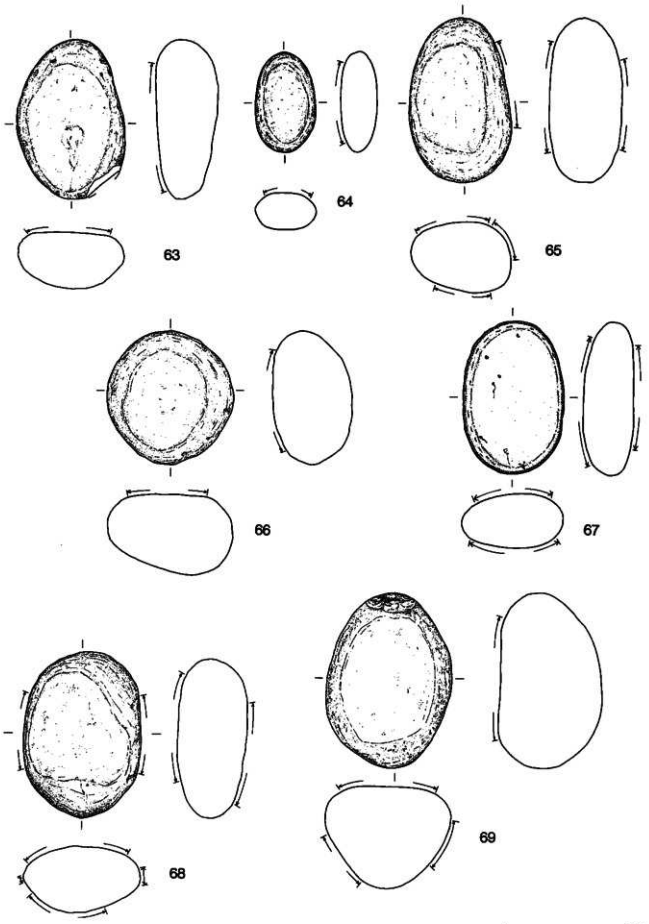
第72図　石器実測図-6（磨石40～48）



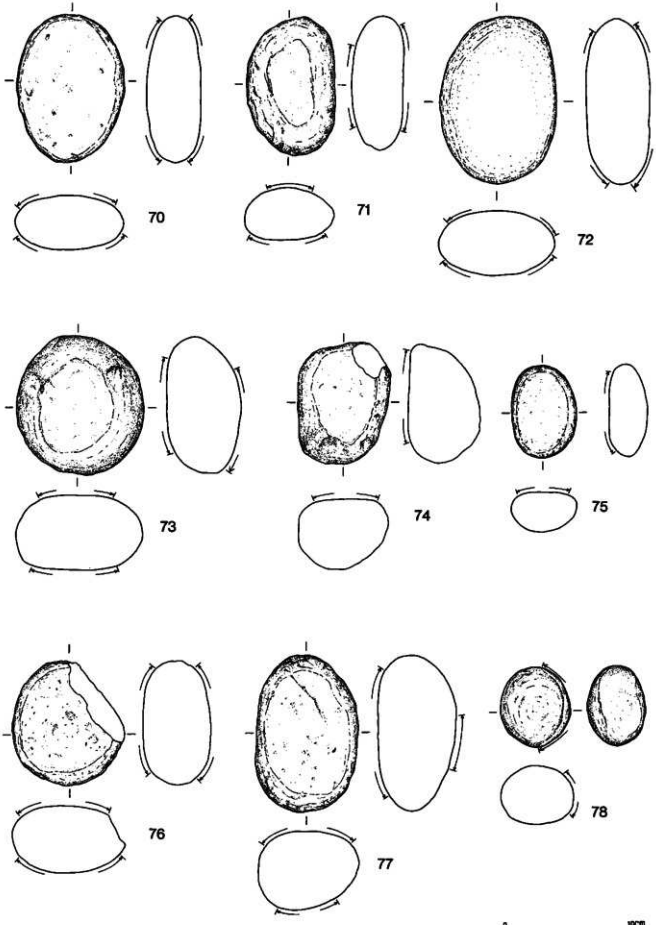
第73図　石器実測図-7（剥石49～55）



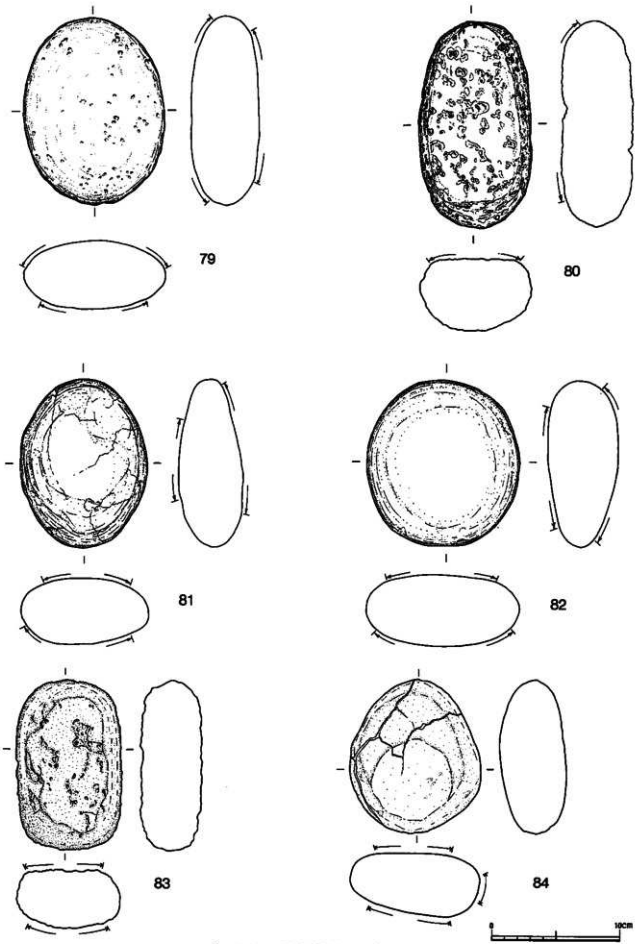
第74図　石器実測図-8（磨石56～62）



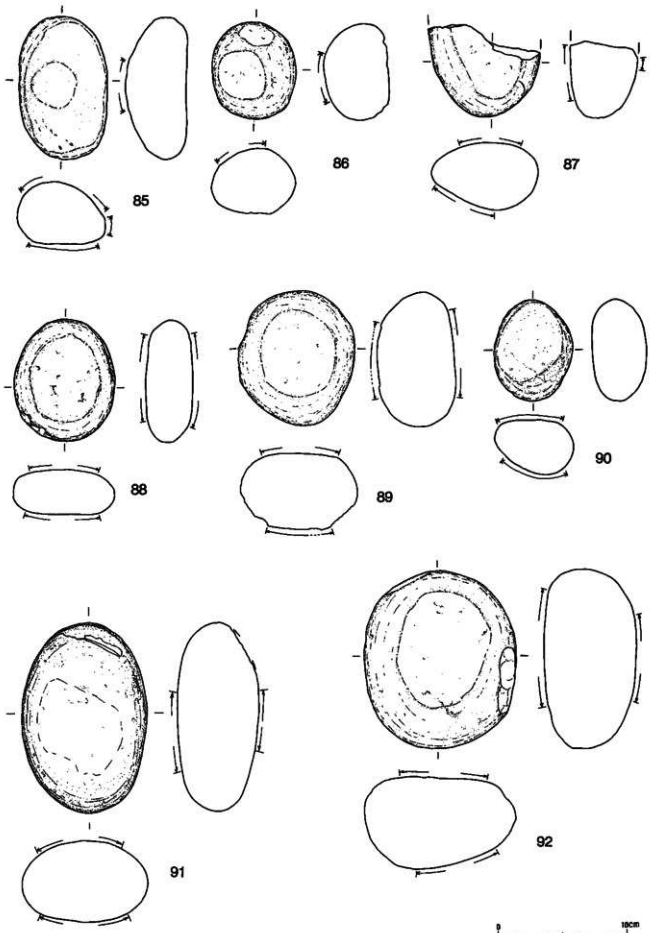
第75図 石器実測図-9 (磨石63～69)



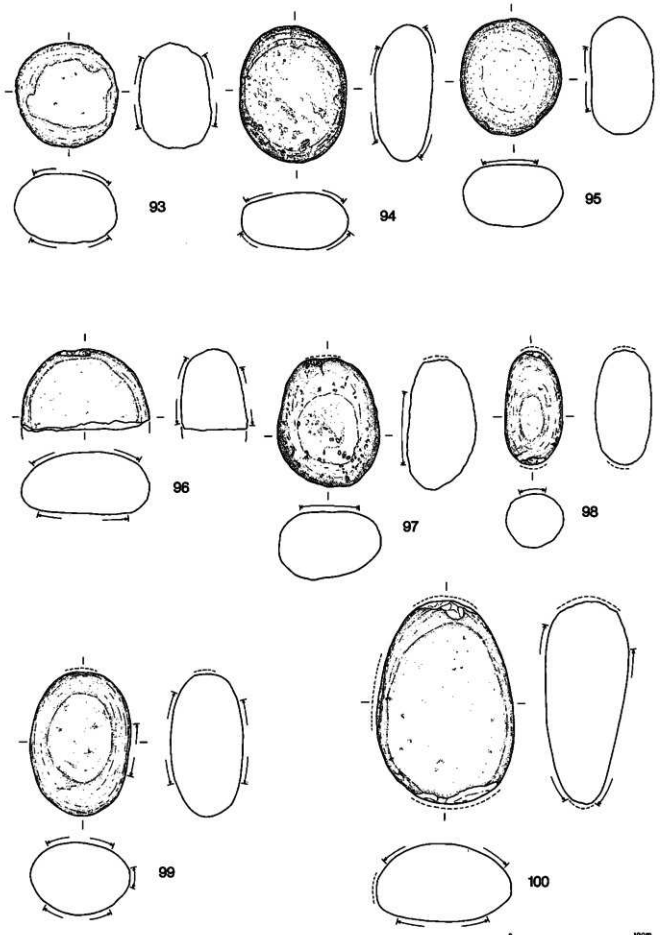
第76図　石器実測図-10(磨石70～78)



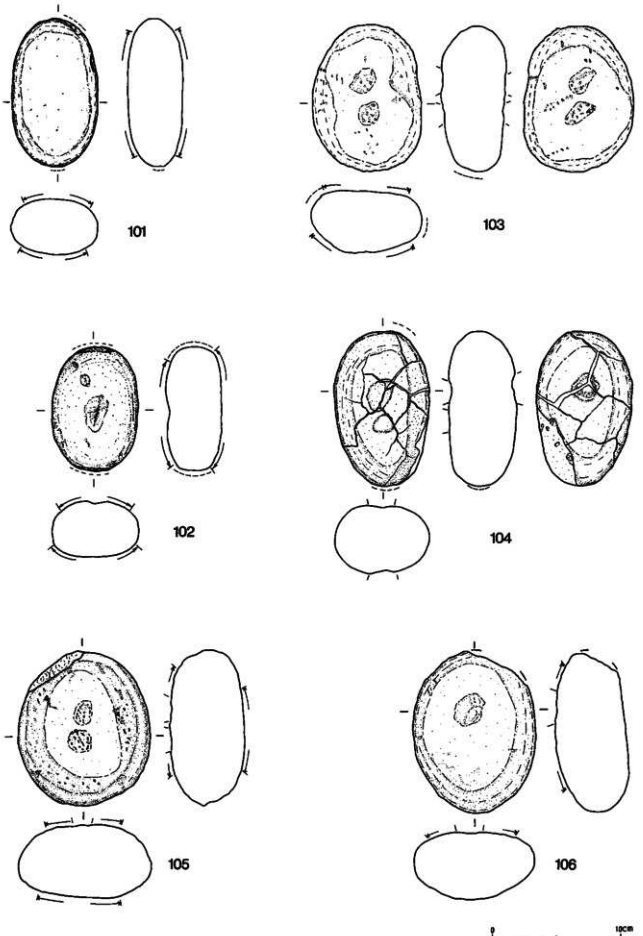
第77図　石器実測図-11(磨石79～84)



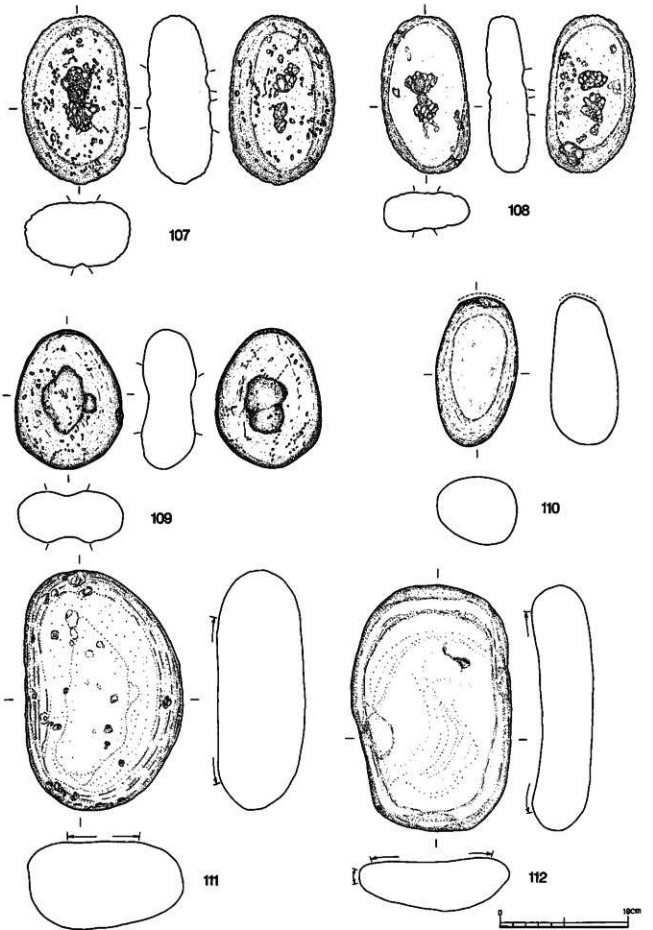
第78図　石器実測図-12(磨石85～92)



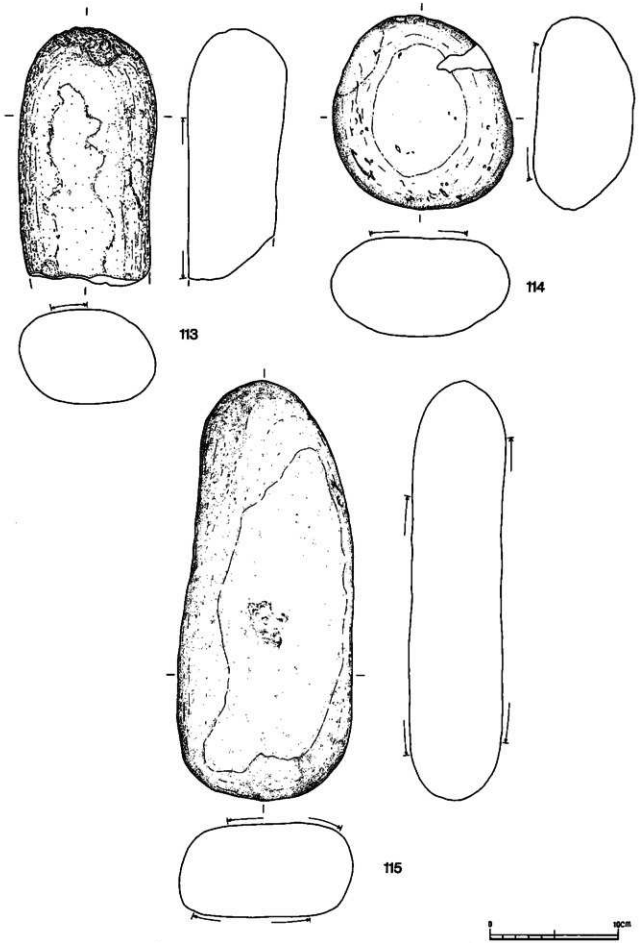
第79図　石器実測図-13(磨石93～96，磨＋敲石97～100)



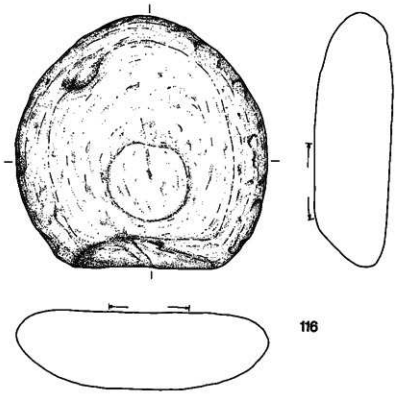
第80図　石器実測図-14(磨+敲石101・102,磨+敲+くぼみ石103,くぼみ+敲石104,くぼみ+磨石105・106)

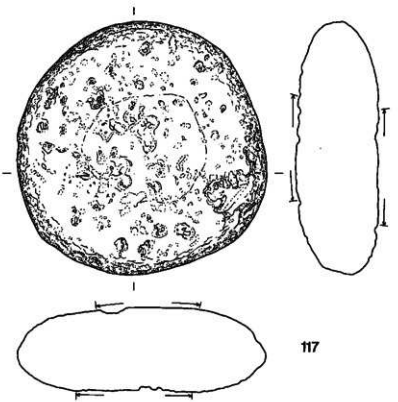


第81図　石器実測図-15（くぼみ石107～109，敲石110，磨り面のある台石111・112）

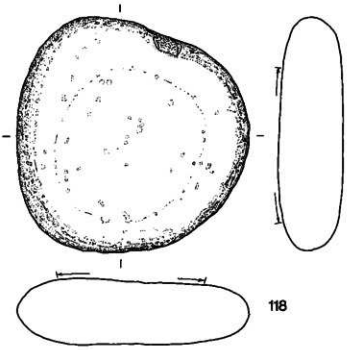


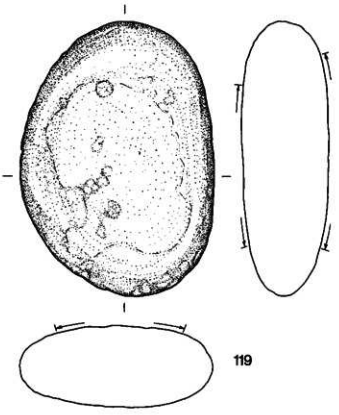
第82図　石器実測図-16(磨り面のある台石113～115)



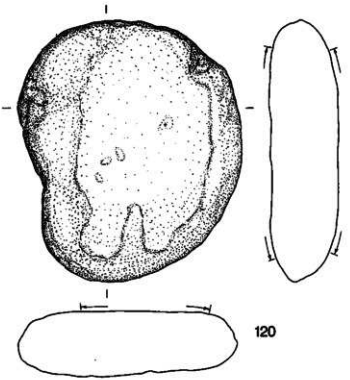


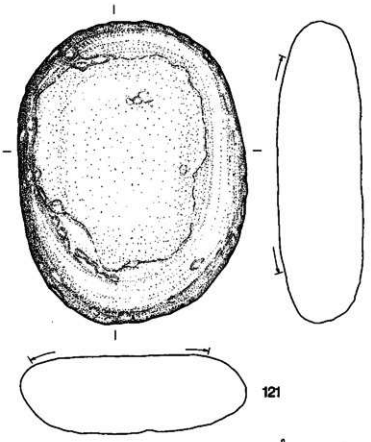
第83図　石器実測図-17(磨り面のある台石116・117)



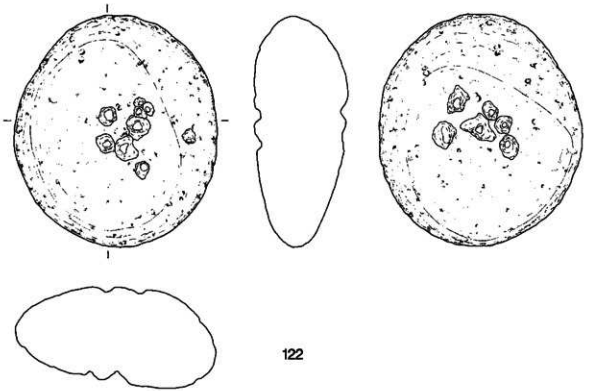


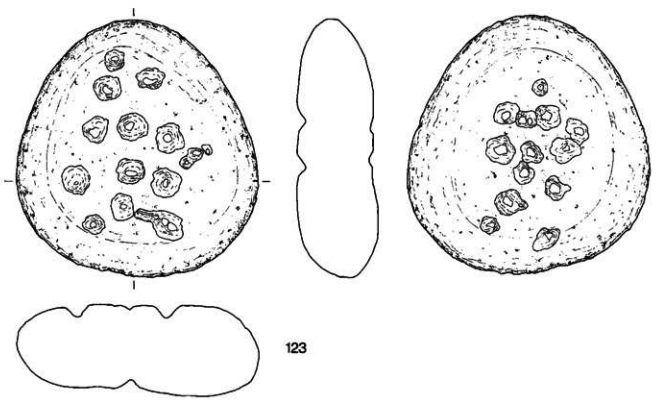
第84図　石器実測図-18(磨り面のある台石118・119)



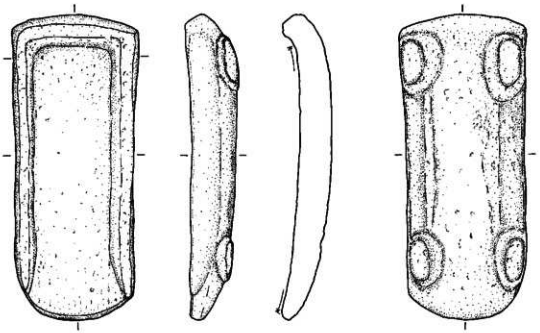


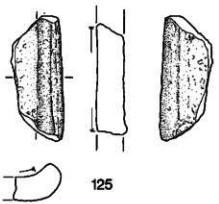
第85図　石器実測図-19(磨り面のある台石120・121)

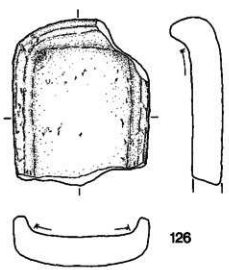


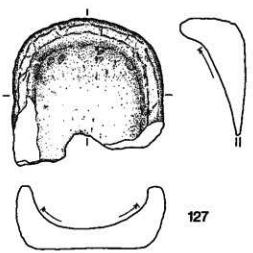


第86図　石器実測図-20(多孔石122・123)

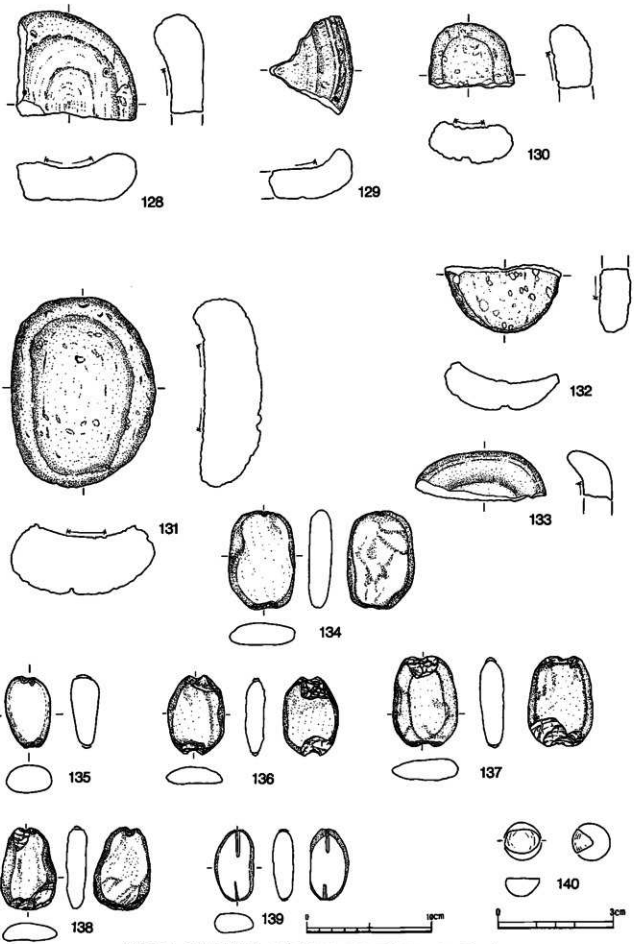




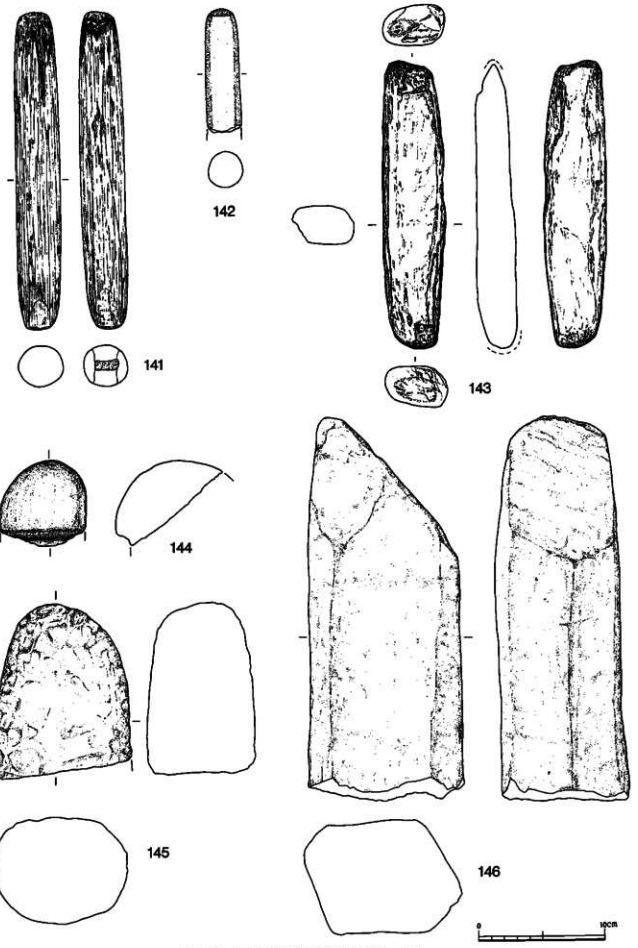




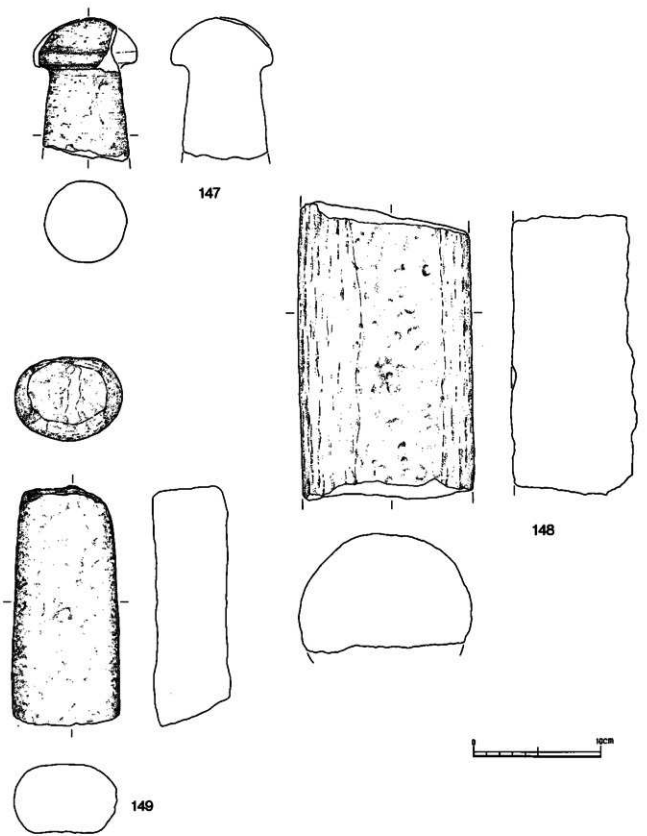
第87図　石器実測-21(石皿124～127)



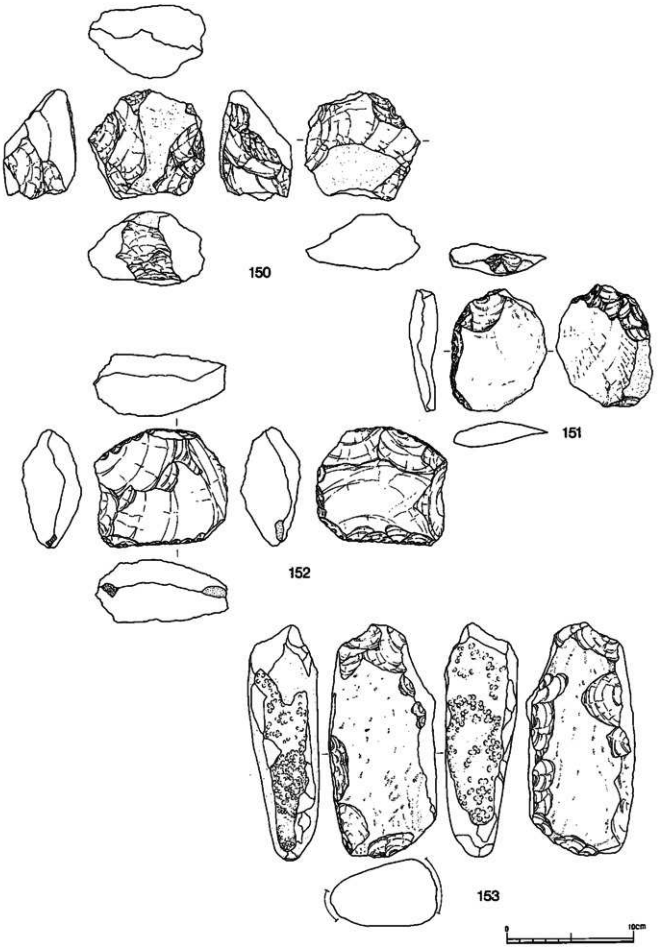
第88図　石器実測図-22(石皿128～133，石錘134～139，玉140)



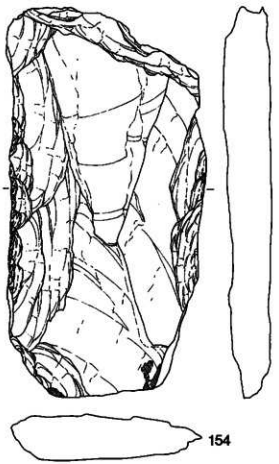
第89図　石器実測図-23(石棒141～146)

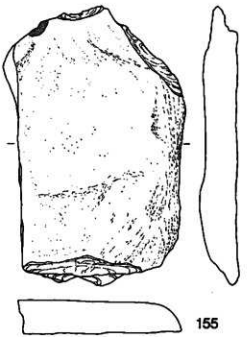


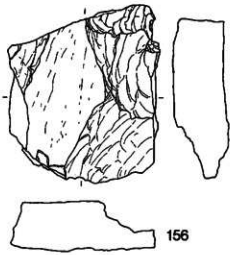
第90図　石器実測図-24(石棒147～149)

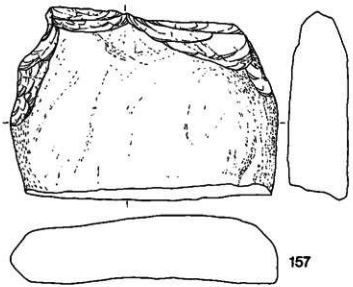


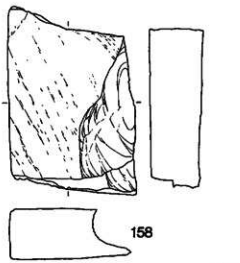
第91図　石器実測図-25(礫器150～153)



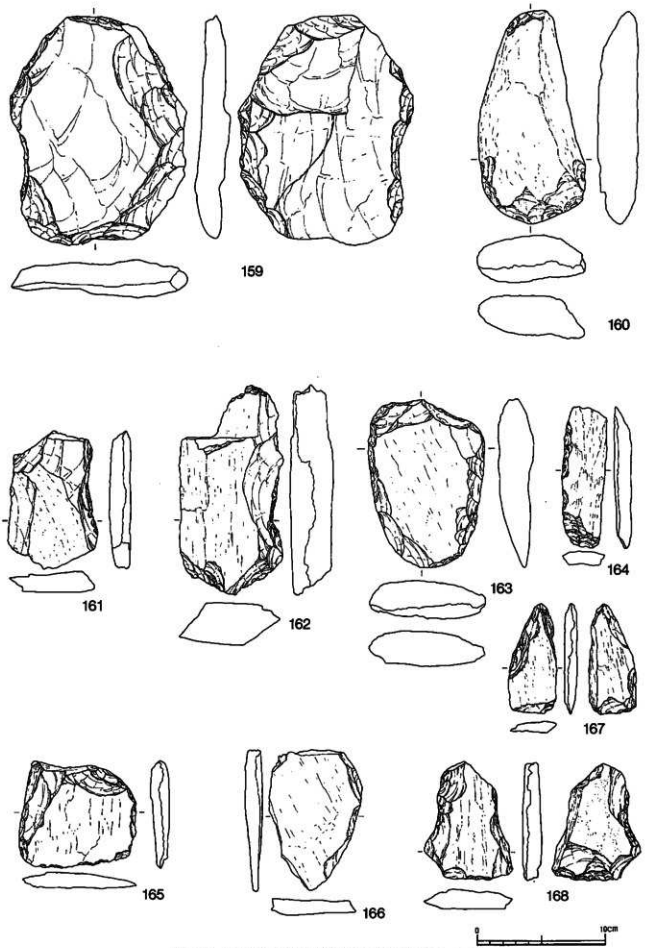




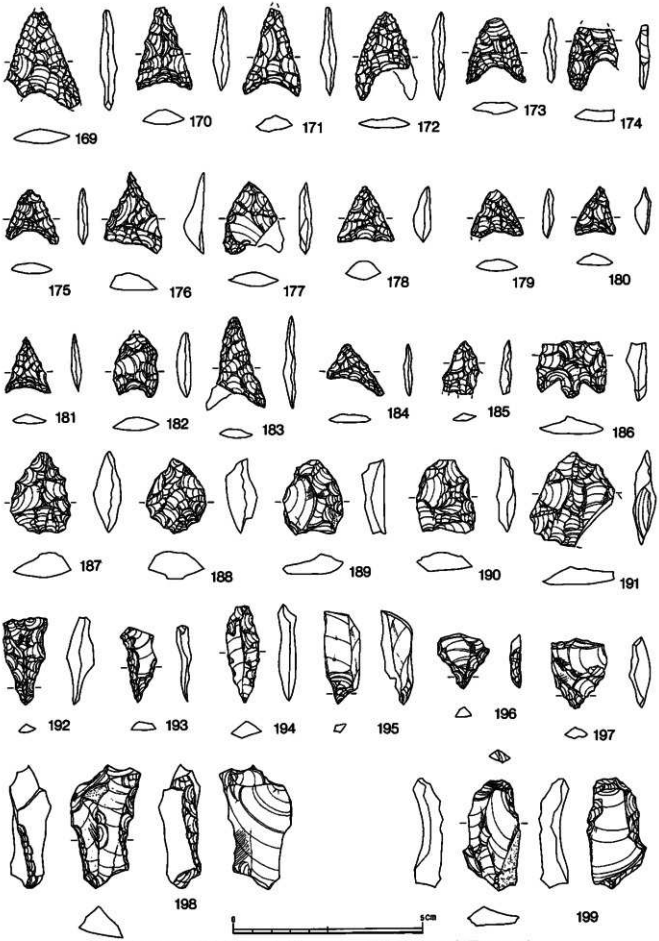




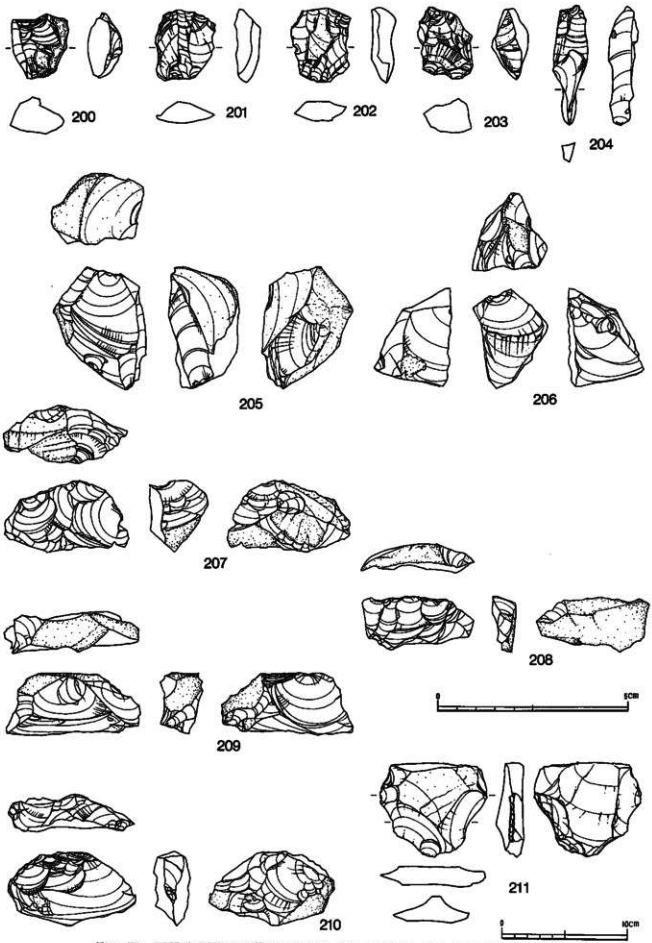
第92図　石器実測図-26(打製石斧未製品154～158)



第93図　石器実測図-27(打製石斧未製品159～168)



第94図　石器実測図-28(石鏃169～191，石錐192～197，削器198・199)



第95図　石器実測図-29(楔形石器200～204，石核205～210，二次加工剥片211)

●石器観察表

挿図番号	出土地点		番号	時期	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ(g)	石材	欠損状況	備考
67	F 7	S446	1	縄文	打製石斧	12.0	7.0	1.7	155	フォルンフェルス	完	1住
	H 4	S767	2	縄文	打製石斧	21.0	12.7	2.5	741	フォルンフェルス	完	
	G 4	S769	3	縄文	打製石斧	12.4	9.0	2.6	252	フォルンフェルス	完	
	K 5	S674	4	縄文	打製石斧	15.8	11.3	2.3	444	フォルンフェルス	完	
	D 8	S958	5	縄文	打製石斧	14.7	8.1	2.7	325	フォルンフェルス	完	
	K 5	S760	6	縄文	打製石斧	6.8	6.4	1.4	50	フォルンフェルス	一部	
			7	縄文	打製石斧	19.4	11.6	3.2	690	フォルンフェルス	完	表土
68	D 7	S1005	8	縄文	打製石斧	19.6	13.5	3.8	700	フォルンフェルス	一部	
	J 4	S591	9	縄文	打製石斧	13.1	8.6	1.9	267	フォルンフェルス	完	
	J 2	S352	10	縄文	打製石斧	13.6	6.9	1.9	530	粘板岩	一部	
	I 4	S692	11	縄文	打製石斧	14.8	7.8	3.0	419	フォルンフェルス	完	
	I 4	S753	12	縄文	打製石斧	17.8	7.5	1.2	225	安山岩	完	
	K 4	S586	13	縄文	打製石斧	6.1	3.3	1.2	27	フォルンフェルス	完	
69	H 3	S710	14	縄文	打製石斧	14.1	5.7	3.2	303	フォルンフェルス	一部	
	J 4	S1000	15	縄文	打製石斧	13.1	5.6	2.4	172	フォルンフェルス	完	Tr拡張
	D 9	S1016	16	縄文	打製石斧	11.3	5.3	1.7	121	フォルンフェルス	完	
	I 5	S561	17	縄文	打製石斧	10.1	5.7	1.8	137	フォルンフェルス	完	
	G 5	S937	18	縄文	打製石斧	8.9	5.6	2.5	143	フォルンフェルス	1/2	
	J 5	S 1	19	縄文	打製石斧	12.2	5.5	2.1	175	フォルンフェルス	一部	12焼土
	H 8	S718	20	縄文	打製石斧	16.7	5.8	1.6	179	フォルンフェルス	一部	
	H 5	S748	21	縄文	打製石斧	12.3	9.3	4.7	465	安山岩	一部	
	I 6	S800	22	縄文	横刃形石器	9.2	1.1	1.2	202	安山岩	完	
70	I 6	S935	23	縄文	打製石斧	18.8	16.2	3.8	1,440	安山岩	一部	
	I 5		24	縄文	打製石斧	14.7	10.2	2.3	290	フォルンフェルス	一部	表採
	F 7	S 1	25	縄文	磨製石斧	13.8	6.0	3.5	440	蛇紋岩類	完	1住下地穴2
	F 6	S323	26	縄文	磨製石斧	7.8	3.9	2.2	110	緑色岩	1/2	1住
	F 7	S 2	27	縄文	磨製石斧	4.4	3.9	2.0	50	蛇紋岩類	一部残	
	F 7	S 9	28	縄文	磨製石斧	3.9	5.1	2.2	70	蛇紋岩類	刃部残	1住[illegible]
	E 6	S868	29	縄文	磨製石斧	7.6	3.2	1.5	65	蛇紋岩類	完	
	L 5	S580	30	縄文	磨製石斧	6.3	4.0	1.5	60	蛇紋岩類	完	
	F 5	S793	31	縄文	磨製石斧	7.0	4.0	1.5	75	蛇紋岩類	完	
	F 5	S869	32	縄文	磨製石斧	6.6	2.9	1.1	40	蛇紋岩類	完	
	F 8	S 4	33	縄文	磨製石斧	5.0	3.2	1.2	30	蛇紋岩類	一部	1住
71	G 7	S322	34	縄文	磨石	13.1	8.9	5.8	1,040	安山岩	完	1住
	E 8	S461	35	縄文	磨石	15.5	8.1	7.3	1,430	玄武岩	完	1住
	F 8	S222	36	縄文	磨石	12.6	9.4	5.6	1,000	花崗岩類	完	1住
	G 7	S928	37	縄文	磨石	9.3	12.0	6.9	610	砂岩	1/2	1住
	E 7	S327	38	縄文	磨石	15.1	9.3	4.7	1,040	玄武岩	完	1住
	G 7	S454	39	縄文	磨石	7.4	8.6	6.1	1,010	砂岩	1/2	1住
72	E 7	S462	40	縄文	磨石	6.8	9.7	6.3	550	砂岩	1/2	1住
	F 8	S773	41	縄文	磨石	7.0	6.0	4.1	290	花崗岩類	一部	1住敷石
	E 7	S636	42	縄文	磨石	6.5	5.2	4.1	210	玄武岩	完	1住敷石
	F 7	S291	43	縄文	磨石	11.1	7.5	6.3	830	花崗岩類	完	1住敷石
	F 7	S 2	44	縄文	磨石	13.3	8.2	6.6	1,060	玄武岩	完	1住[illegible]
	F 7	S 1	45	縄文	磨石	8.2	4.5	3.3	180	ヒン岩	1/2	1住[illegible]
	F 7	S 2	46	縄文	磨石	11.6	8.7	6.5	820	玄武岩	完	1住[illegible]
	F 7	S 3	47	縄文	磨石	9.5	8.0	2.9	340	玄武岩	一部	1住[illegible]
	F 7	S10	48	縄文	磨石	7.0	4.8	2.9	150	玄武岩	完	1住[illegible]
73	F 7	S 1	49	縄文	磨石	16.4	11.2	6.7	2,010	花崗岩類	完	1住[illegible]
	F 7	S 2	50	縄文	磨石	12.8	10.5	7.8	1,640	花崗岩	完	1住[illegible]
	F 7	S 1	51	縄文	磨石	8.9	7.8	4.3	460	ヒン岩	完	1住下地穴2
	H 3	S 2	52	縄文	磨石	9.1	8.0	4.9	510	玄武岩	完	1配
73	I 5	S 2	53	縄文	磨石	13.9	5.0	5.5	600	玄武岩	完	11配
	L 5	S 4	54	縄文	磨石	12.5	9.8	6.7	1,120	デイサイト	完	10配
	L 5	S 5	55	縄文	磨石	13.7	10.5	6.1	1,300	玄武岩	完	
74	G 4	S 1	56	縄文	磨石	12.2	10.3	7.0	1,320	花崗岩類	完	13配
	G 4	S12	57	縄文	磨石	14.0	9.2	6.5	1,330	花崗岩類	完	13配
	H 4	S 7	58	縄文	磨石	10.8	9.0	3.5	560	玄武岩	完	13配
	F 5	S42	59	縄文	磨石	11.6	7.2	4.2	5,380	玄武岩(富士山系)	完	13配
	H 4	S 9	60	縄文	磨石	9.0	8.0	5.8	610	花崗岩類	完	13配
	E 5	S48	61	縄文	磨石	11.5	9.2	6.1	1,090	花崗岩	完	13配
	F 4	S49	62	縄文	磨石	12.0	9.6	6.0	1,080	玄武岩	完	13配
75	F 4	S52	63	縄文	磨石	12.3	8.4	4.8	730	花崗岩	完	13配下
	F 4	S54	64	縄文	磨石	7.8	4.8	2.9	175	玄武岩	完	13配下
	H 4	S56	65	縄文	磨石	12.6	8.0	5.7	930	玄武岩	完	13配下
	H 4	S57	66	縄文	磨石	10.4	9.9	6.3	950	花崗岩類	完	13配下
	H 7	S21	67	縄文	磨石	11.8	7.9	4.2	620	花崗岩類	完	土器集中区
	H 7	S631	68	縄文	磨石	13.0	9.2	5.5	1,050	花崗岩類	完	
	H 7	S 7	69	縄文	磨石	13.6	9.9	8.1	1,520	安山岩	完	土器集中区
76	D10	S1011	70	縄文	磨石	11.5	8.6	4.3	640	玄武岩	完	
	F 8	S930	71	縄文	磨石	10.8	7.1	4.1	490	花崗岩類	完	
	C 8	S954	72	縄文	磨石	13.1	9.2	5.0	930	砂岩	完	
	D 9	S991	73	縄文	磨石	10.8	10.1	5.8	1,025	花崗岩類	完	
	J 4	S682	74	縄文	磨石	9.5	7.3	5.5	600	安山岩	一部	
	I6	S632	75	縄文	磨石	7.2	5.1	3.1	165	玄武岩	完	
	J 5	S679	76	縄文	磨石	9.8	8.9	5.4	630	(緑色)デイサイト	一部	
	G 5	S990	77	縄文	磨石	13.2	8.2	6.3	1,000	緑色玄武岩	完	
	D 9	S1003	78	縄文	磨石	6.3	5.5	4.7	230	砂岩	完	
77	C 9	S953	79	縄文	磨石	14.7	11.1	5.5	1,370	玄武岩	完	
	I3	S680	80	縄文	磨石	15.9	8.9	5.6	1,010	玄武岩	完	
	K 5	S759	81	縄文	磨石	13.2	9.9	5.2	865	デイサイト	完	
	J 4	S354	82	縄文	磨石	13.2	12.0	5.5	1,360	安山岩	完	
	J 3	S522	83	縄文	磨石	13.2	8.3	4.9	842	玄武岩	完	
	H 7	S861	84	縄文	磨石	12.1	10.3	5.2	750	デイサイト	完	
78	K 7	S184	85	縄文	磨石	11.0	7.0	4.9	572	花崗岩類	完	
	H 8	S717	86	縄文	磨石	7.6	6.7	5.2	390	花崗岩類	一部	
	I6	S801	87	縄文	磨石	7.2	8.7	5.3	372	花崗岩類	1/2	
	E 8	S1039	88	縄文	磨石	9.4	7.9	3.7	442	花崗岩類	完	
	J 5	S659	89	縄文	磨石	10.5	9.2	6.2	895	安山岩	一部	
	G 7	S1024	90	縄文	磨石	7.9	6.1	4.3	299	玄武岩	完	
	I 5	S 1	91	縄文	磨石	14.7	9.9	6.5	1,240	玄武岩	完	礫群
	J 5	S607	92	縄文	磨石	13.9	11.7	7.3	1,988	花崗岩類	完	
79	I 8	S712	93	縄文	磨石	8.2	7.9	5.7	637	花崗岩類	完	
	I 6	S 6	94	縄文	磨石	10.7	8.5	4.5	580	玄武岩	完	Tr
	I 6	S10	95	縄文	磨石	9.1	8.1	4.9	540	花崗岩類	完	Tr 1
	I 4	S698	96	縄文	磨石	6.4	9.5	5.2	464	(緑色)デイサイト	1/2	
	E 4	S 5	97	縄文	磨+敲石	9.9	8.1	5.3	630	玄武岩	完	13配
	F 4	S53	98	縄文	磨+敲石	8.7	4.5	4.4	290	花崗岩類	完	13配下
	F 9	S830	99	縄文	磨+敲石	11.2	7.9	5.7	768	玄武岩	完	
	I5	S650	100	縄文	磨+敲石	15.9	10.8	6.5	1,550	玄武岩	完	
80	F 5	S673	101	縄文	磨+敲石	11.5	6.8	4.3	540	玄武岩	完	
	K 4	S565	102	縄文	磨+敲石	9.8	6.8	4.5	440	礫岩	完	
	J 4	S590	103	縄文	磨+敲+くぼみ石	11.3	8.6	5.6	794	花崗岩類	完	
	G 8	S1023	104	縄文	磨+敲+くぼみ石	12.0	7.5	5.4	585	花崗岩類	完	
	J 5	S394	105	縄文	磨+くぼみ石	12.0	10.4	5.8	1,094	玄武岩	完	
	K 4	S482	106	縄文	磨+くぼみ石	12.6	9.6	6.0	956	礫岩	一部	

81	G 6	S941	107	縄文	くぼみ石	13.1	8.4	5.1	717	玄武岩	完		
	J 5	S675	108	縄文	くぼみ石	12.2	6.9	3.3	336	玄武岩	完		
	D 7 . E 7		109	縄文	くぼみ石	10.9	8.3	4.3	529	玄武岩	完	16記油表層	
	D 7	S890	110	縄文	敲石	11.6	6.4	5.4	620	砂岩	完		
	G 8	S110	111	縄文	磨面のみ3ヵ石	18.7	12.4	7.6	2,540	花崗岩質	完	1住	
	G 8	S435	112	縄文	磨面のみ3ヵ石	19.1	12.5	4.9	1,880	花崗岩質	完	1住	
82	H 4	S11	113	縄文	磨面のみ3ヵ石	20.1	10.8	7.8	2,580	砂岩	一部	13記	
	H 4	S18	114	縄文	磨面のみ3ヵ石	15.6	14.1	7.9	2,420	玄武岩(雲士由来)	一部	13記	
	H 4	S19	115	縄文	磨面のみ3ヵ石	34.0	13.7	7.3	6,260	花崗岩質	完	13記	
83	F 4	S55	116	縄文	磨面のみ3ヵ石	19.6	19.8	6.2	4,000	玄武岩	完	13記下	
	G 4	S14	117	縄文	磨面のみ3ヵ石	19.7	19.8	6.7	3,580	玄武岩	完	13記	
84	H 7	S 2	118	縄文	磨面のみ3ヵ石	23.5	18.2	5.2	2,700	玄武岩	完	土器集中	
	B 7	S1007	119	縄文	磨面のみ3ヵ石	21.4	15.2	6.9	2,922	玄武岩	完		
85	B 8	S1010	120	縄文	磨面のみ3ヵ石	20.5	17.8	5.4	2,980	花崗岩	完		
	G 5	S940	121	縄文	磨面のみ3ヵ石	23.6	18.2	6.7	5,000	花崗岩	完		
86	F 5	S909	122	縄文	多孔石	18.1	15.9	7.4	2,640	玄武岩	完		
	I 6	S633	123	縄文	多孔石	20.1	18.9	6.4	3,330	玄武岩	完		
87	J 3	S 4	124	縄文	石皿	47.5	19.9	8.4	9,050	玄武岩	完	9記	
	E 5	S 59	125	縄文	石皿	19.6	8.4	5.4	720	玄武岩	一部残	13記	
	I 4	S704	126	縄文	石皿	26.1	21.4	8.3	5,320	玄武岩	一部		
	G 5	S939	127	縄文	石皿	23.6	23.9	10.2	4,320	デイサイト	1/2		
88	K 4	S572	128	縄文	石皿	17.1	19.0	7.2	3,060	玄武岩	1/2		
	H 6	S866	129	縄文	石皿	15.3	13.2	7.6	1,120	玄武岩	一部残		
	H 4	S 8	130	縄文	石皿	10.0	13.0	6.8	1,120	玄武岩	1/2		
	表採		131	縄文	石皿	29.5	22.7	9.9	8,050	玄武岩	完		
	I 5	S744	132	縄文	石皿	16.9	28.2	7.4	1,210	玄武岩	一部残		
	F 8	S442	133	縄文	石皿	7.8	20.2	7.6	1,460	玄武岩	一部残	1住下	
	H 7	S24	134	縄文	石錘	5.6	3.6	2.1	70	花崗岩質	完	土器集中記	
	G 7	S1029	135	縄文	石錘	7.6	5.2	1.2	110	砂岩	完	1住	
	E 9	S849	136	縄文	石錘	6.1	4.4	1.4	50	粘板岩	完	1住	
	E 9	S886	137	縄文	石錘	7.0	5.0	1.6	95	粘板岩	完		
	K 6	S612	138	縄文	石錘	6.9	4.4	1.4	60	粘板岩	完		
	K 4	S762	139	縄文	石錘	5.6	3.0	1.5	40	粘板岩	完		
	F 7	S 6	140	縄文	玉	0.9	0.7	0.5	0.27	瑪瑙	一部残	1住関連遺構	
89	G 8	S224	141	縄文	石神	24.7	3.3	3.2	475	玄武岩	完	1住	
	F 7	S 1	142	縄文	石神	9.5	2.8	2.8	135	点紋片岩	1/2	1住関連遺構	
	F 8	S 1	143	縄文	石神	22.3	4.5	3.0	550	片岩	一部	1住	
	G 8	S434	144	縄文	石神	6.6	6.6	6.6	350	砂岩	1/2	1住	
	E 5	S47	145	縄文	石神	13.6	11.9	8.5	1,670	緑色凝灰岩	一部残	13記	
	G 5	S15	146	縄文	石神	29.8	13.3	10.5	5,300	緑色凝灰岩	一部	13記	
90	E 9	S813	147	縄文	石神	11.3	7.9	6.4	660	花崗岩質	1/2		
	K 4	S566	148	縄文	石神	23.3	13.8	9.8	5,360	緑色凝灰岩	一部残		
	D 9	一括	149	縄文	石神	18.5	8.5	5.3	1,590	砂岩	完	Tr	
91	E 8	S439	150	縄文	磨石	8.5	9.1	5.6	455	フォルンフェルス		1住	
	F 7	S 4	151	縄文	磨石	9.5	7.6	2.3	140	フォルンフェルス		1住関連遺構	
			152	縄文	磨石	9.2	10.6	4.7	480	フォルンフェルス		表採2	
			153	縄文	磨石	18.1	9.3	5.6	1,315	花崗岩		表採3	
92	E 9	S437	154	縄文	板状剥片	30.4	15.7	3.2	850	粘板岩		1住	
	F 6	S400	155	縄文	板状剥片	21.9	14.1	2.9	1,400	粘板岩		1住	
	G 7	S448	156	縄文	板状剥片	13.8	11.8	4.0	830	フォルンフェルス		1住	
	H 8	S405	157	縄文	板状剥片	15.1	21.1	5.2	2,640	フォルンフェルス			
	G 7	S449	158	縄文	板状剥片	14.1	9.9	4.1	910	粘板岩		1住	
93	K 5	S836	159	縄文	板状剥片	17.8	13.8	3.5	780	フォルンフェルス			

93	I 5	S897	160	縄文	板状剥片	16.6	8.4	3.6	620	フォルンフェルス			
	I 6	S684	161	縄文	板状剥片	10.7	7.0	1.6	160	粘板岩			
	H 8	S720	162	縄文	板状剥片	16.2	9.7	3.3	530	粘板岩			
	H 6	S773	163	縄文	板状剥片	12.9	9.1	2.8	450	粘板岩			
	I 4	S780	164	縄文	板状剥片	11.0	3.5	1.4	70	粘板岩			
	I 3	S740	165	縄文	板状剥片	8.3	9.2	1.5	120	粘板岩			
	F 8	S418	166	縄文	板状剥片	11.0	7.5	1.4	120	粘板岩			
	H 5	S795	167	縄文	板状剥片	8.5	3.8	1.0	40	粘板岩			
	I 3	S519	168	縄文	板状剥片	9.2	7.0	1.6	100	粘板岩			
94	J 4	一括	169	縄文	石錐	2.5	2.0	0.5	1.55	チャート	一部		
	I 7	S500	170	縄文	石錐	2.3	2.0	0.4	0.92	チャート	完		
	K 4	S316	171	縄文	石錐	2.3	1.6	0.6	0.78	黒曜石	一部		
	H 6	S365	172	縄文	石錐	2.3	1.5	0.4	0.68	黒曜石	一部		
	H 7	S319	173	縄文	石錐	1.75	1.6	0.35	0.51	黒曜石	完		
	I 8	S611	174	縄文	石錐	1.7	1.3	0.35	0.49	黒曜石	一部		
	K 4	S475	175	縄文	石錐	1.5	1.6	0.3	0.33	黒曜石	完		
	G 7	S1009	176	縄文	石錐	2.1	1.5	0.5	0.8	黒曜石	完		
	I 6	一括	177	縄文	石錐	1.9	1.5	0.4	0.68	黒曜石	一部		
	K 3	S970	178	縄文	石錐	1.5	1.5	0.5	0.63	黒曜石	完	9記石下層	
	I 7	S442	179	縄文	石錐	1.25	1.4	0.3	0.32	黒曜石	一部		
	J 4	S379	180	縄文	石錐	1.3	1.1	0.45	0.33	黒曜石	完		
	J 5	S611	181	縄文	石錐	1.5	1.2	0.3	0.25	黒曜石	完		
	H 8	S516	182	縄文	石錐	1.65	1.2	0.4	0.57	黒曜石	一部		
	I 5	S433	183	縄文	石錐	2.4	1.3	0.35	0.55	黒曜石	一部		
	J 5	一括	184	縄文	石錐	1.35	1.6	0.35	0.19	黒曜石	完		
	F 9	S885	185	縄文	石錐	1.4	1.0	0.3	0.24	黒曜石	一部		
	F 8	S363	186	縄文	石錐	1.5	1.8	0.5	1.08	黒曜石	一部		
	I 4	S 7	187	縄文	石錐	2.15	1.6	0.75	1.72	黒曜石	完	11号記石	
	J 3	S425	188	縄文	石錐	2.0	1.6	0.85	1.79	黒曜石	完		
	H 8	一括	189	縄文	石錐	2.0	1.6	0.65	1.65	黒曜石	完		
	K 3	一括	190	縄文	石錐	2.0	1.6	0.5	1.33	黒曜石	完		
	D 9	一括	191	縄文	石錐	2.45	2.25	0.65	1.99	黒曜石	一部		
	K 3	S333	192	縄文	石錐	2.3	1.2	0.7	1.37	黒曜石	完		
	J 4	S424	193	縄文	石錐	2.0	0.9	0.4	0.42	黒曜石	完		
	F 6	S327	194	縄文	石錐	2.5	0.9	0.45	0.88	黒曜石	完		
	H 7	一括	195	縄文	石錐	2.4	1.0	0.9	1.92	黒曜石	完		
	I 6	一括	196	縄文	石錐	1.45	1.35	0.35	0.43	黒曜石	完		
	J 5	S391	197	縄文	石錐	1.8	1.5	0.6	1.09	黒曜石	完		
	D 9	S949	198	縄文	削器	3.2	1.9	1.2	4.38	黒曜石	完		
	H 7	S538	199	縄文	削器	2.85	1.5	0.8	2.79	黒曜石	完		
95	I 5	一括	200	縄文	楔形石器	1.7	1.5	0.95	2.01	黒曜石			
	G 7	S462	201	縄文	楔形石器	1.85	1.6	0.7	1.8	黒曜石			
	G 7	S361	202	縄文	楔形石器	2.0	1.6	0.7	2.06	黒曜石			
	D 10	一括	203	縄文	楔形石器	1.85	1.5	1.0	2.19	黒曜石			
	G 7	一括	204	縄文	楔形石器	3.1	0.9	0.75	1.84	黒曜石			
	H 7	S424	205	縄文	石核	3.3	2.5	1.9	5.58	黒曜石			
	K 3	S392	206	縄文	石核	2.5	2.0	2.1	13.55	黒曜石			
	G7-8	S431	207	縄文	石核	1.9	3.3	1.6	7.31	黒曜石		1住	
	K 6	一括	208	縄文	石核	1.6	3.6	1.2	6.65	黒曜石			
	H 7	一括	209	縄文	石核	2.0	3.4	1.6	5.36	黒曜石			
	K 5	一括	210	縄文	石核	1.45	3.0	0.7	2.4	黒曜石			
	G 4	S722	211	縄文	二次加工剥片	7.4	7.65	2.25	115	安山岩			

附編－1　塩瀬下原遺跡（第4次調査）の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

塩瀬下原遺跡（山梨県大月市に所在）では、平安時代の土坑群や縄文時代の敷石住居跡などが検出されている。特に縄文時代の敷石住居跡では、その下部から焼土を伴う土坑が検出され、さらに土坑内部で完形の土器が出土している。このような出土状況から、住居を構築する以前に祭祀的なことが行われ、住居廃絶後に石組みをして祭祀場として利用されていた可能性が考えられている。

今回、遺構の構築年代について検討するために放射性炭素年代測定を、土坑の内容物について情報を得るために土壌理化学分析（リン・カルシウム・全炭素・全窒素を選択）・植物珪酸体分析・微細遺物の検出および同定を、燃料材の用材選択について検討するために樹種同定・灰像分析を実施する。また、遺構内部から検出された骨の同定を行う。

1．分析試料

試料は、平安時代とみられる1号焼土遺構・10号焼土遺構・25号焼土遺構、縄文時代とみられる1号敷石住居、さらに1号敷石住居跡の下位で検出された焼土遺構1・2などから採取された土壌・炭化材・骨である。試料の詳細および分析試料について表3に示す。なお、試料名は添付リストに基づき統一した。

2．分析方法

（1）放射性炭素年代測定

前処理として、炭化材は乾燥・粉砕し、また土壌と混じる試料は根などをピンセットで取り除く。これらの試料を水に入れて、浮上してきたものを除去する。次に水酸化ナトリウム溶液で煮沸する。室温まで冷却した後、水酸化ナトリウム溶液を傾斜法で除去する。この作業を除去した水酸化ナトリウム溶液の色が薄い褐色になるまで繰返す。次に濃硝酸を加えて煮沸する。室温まで冷却した後、傾斜法により濃硝酸を除去する。充分水で洗浄した後、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で400℃に加熱）にする。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させる。発生した二酸化炭素は捕集後、純粋な炭酸カルシウムとして回収する。ただし、試料が少量（表中で試料少量と記載があるもの）の場合および土壌と炭化材が混じる試料は、水酸化ナトリウム溶液による処理を省略し、硝酸の代わりに塩酸で煮沸する。

次に測定試料の調製を行う。前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成する。最終的に得られた合成ベンゼン3㎖（足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して3㎖とする）にシンチレイターを含むベンゼン2㎖を加えたものを測定試料とする。

測定は、1回の測定時間50分間を20回繰返し計1,000分間行う。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と自然計数を測定するブランク試料を一緒に測定する。なお、計算は、放射性炭素の半減期としてLIBBYの半減期5,570年を使用する。

（2）微細遺物同定

試料は、500㎖の瓶に入る程度（200ｇ程度）秤量し、正確な重量を測定した後、数%の水酸化ナトリウム水溶液に浸して放置し、試料を泥化させる。なお、送付時の分量が少ない試料もあったが、これはできるだけ多く採取するよう勤めた。分量が0.5㎜の篩を通して水洗し、残渣を集める。2－3日間自然乾燥させた後、その中から同定可能な植物遺体を抽出・同定する。

（3）土壌理化学分析

リン酸は硝酸・過塩素酸分解―バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解―原子吸光光度法、全炭素はチューリン法、全窒素は硫酸分解―水蒸気蒸留法（土壌標準分析・測定法委員会，1986）でそれぞれ実施

表3　分析試料の一覧

試料名			質	14C	微迹	リン	土壌	PO	W	灰像	骨
1号竪土遺構		No.1	土壌			○					
		No.2	土壌			○	○				
		No.3	土壌			○					
		No.4	土壌			○	○	○			
10号竪土遺構	セクションA	5層	土壌			○	○				
	セクションB	5層	土壌		○	○	○	○			
	セクションC	5層	土壌			○	○				
	セクションD	5層	土壌			○	○				
	炭化材	C－1	炭化材						○		
		C－2	炭化材	○					○		
		C－3	炭化材						○		
		C－4	炭化材						○		
		C－5	炭化材						○		
		C－6	炭化材	○					○		
	骨	B1	骨								○
		B2	骨								○
25号竪土遺構	セクション	1層	土壌							○	
		2層	土壌		○	○	○	○			
	炭化材	C－1	炭化材						○		
		C－2	炭化材						○		
		C－3	炭化材	○					○		
		C－4	炭化材						○		
		C－5	炭化材						○		
		C－6	炭化材						○		
		C－7	炭化材						○		
		C－8	炭化材						○		
		C－9	炭化材						○		
		C－10	炭化材						○		
		C－11	炭化材						○		
		C－12	炭化材						○		
		C－13	炭化材						○		
		C－14	炭化材						○		
		C－15	炭化材						○		
		C－16	炭化材	○					○		
		C－17	炭化材						○		
1号敷石住居	セクション	No.1	土壌			○	○				
	炉内埋土	4層炭	土壌							○	
	住居跡下部埋土1 セクション	1層内埋土ブロック	土壌							○	
		炭土炭化材	炭化材	○					○		
	竪土中出土土器内 中央部	下部	土壌		○	○	○	○			
	竪土中出土土器内 内側緑辺部	下部	土壌			○	○				
	住居跡下部埋土2 セクション	5層	土壌							○	
		9層炭化材	炭化材	○					○		
	竪土中出土土器内 中央部	下部	土壌		○	○	○	○			
	竪土中出土土器内 内側緑辺部	下部	土壌			○	○				
	埋設内	底土部	土壌			○	○				
	骨	B－1	骨								○

凡例
^{14}C：放射性炭素年代測定　微迹：微細遺物洗出・分類および同定・解析　リン：リン分析
土壌：土壌理化学分析　PO：植物珪酸体分析　W：樹種同定　灰像：灰像分析

した。以下に各項目の分析操作工程を示す。

＜リン酸およびカルシウム＞

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの節を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00ｇをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸約5mℓを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mℓを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mℓに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg／ｇ）とカルシウム含量（CaOmg／ｇ）を求める。

＜全炭素＞

微粉砕試料0.100～0.500ｇを100mℓ三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mℓを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全炭素量（T-C乾土%）を求める。

＜全窒素＞

風乾細土試料1.00ｇをケルダール分解フラスコに秤り、分解剤約3.0ｇと硫酸10mℓを加え加熱分解する。分解後、蒸留水約30mℓを加え放冷し、分解液全量を供試し水蒸気蒸留法によって窒素を定量する。この定量値と加熱減量法

で求めた水分量から乾土あたりの全窒素含量（T-N乾土%）を求める。

（4）植物珪酸体分析および灰像分析

植物珪酸体分析と灰像分析は、近藤・佐瀬（1986）の方法を参考にし、特に珪化組織片の産状に注目した。植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、列などの組織構造を呈している。植物体が土壌中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や撹乱などの影響によって分離し単体となるが、植物遺体や植物が燃えた後の灰には珪化した組織構造が植物珪酸体列などの形で残されている場合が多い（例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社，1993a）。そのため、珪化組織片の産状により、当時の構築材や燃料材などの種類が明らかになると考えられる。

植物珪酸体および珪化組織片は、試料中の植物珪酸体を過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W，250KHz，1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステイト，比重2.4）の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを検鏡しやすい濃度に帝釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、珪化組織片を近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

（5）樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

（6）骨同定

肉眼で観察し、同定を行う。

3．結果

（1）放射性炭素年代測定

結果を表4に示す。各試料とも誤差範囲が広いが、これは回収される炭素の量が少ないことに由来する。測定の結果、10号焼土遺構から出土する炭化材が1,130年前と880年前、25号焼土遺構で検出される炭化材が1560年前と1450年前である。一方、1号敷石住居では、住居跡下部焼土1セクションから出土する炭化材が4,120年前、住居跡下部焼土2セクション9層から出土する炭化材が3,740年前を示す。

表4　放射性炭素年代分析結果

試料名		質	年代値	誤差		PAL-No.
				+2σ	−2σ	
10号焼土遺構	C−2	炭化材（少量）	1130	300	290	543
	C−6	炭化材（少量）	880	790	720	544
25号焼土遺構	C−3	炭化材（少量）	1560	1330	1140	545
	C−16	炭化材（少量）	1450	1210	1050	546
1号敷石住居	住居跡下部焼土1　セクション　出土炭	炭化材・土壌	4120	450	430	548
	住居跡下部焼土2　セクション　9層炭	炭化材	3740	190	190	547

注1）年代値：1,950年を基点とした値。
注2）誤差：測定誤差2σ（測定値の95%が入る範囲）を年代値に換算した値。
注3）PAL：パリノ・サーヴェイ株式会社で測定。

（2）微細遺物同定

結果を表5に示す。残渣は少なく、大部分は鉱物や砂礫であり、炭化物は非常に少ない。また、炭化物は1ミリ程度の微細なものがほとんどで、同定可能なものは見当たらない。

表5　微細遺物同定結果

試料名				分析量	炭化物残渣	炭化物の状況
10号焼土遺構	セクションB		5層	200g	+	微細な炭化材（同定不能）
25号焼土遺構	セクション		2②層	186g	+	微細な炭化材（同定不能）
1号敷石住居	住居跡下部焼土1	覆土中出土土器内　中央部	下部	190g	+	微細な炭化材（同定不能）
	住居跡下部焼土2	覆土中出土土器内　中央部	下部	51g	+	微細な炭化材（同定不能）

+は0.1g以下

（3）土壌理化学分析

分析結果を表6に示す。以下、各項目の結果を示す。

＜リン酸およびカルシウム＞

リンは生物にとって主要な構成元素であり、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれる。生物体内に蓄積されたリンは、やがて土壌中に還元され、土壌有機物や土壌中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成する。このため遺跡での動物起源残留物の痕跡確認などに有効で、これまでにも動物起源残留物の痕跡をリン酸含量から確認した事例も多い（竹迫ほか，1980；竹迫，1981；板上，1984；竹迫，1985；中根，1992など）。カルシウムもまたリン酸とともに人骨に多量に含まれる元素であるが、カルシウムはリン酸よりも土壌中での拡散移動が大きいことから、特徴的な濃集が見られることは稀であり、カルシウム単独での評価は実際には難しいものとなる。

各試料のリン酸含量は2.39～18.88P_2O_5mg/gであり、試料ごとに大きな差異が認められる。特に著しく高いリン酸含量であった試料は1号焼土遺構No.2、1号敷石住居跡下部焼土1と焼土2から採取された試料である。また、1号敷石住居跡跡下部焼土1および焼土2から採取された試料についてはカルシウム含量も高い傾向が認められる。

＜全炭素および全窒素＞

土壌中の炭素・窒素は主に土壌有機物の構成成分として存在し、その給源は動植物の遺体、根、微生物などに由来する。したがって、炭素・窒素含量を測定することは土壌への有機物富化を知る重要な指標の一つと成りうる。一方、炭素量を窒素量で除した炭素率（C／N）は土壌に還元された有機物の分解程度を表す指標の一つであり、新鮮有機物で大きく（稲藁・落葉で60～100）、分解が進行した土壌有機物（腐植）で小さい（10～20の範囲）。さらに分解（腐植化）が進行し、腐植化度が上昇すると、C／Nは再び上昇する。一般的な土壌では10～12前後の値が普通であるが、有機物の分解程度の低い場合あるいは有機物の腐植化の進んだ場合は20を越える土壌もある。

全炭素含量は0.16～2.08%、全窒素含量は0.03～0.19%と低い傾向にある。一方、C／Nは炭素・窒素含量の低い1号土抗のNo.4において極めて低いが、それ以外が7.1～12.3である。

表6　土壌理化学分析結果

試料名			土性	土色	P_2O_5(mg/g)	CaO(mg/g)	全炭素(%)	全窒素(%)	C／N	備考
1号焼土遺構		No.1	LiC	5YR3/2	暗赤褐	5.33	—	—	—	—	
		No.2	LiC	5YR3/2	暗赤褐	7.49	9.81	0.85	0.12	7.1	
		No.3	LiC	5YR4/3	にぶい赤褐	18.39	—	—	—	—	
		No.4	SL	5YR3/6	暗赤褐	3.90	9.26	0.16	0.03	5.3	
10号焼土遺構	セクションA	5層	SL	5YR3/2	暗赤褐	4.62	8.14	1.05	0.11	9.5	礫有り
	セクションB	5層	SL	5YR3/2	暗赤褐	3.74	9.70	0.84	0.10	8.4	礫含む
	セクションC	5層	SCL	7.5YR3/2	黒褐	6.99	8.81	1.25	0.13	9.6	礫含む
	セクションD	5層	SCL	7.5YR3/2	黒褐	3.92	8.56	1.32	0.16	8.3	礫含む
25号焼土遺構	セクション	2◎層	LiC	7.5YR3/1	黒褐	3.36	9.15	2.08	0.19	10.9	礫有り
1号敷石住居	セクション	No.1	LiC	7.5YR3/1	黒褐	2.39	8.71	1.39	0.15	9.3	礫有り
	住居跡下部焼土1	焼土中色土土器内 中央部	下層	CL	7.5YR3/2	黒褐	8.71	18.81	1.06	0.09	11.8	礫有り
		焼土中色土土器内 内側縁辺部	下層	LiC	7.5YR3/2	黒褐	7.03	13.68	1.31	0.13	10.1	礫有り
	住居跡下部焼土2	焼土中色土土器内 中央部	下層	CL	7.5YR3/2	黒褐	18.88	32.94	0.89	0.08	11.1	礫有り
		焼土中色土土器内 内側縁辺部	下層	CL	7.5YR3/1.5	黒褐	9.36	19.15	1.17	0.12	9.8	礫有り
		埋設内	埋土層	CL	7.5YR3/1.5	黒褐	6.87	13.31	1.11	0.09	12.3	礫有り

注（1）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
（2）土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。
SL…砂壌土（粘土0～15%、シルト0～35%、砂65～85%）
SCL…砂質埴壌土（粘土15～25%、シルト0～20%、砂 5～80%）
CL…埴壌土（粘土15～25%、シルト20～45%、砂 3～65%）
LiC…軽埴土（粘土25～45%、シルト 6～45%、砂10～55%）

（4）植物珪酸体分析および灰像分析

結果を表7と図96に示す。いずれの試料からも植物珪酸体が検出されるものの、保存状態の悪いものが多く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

1号焼土遺構、10号焼土遺構、25号焼土遺構から採取された試料では、いずれもタケ亜科の産出が目立ち、ウシクサ族（ススキ属などを含む）やイチゴツイナギ亜科なども検出される。なお、1号焼土遺構No.4からは栽培植物のイネ属がわずかに認められ、その中には籾殻に形成される顎珪酸体や葉部の短細胞列など珪化組織片もわずかに含まれる。また、25号焼土遺構からは、特徴的な形態を有する植物珪酸体を含まない不明組織片が検出される。

1号敷石住居から採取された試料では、いずれもタケ亜科の産出が目立ち、ウシクサ族（ススキ属などを含む）

やイチゴツイナギ亜科などが検出される。なお、炉内焼土4層灰からイネ属短細胞列と特徴的な形態を有する植物珪酸体を含まない不明組織片が、また住居下部焼土1覆土中出土土器内央部下部からタケ亜科短細胞列が、わずかに認められる。

表7　植物珪酸体分析結果

種類 / 試料名	1号土抗 No.4	10号土抗 セクション 5層	25号土抗 セクション 1層	25号土抗 セクション 2㊁層	1号住居 炉内焼土 4層灰	住居下部焼土1 セクション 1層内焼土ブロック	住居下部焼土1 覆土中出土土器内中央部 下部	住居下部焼土2 セクション 5層	住居下部焼土2 覆土中出土土器内中央部 下部
イネ科葉部短細胞珪酸体									
イネ族イネ属	3	-	-	-	3	-	-	-	-
タケ亜科	147	370	306	271	241	211	213	196	238
ヨシ属	2	-	-	-	-	-	-	-	-
ウシクサ族ススキ属	1	2	2	5	1	-	1	-	1
イナブツナギ亜科	-	-	4	3	2	-	-	-	1
不明キビ型	22	26	58	34	45	8	10	20	5
不明ヒゲシバ型	5	16	8	13	13	6	7	8	3
不明ダンチク型	33	52	33	23	65	30	29	52	30
イネ科葉身機動細胞珪酸体									
イネ族イネ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科	86	94	104	113	90	125	92	92	102
ウシクサ族	2	1	2	-	2	-	4	2	1
不明	18	10	11	15	15	19	21	13	7
合　計									
イネ科葉部短細胞珪酸体	213	466	411	349	370	255	260	276	278
イネ科葉身機動細胞珪酸体	107	105	117	128	107	144	117	107	110
総　計	320	571	528	477	477	399	377	383	388
組織片									
イネ属葉珪酸体	1	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ属短細胞列	3	-	-	-	1	-	-	-	-
タケ亜科短細胞列	-	-	-	-	-	-	1	-	-
不明キビ型短細胞列	-	-	8	3	2	-	-	-	-

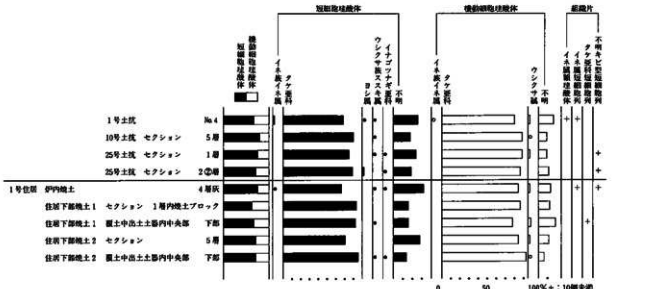


図96　植物珪酸体群集と組織片の産状
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。
なお、●○は1%未満の種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により＋の記号で示す。

（5）樹種同定

樹種同定結果を表8に示す。

1号敷石住居跡下部焼土1炭化材と25号焼土遺構C－13は、保存状態が悪く、木材組織の特徴を観察することができないため不明とした。10号焼土遺構C－3、25号焼土遺構C－11・17には複数の種類が認められる。これらの炭化材は、針葉樹2種類（モミ属・カヤ）、広葉樹9種類（クマシデ属イヌシデ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・コナラ属・クリ・モモ・カエデ属・カキノキ属・ムラサキシキブ属）とイネ科タケ亜科に同定される。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・モミ属（*Abies*）　マツ科

試料は年輪界付近で割れており、早材部の一部が観察できる。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。傷害樹脂道が認められる試料がある。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。放射組織は単列、1～20細胞高。

・カヤ（*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.）
イチイ科カヤ属

試料は年輪界で割れている。軸方向組織は仮道管のみで構成され、晩材部への移行は緩やかで晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。放射組織は単列、1～10細胞高。夜道管内壁には対をなしたらせん肥厚が認められる。

・クマシデ属イヌシデ節（*Carpinus* subgen. *Euarpinus*）　カバノキ科

表8　炭化材の樹種同定結果

試料名				樹種
10号竪土遺構			C－1	ムラサキシキブ科
			C－2	モモ
			C－3	コナラ属
				イネ科タケ亜科
			C－4	カヤ
			C－5	コナラ属アカガシ亜属
			C－6	カヤ
25号竪土遺構			C－1	カヤ
			C－2	モミ属
			C－3	カエデ属
			C－4	カヤ
			C－5	イネ科タケ亜科
			C－6	モミ属
			C－7	カヤ
			C－8	イネ科タケ亜科
			C－9	カヤ
			C－10	モミ属
			C－11	カヤ
				カキノキ属
				イネ科タケ亜科
			C－12	カエデ属
			C－13	不明
			C－14	クマシデ属イヌシデ節
			C－15	モミ属
			C－16	モミ属
			C－17	カヤ
				コナラ属コナラ亜属コナラ節
1号竪石住居	住居跡下部焼土1	セクション	出土炭化材	クマシデ属イヌシデ節
	住居跡下部焼土2	セクション	9層炭化材	不明
				クリ

散孔材で、管孔は放射方向に2～4個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ～Ⅱ型、1～3細胞幅、1～40細胞高のものと集合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*）　ブナ科

環孔材で孔圏部はほぼ1列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*）　ブナ科

試料は脆く、電子顕微鏡による観察はできなかった。放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、単独で放射方向に配列する。放射組織は複合放射組織と単列組織とがある。

・コナラ属（*Quercus*）　ブナ科

やや厚壁の道管が単独で配列している様子が見られるが、小片で保存状態が悪いために環孔材・放射孔材などの区別はできない。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

以上の特徴から、コナラ属であると判断できるが、環孔材となるコナラ亜属なのか、放射孔材となるアカガシ亜属なのかは不明である。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

試料は全て年輪界で割れている。晩材部の道管径と、年輪界で僅かに見られるな翌年の道管の一部から推定される径の比較から環孔材と判断した。晩材部の小道管は漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・モモ（*Prunus salicina* Lindley）　バラ科サクラ属

環孔材～散孔材で、年輪のはじめにやや大型の道管が4～5列配列し、やや急激に管径を減じた後、晩材部へ向かって管径を漸減させて散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～5細胞幅、1～50細胞高。

・カエデ属（*Acer*）　カエデ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、ほぼ単独、まれに2～3個が複合して、晩材部へ向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～8細胞幅、1～40細胞高。木口面で帯状の不規則な紋様が見られる。

・カキノキ属（*Diospyros*）　　カキノキ科

試料は小片で年輪界は含まれていなかった。散孔材と考えられ、管壁は厚く、単独または2～3個が放射方向に散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は異性Ⅲ型、1～2細胞幅、10～20細胞高で階層状に配列する。

・ムラサキシキブ属（*Callicarpa*）　　クマツヅラ科

散孔材で、横断面では多角形、管孔は単独および2～3個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅱ～Ⅰ型、1～3細胞幅、1～20細胞高。

・イネ科タケ亜科（*Gramineae* subfam. *Bambusoideae*）

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱が認められ、放射組織は認められない。タケ亜科は、タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。

（6）骨同定結果

1号敷石住居跡の焼土から出土したB－1（骨片）は、遺存状態が悪いために種類を特定できなかったが、組織を観察する限り、獣骨に由来する可能性が高い。

4．考察

4－1．焼土遺構群の検証

（1）遺構の構築年代

10号焼土遺構から出土する炭化材が1,130年前と880年前、25号焼土遺構で検出される炭化材が1,560年前と1,450年前である。このように炭化材の年代値が両遺構間で明らかに異なる傾向を示すことから、10号焼土遺構と25号焼土遺構で構築時期が異なっていた可能性が高い。すなわち、10号焼土遺構が約1,000年前前後、25号焼土遺構が約1,500年前前後に構築された可能性があり、遺物の出土状況が異なる点もこのような点と関連しているのであろう。

（2）焼土遺構の内容物

今回の分析結果では全炭素含量・全窒素含量ともに低い傾向にあり、またC／Nも普通の土壌の約10前後を示す。これより、全体的に有機物の供給量が少なく、ここで得られる炭素含量も一般的な土壌中の腐植物質であると推察される。このことから、リン酸含量が著しく高い場合は、動植物に由来するリン酸の富化があると判断することができる。土壌中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、Bowen（1983）、Bolt・Bruggenwert（1980）、川崎ほか（1991）、天野ほか（1991）などの報告事例から天然賦存量の上限は約3.0P_2O_5mg/g程度と推定される。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では5.5P_2O_5mg/g（川崎ほか，1991）という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌では6.0P_2O_5mg/gを越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通1～50CaOmg/g（藤貫，1979）といわれ、含有幅がリン酸よりも大きい。

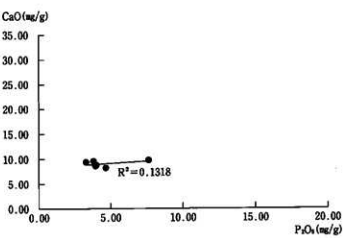


図97　1号・10号・25号土坑におけるリン酸ーカルシウム含量の相関関係

今回の分析結果をみると1号焼土遺構試料番号3・2でリン酸含量が極めて高い値を示すことから、1号焼土遺構の内部には何らかの動植物遺体が存在していた可能性がある。

ただし、カルシウム含量はばらつきが小さく、図97に示したようにリン酸との相関関係もほとんどない（相関係数0.1318）。また、土坑底部よりイネ属に由来する顕珪酸体や短細胞列などの珪化組織片がわずかに認められ、埋

積物中に焼土粒子が見られる。したがって、本土坑では、燃料材の灰などが混入することでリン酸含量が高くなったと考えられる。

10号焼土遺構では、焼けた骨片が検出されているにも係わらず、リン酸・カルシウムに特徴的な富化がみられない。これは、骨片が検出される場所が土坑の端であり、同一遺構内部でもリン酸・カルシウムなどの成分が偏って分布すること（中根, 1992）に関係していると思われる。なお、25号焼土遺構も土壌成分に特徴的な富化が認められないことから、土坑内部に遺体が埋納されていたことを特定することは難しい。また、特徴的な珪酸体を持たない不明組織片や炭化材が検出されていること、さらに土器片などが検出されていることから、墓坑以外の用途として利用されていた可能性もあり、発掘調査所見も含めて検討を重ねる必要もある。

（3）燃料材の用材選択

平安時代の燃料材は、合計で11種類が認められた。遺構別に見ると、10号焼土遺構で6種類、25号焼土遺構で7種類であった。使用されている種類に若干の違いが見られるが、2遺構とも試料数に対して種類数が多い点は一致している。その種類構成を見ると、針葉樹のモミ属とカヤ、コナラ節、イヌシデ節、カエデ属等の落葉広葉樹、常緑広葉樹のアカガシ亜属、クヌギ亜科等様々な種類が見られる。また、モモは栽培植物として中国から伝わってきた種類であり（粉川, 1988）、カキノキ属も現在の分布などを考慮すれば、栽培種のカキノキである可能性が高い。これらの結果から燃料材は特定の種類を利用したのではなく、周辺に生育していた種類、栽培種の剪定などで得られた木材、加工時の余材や廃材など、入手できる様々な種類を利用していたことが推定される。

栽培種のモモは、これまでにも高根町社口遺跡、長板町健康村遺跡などで平安時代の遺構から材や種子が出土している（パリノ・サーヴェイ株式会社, 1994；新山, 1997；植田, 1997）。御勅使川扇状地に位置する二本柳遺跡では、9世紀～13世紀の畦畔上に植えられた樹木の中にモモが確認されている（未公表資料）。これらの結果から、少なくとも平安時代には甲府盆地周辺で広く栽培されていたことが推定され、本遺跡でも同様に栽培されていたと推定される。また、社口遺跡や今回の結果から果実の利用だけでなく、剪定などで得られた木材も利用していたことがうかがえる。

一方、植物珪酸体の産状をみると、1号焼土遺構から土坑底部よりイネ属に由来する顆珪酸体や短細胞列などの珪化組織片が、また25号焼土遺構1層で特徴的な形態を持たない珪酸体を含む不明組織片が検出された。これより、少なくとも当該期になると、周辺での稲作地から籾殻や稲藁などが燃料材として持ち込まれて利用されていたと考えられる。なお、検出個数の少なかった点は燃焼後の灰を別の場所に廃棄した、あるいは土壌の混入量が多くて埋積物中で希釈されたなどが考えられる。

4－2．1号敷石住居跡の検証

（1）遺構の構築年代

1号敷石住居跡下部焼土1から出土する炭化材が4,120年前、焼土2から出土する炭化材が3,740年前であった。これより、1号住居跡下部の焼土1および焼土2は約4,100ないし3,740年前前後に構築されたと考えられる。

（2）埋甕の内容物

各試料の全炭素・全窒素とも平安時代の焼土遺構群と同様な傾向を示すことから、リン酸含量が著しく高い場合は動植物に由来するリン酸の富化があると判断することができる。先に示した天然賦存量と対照試料とした1号敷石住居セクション試料番号1のリン酸含量（2.39P_2O_5mg/g）および

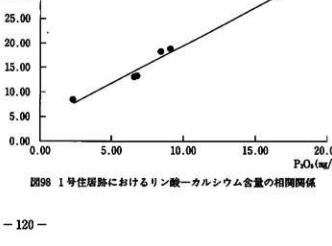


図98 1号住居跡におけるリン酸―カルシウム含量の相関関係

カルシウム含量（8.71CaOmg/g）を一つの判断基準とすると、住居跡下部焼土1および焼土2の出土土器内部に充填した土壌には外的要因、おそらくは動物遺体が存在したことによってリン酸やカルシウムが富化されたことが推定される。また、リン酸とカルシウムの含量は、最上部よりも下部で、また縁辺部よりも中央部で高くなる傾向があり、しかも図98に示すように極めて高い正の相関（相関係数が0.9819）が成り立っている。このような傾向から、土器の底中央部付近に遺体が存在していたと推察される。

（3）燃料材の用材選択

1号敷石住居炉内焼土4層灰ではイネ属短細胞列がわずかに産出した。山梨県内では、弥生時代前期前葉の中道遺跡から出土した土器胎土よりイネ属の植物珪酸体（機動細胞珪酸体）が検出されている（外山，1995）。今回のイネ属の産出は山梨県内でのイネ属の利用開始時期を考える上で興味深いが、植物根による下方への落ち込みなどの可能性も否定できず、埋積過程を検討するとともに、今後同時期の同様な焼土について調査例を増やし、検討することが望まれる。

一方、1号敷石住居跡下部焼土1および焼土2から出土した炭化材は、イヌシデ節、クリ、種類不明が各1点であった。この結果から、これらの落葉広葉樹が燃料材として利用されていたことが推定される。焼土穴1と焼土穴2で樹種が異なることから、遺構によっては種類構成が異なっていた可能性があるが、点数が少ないため断定できない。このうち、クリは白州町上北田遺跡や高根町社口遺跡で縄文時代の住居構築材や燃料材と考えられる炭化材に認められており（パリノ・サーヴェイ株式会社，1993b；植田，1997）、本遺跡と同様の用材選択が行われていたことがうかがえる。クリは、縄文時代の植物食糧としても重要な種類とされており、縄文時代前期頃から出土例が増加する（粉川，1983；山田，1999）。この背景には、栽培による果実や材の安定した供給があったと考えられている（千野，1983）。本遺跡におけるクリの利用が、栽培によるものかは、調査資料数が少ないため、詳細は不明である。なお、焼土1出土土器下部ではタケ亜科短細胞列がわずかに認められた。土器内に焼土が混入したものとすれば、燃料材の灰も混入していたことがうかがえ、燃料材の一つとしてタケ亜科が利用されたと思われる。

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，P.28-36.

Bolt, G. H.・Bruggenwert, M. G. M.（1980）「土壌の化学」．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・　陽　捷行訳，P.235-236，学会出版センター［Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M.（1976）SOIL CHEMISTRY］.

Bowen, H. J. M.（1983）「環境無機化学　一元素の循環と生化学一」．浅見輝男・茅野充男訳，297p.，博友社［Bowen, H. J. M.（1979）Environmental Cemistry of Elements］.

土壌標準分析・測定法委員会編（1986）「土壌標準分析・測定法」．354p.，博友社.

川崎　弘・吉田　滔・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，P.23-27.

粉川昭平（1983）縄文人の主な植物食糧．加藤晋平・小林達雄・藤本　強編「縄文文化の研究2　生業」，P.42-49，雄山閣.

粉川昭平（1988）穀物以外の植物食．金関　恕・佐原　眞編「弥生文化の研究2　生業」，P.112-115，雄山閣.

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，P.31-64.

中根秀二（1992）1号方形周溝墓の自然科学分析．「田園調布南2　都立田園調布高校内埋蔵文化財発掘調査報告書」，P.133-149，都立学校遺跡調査会.

新山雅広（1997）社口遺跡から算出した大型植物化石．「社口遺跡第3次調査報告書」，P.191-194，山梨県北巨摩郡高根町教育委員会・社口遺跡発掘調査団.

農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）「新版標準土色帖」.
パリノ・サーヴェイ株式会社（1993a）自然科学分析からみた人々の生活(1). 慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡　第1巻　総論」, P347-370, 慶應義塾.
パリノ・サーヴェイ株式会社（1993b）上北田遺跡から出土した炭化材および炭化種子の同定.「山梨県北巨摩郡白州町　上北田遺跡　県営圃場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, P.1-5, 白州町教育委員会・峡北土地改良事務所.
パリノ・サーヴェイ株式会社（1994）健康村遺跡自然科学分析調査報告.「山梨県北巨摩郡長板町　健康村遺跡一（仮称）東京都新宿区立区民健康村建設事業に伴う発掘調査報告書一」, P.116-128, 新宿区区民健康村遺跡調査団.
ペドロジスト懇談会編（1984）「土壌調査ハンドブック」. 156p., 博友社.
坂上寛一（1984）小山田No.15遺跡・縄文土坑と現代芋穴における全リン酸分布の比較. 東京都町田市・小山田遺跡群IV, 8p., 小山田遺跡調査会.
竹迫　紘（1981）11号住居址内埋甕中の土壌リン酸分析.「横浜市道高速2号線文化財埋蔵文化財発掘調査報告」, 156-158, 横浜市道高速2号線文化財埋蔵文化財発掘調査団.
竹迫　紘（1985）L地区北壁土層のリン分析結果について.「武蔵国分寺跡発掘調査報告書」, P.103-105, 武蔵国分寺遺跡調査会.
竹迫　紘・加藤哲郎・板上寛一・黒部　隆（1980）神谷原遺跡への土壌学的アプローチ. 神谷原I, P.412-416, 八王子市椚田遺跡調査会.
千野裕道（1983）縄文時代のクリと集落周辺植生　一南関東地方を中心に一. 東京都埋蔵文化財センター研究論集, II, P.25-42.
外山秀一（1995）稲作の波及と初期水田の立地. 日下雅義編著「古代の環境と考古学」, P.186-216, 古今書院.
植田弥生（1997）社口遺跡から出土した炭化材の樹種.「社口遺跡第3次調査報告書」, P.194-198, 山梨県北巨摩郡高根町教育委員会・社口遺跡発掘調査団.
山田悟郎（1999）クリを管理し北海道まで広げた縄文人. 小林達雄編「最新　縄文学の世界」,　P.96-103, 朝日新聞社.

附編－２　塩瀬下原遺跡（第４次調査）出土の黒曜石製石器の産地推定

望月明彦

分析法

試料にX線を照射すると、試料に含まれる元素ごとに違った波長（エネルギー）をもつ蛍光X線が発生する。発生した蛍光X線の波長（エネルギー）から含まれている元素の種類がわかり、それぞれの元素の蛍光X線強度から元素組成を知ることができる。これが蛍光X線分析の簡単な原理である。試料をまったく損傷せずに分析でき、迅速に分析ができることが最大の特長である。分析装置にはセイコーインスツルメンツ社のSEA-2110L蛍光X線分析装置を用いた。

測定条件は以下のとおりである。

印加電圧：50kV　印加電流：産地原石 17μA　遺跡出土試料 自動設定

雰囲気：真空　測定時間：産地原石500sec　遺跡出土試料 240sec　照射径：10mm

分析試料

産地原石：北海道から九州まで主な産地の原石はほとんど分析されている。ここでは、東日本の産地について示す。第99図は黒曜石産地の位置、第９表はそれらの産地名、判別群、分析数などを示す。

遺跡出土試料：山梨県埋蔵文化財センターによって行われた塩瀬下原遺跡第４次調査で出土の黒曜石製石器である。同伴した土器からは縄文時代後期の堀之内IIから加曽利Ｂ１の時期とされる。

第99図　東日本の黒曜石産地

産地推定法

蛍光X線分析による産地推定法では、あらかじめ産地から採取した原石を分析しておき、産地原石によるデータベースを作成しておく。同様に遺跡出土試料を分析し、原石のデータベースと比較して産地を推定する。

推定法としては図を用いて推定を行う判別図法と多変量解析法である判別分析の二つの方法を用いた。これらの方法で用いた指標は以下のとおりである。

各元素の蛍光X線強度から次のような産地推定のための指標を計算する。

A＝(Rb強度＋Sr強度＋Y強度＋Zr強度)とした時、

Rb分率＝Rb強度×100/A　Sr分率＝Sr強度×100/A　Zr分率＝Zr強度×100/A

Mn強度×100/Fe強度　log(Fe強度/K強度)

第9表　判別図に用いた産地原石判別群(SEA-2110L蛍光X線分析装置による)

都道府県	地図No.	エリア	新判別群	旧判別群	新記号	旧記号	原石採取地
北海道	1	白　滝	八号沢群		STHG		赤石山山頂(19)、八号沢露頭(　)
			黒曜の沢群		STKY		黒曜の沢(6)、幌加林道(4)
	2	上士幌	三　股　群		KSMM		十三ノ沢(16)
	3	霊　戸	安　住　群		ODAZ		安住(25)、清水ノ沢
	4	旭　川	高砂台群		AKTS		高砂台(6)、雨紛台(5)、
			春光台群		AKSK		
	5	名　寄	布　川　群		NYHK		布川(10)
	6	新十津川	須　田　群		STSD		須田(6)
	7	赤井川	曲　川　群		AIMK		曲川(25)、土木川(　)
	8	豊　浦	豊　泉　群		TUTI		豊泉(16)
青　森	9	木　造	出来島群		KDDK		出来島海岸(34)
	10	深　浦	八森山群		HUHM		八森山公園(8)、六角沢(8)
秋　田	11	男　鹿	金ヶ崎群		OGKS		金ヶ崎温泉(37)、脇本海岸
			脇　本　群		OGWM		脇本海岸(16)
山　形	12	羽　黒	月　山　群		HGGS		月山荘前(30)、湖日町田代1沢(18)楢
			今野川群		HGIN		今野川(9)、大網川(5)
新　潟	13	新　津	金　津　群		NTKT		金津(29)
	14	新発田	板　山　群		SBIY		板山牧場(40)
栃　木	15	高　原	甘湯沢群	高原山1群	THAY	TKH1	甘湯沢(50)、桜沢(20)
			七尋沢群	高原山2群	THNH	TKH2	七尋沢(9)、自然の家(9)
長　野	16	和　田 (WD)	鷹　山　群	和田峠1群	WDTY	WDT1	鷹山(53)、小深沢(54)、東餅屋(36)、 笈古峠(50)、土屋橋北(83)、土屋橋西 (68)、丁字御堂(18)
			小深沢群	和田峠2群	WDKB	WDT2	
			土屋橋北群	和田峠3群	WDTK	WDT3	
			土屋橋西群	和田峠4群	WDTN	WDT4	
			土屋橋南群	和田峠5群	WDTM	WDT5	
			笈古ライト群		WDHY		
			古　峠　群		WDHT		
		和　田 (WO)	ブドウ沢群	男女倉1	WOBD	OMG1	ブドウ沢(36)、ブドウ沢右岸(18) 牧ヶ沢下(36)、高松沢(40)
			牧ヶ沢群	男女倉2	WOMS	OMG2	
			高松沢群	男女倉3	WOTM	OMG3	
	17	諏　訪	星ヶ台	霧ケ峰	SWHD	KRM	星ヶ塔第1鉱区(36)、星ヶ塔第2A (36)、星ヶ台B(11)、水月霊園(36)、 水星ヶ塔のりこし(36)
	18	蓼　科	冷　山	蓼　科	TSTY	TTS	冷山(33)、麦草峠(36)、麦草峠東(33) 黒し森(4)、八ヶ岳7(17)、八ヶ岳9(1)
			双子山		TSHG		双子池(　)
			擂鉢山群		TSSB		擂鉢山(31)、亀
神奈川	19	箱　根	芦ノ湯群	芦ノ湯	HNAY	ASY	芦ノ湯(34)
	20		畑　宿　群	畑　宿	HNHJ	HTJ	畑宿(71)
			黒岩橋群	箱根系A群	HNKI	HKNA	黒岩橋(9)
	21		鍛冶屋群	鍛冶屋	HNKJ	KJY	鍛冶屋(30)
			上多賀群	上多賀	HNKT	KMT	上多賀(18)
静　岡	22	天　城	柏　峠　群	柏　峠	AGKT	KSW	柏峠(80)
東　京	23	神　津	恩馳島群	神津島1群	KZOB	KOZ1	恩馳島(100)、長浜(43)、
			砂糠崎群	神津島2群	KZSN	KOZ2	砂糠崎(40)、長浜(5)
島　根	24	隠　岐	久　見　群		OKHM		久見パーライト中(30)、久
			奈　浦　群		OKMU		奈浦海岸(30)、加茂(19)、
			崎　群		OKMT		崎地区(16)
その他			N　K　群		NK		中ッ原1G、5G(遺跡試料)

判別図法ではZr分率を除く指標をプロットしてグラフ化する。以下の図で淡色の記号は産地原石を示し、黒色の●は塩瀬下原遺跡出土の黒曜石を示す。第100－1図は横軸にRb分率、縦軸にMn強度×100/Fe強度をプロットした図である。第100－2図は横軸にSr分率、縦軸にlog(Fe強度/K強度)をプロットした図からなる。●がプロットされたところの原石群がその試料の推定産地となる。

判別分析では、前述のすべての指標を用いる。判別図法で産地を推定する時は、遺跡出土試料のプロットと最も近い所にプロットされる産地をその試料の産地と判別する。言い換えれば、試料と各産地群の中心との距離を比較して、その距離がもっとも短い産地をその試料の産地としている。判別図法の場合には、縦軸と横軸だけの2次元であるが、数学的には3次元以上でも距離を計算することが可能である。判別分析では遺跡出土の各試料毎に各産地との距離（マハラノビス距離と呼ばれる）を計算する。試料との距離がもっとも小さい産地がその試料の産地である、と推定される。また、それぞれの産地とのマハラノビス距離から、試料が各産地に属する確率も計算される。

Nb/Zr/Rb
Rb*100/(Rb+Sr+Y+Zr)
箱根エリア
中部・関東の産地
東北北陸・隠岐の産地
北海道の産地
遺跡の出土試料

Sr/Zr
Sr*100/(Rb+Sr+Y+Zr)
中部・関東の産地
東北北陸・隠岐の産地
北海道の産地
遺跡出土試料

第100-1・2図　判別図

確率が1に近いほど信頼性が高い推定である、といえる。

判別図法と判別分析との結果は非常に一致度が高いが、和田鷹山群と和田小深沢群など元々類似した群の場合には異なる結果となる場合もある。このような場合は判別分析の結果を採用している。

産地推定結果

第100－1図、第100－2図中の●は塩瀬下原遺跡から出土した各試料のプロットである。これらのプロットを淡色で示した記号と比較することにより、塩瀬下原遺跡では長野県の和田エリア（2点）、諏訪エリア(22点)、蓼科エリア（2点）のほかに神津島エリア（3点）と箱根エリア（1点）の黒曜石が検出された。箱根エリアの黒曜石で一般に用いられるのは畑宿群であるが、本遺跡で検出されたのは鍛冶屋群である。試料の状態も良好で信頼できる結果と考えられる。鍛冶屋群の黒曜石が石器として使用された例はほとんどない。

第10表　塩瀬下原遺跡出土黒曜石製石器の産地推定結果

分析番号	遺物番号	判別図	判別分析						石器属性
		判別群	候補1	候補2	距離1	距離2	確率1	確率2	
SOS－1	2トレ-S45	SWHD	SWHD	WDTN	6.54	90.28	1	0	剥片
SOS－2	S471	KZOB	KZOB	KZSN	5.19	59.52	1	0	剥片
SOS－3	S510	SWHD	SWHD	SBIY	12.43	69.03	1	0	剥片
SOS－4	S639	SWHD	SWHD	WDTN	5.15	107.24	1	0	剥片
SOS－5	S755	SWHD	SWHD	SBIY	2.19	89.72	1	0	剥片
SOS－6	S771	SWHD	SWHD	SBIY	6.51	99.56	1	0	剥片
SOS－7	S833	SWHD	SWHD	WDTN	9.35	107.84	1	0	剥片
SOS－8	S321	SWHD	SWHD	SBIY	4.17	61.98	1	0	剥片
SOS－9	S411	SWHD	SWHD	WDTN	7.68	104.49	1	0	剥片
SOS－10	S562	SWHD	SWHD	SBIY	2.35	83.55	1	0	剥片
SOS－11	S880	SWHD	SWHD	SBIY	2.96	109.6	1	0	剥片
SOS－12	S989	SWHD	SWHD	SBIY	8.36	47.79	1	0	剥片
SOS－13	S382	SWHD	SWHD	WDTN	8.15	131.32	1	0	剥片
SOS－14	S387	WDTY	WDTY	WDHY	10.35	30.47	1	0	剥片
SOS－15	S445	SWHD	SWHD	SBIY	6.13	90.58	1	0	剥片
SOS－16	S702	SWHD	SWHD	WDTN	21.03	107.47	1	0	剥片
SOS－17	S786	SWHD	SWHD	SBIY	1.91	76.05	1	0	剥片
SOS－18	S427	SWHD	SWHD	WDTN	7.77	109.1	1	0	剥片
SOS－19	S536	SWHD	SWHD	SBIY	14.16	50.88	1	0	剥片
SOS－20	H－4	KZOB	KZOB	KZSN	8.27	60.83	1	0	剥片
SOS－21	S488	SWHD	SWHD	SBIY	5.43	105.21	1	0	石鏃片
SOS－22	J－6	KZOB	KZOB	KZSN	9.34	52.84	1	0	剥片
SOS－23	S444	SWHD	SWHD	SBIY	2.09	93.41	1	0	剥片
SOS－24	S694	TSTY	TSTY	TUTI	11.43	40.61	1	0	剥片
SOS－25	S983	SWHD	SWHD	SBIY	2.77	92.29	1	0	剥片
SOS－26	J－4	WDTY	WDTY	WDHY	7.31	19.98	0.9995	0.00005	剥片
SOS－27	I－7	SWHD	SWHD	SBIY	8.39	114.34	1	0	剥片
SOS－28	S676	TSTY	TSTY	TSHG	4.52	36.75	1	0	剥片
SOS－29	H－8	SWHD	SWHD	SBIY	10.76	147.77	1	0	剥片
SOS－30	表採	HNKJ	HNKJ	HNKI	2.82	45.64	1	0	剥片

上記表において、判別図判別群の列は判別図法による結果を示す。判別分析の候補1、候補2の列は判別分析による推定産地の第1候補、第2候補を示す。また、距離1、距離2は個々の試料と候補1、候補2の産地間のマハラノビス距離を、確率1、確率2個々の試料が候補1候補2産地に属する確率を示す。本遺跡では判別図法と判別分析の結果は一致している。

図版1　調査前風景・1号敷石住居跡

調査前風景

表土剝ぎ

遺跡近景

1号敷石住居上層礫群検出状況

1号敷石住居内炭化材出土状況

1号敷石住居内遺物出土状況

1号敷石住居上層礫群検出状況

1号敷石住居内遺物出土状況

1号敷石住居一土層断面

1号敷石住居調査風景

1号敷石住居上層礫群と環礫方形配石

1号敷石住居一土層断面

1号敷石住居検出状況1

1号敷石住居上層礫群と環礫方形配石

1号敷石住居環礫方形配石東側

1号敷石住居上層礫群　南東から

1号敷石住居上層礫群　北東から

図版２　１号敷石住居跡

１号敷石住居石棒検出状況

１号敷石住居炉検出状況

１号敷石住居奥壁(？)と敷石

１号敷石住居遺物検出状況

１号敷石住居礫群下調査状況

１号敷石住居礫群下土層断面

１号敷石住居礫群下土層断面

１号敷石住居礫群下調査状況

１号敷石住居検出状況２

１号敷石住居検出状況２　南東から

環礫方形配石東遺物出土状況

環礫方形配石南遺物検出状況

環礫方形配石南遺物出土状況

敷石と環礫方形配石

１号敷石住居炉完掘状況

環礫方形配石西側

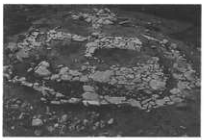
環礫方形配石南側

環礫方形配石磨斧出土状況

図版３　１号敷石住居跡・住居跡下焼土焼土遺構１・２

環礫方形配石完掘状況

１号敷石住居調査風景


１号敷石住居検出状況３

環礫方形配石南完掘状況

１号敷石住居炉跡周辺の焼土　北から

１号敷石住居炉跡周辺の焼土　南西から

住居下焼土遺構１　遺物出土状況

住居下焼土遺構１　遺物出土状況

住居下焼土遺構２　遺物出土状況

住居下焼土遺構２　遺物出土状況

住居下焼土遺構２　遺物出土状況

住居下焼土遺構２　遺物焼土状況

住居下焼土遺構完掘状況　北西から

住居下焼土遺構調査風景

住居下焼土遺構２　完掘状況

住居下焼土遺構完掘状況　北から

１号敷石住居調査風景

図版4　焼土遺構

1号焼土

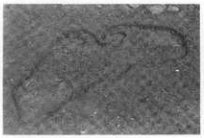
2号焼土

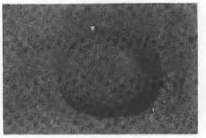
3号焼土

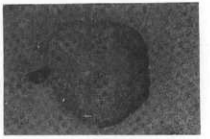
4号焼土

焼土遺構調査風景

6号焼土


7号焼土


8号焼土


9号焼土

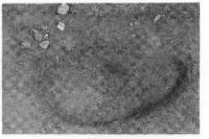
10号焼土

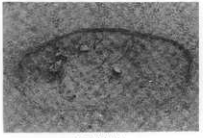
11号焼土

焼土遺構調査風景

13号焼土

14号焼土


15号焼土


16号焼土

17号焼土－1

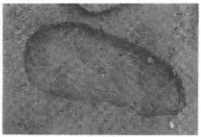
17号焼土－2

図版5　焼土遺構・土坑

19・22号焼土

20号焼土

21号焼土


27号焼土

25号焼土2

25号焼土1

29号焼土

30号焼土

25号焼土3

31号焼土

32号焼土

1・29号土坑

34号焼土

35号焼土

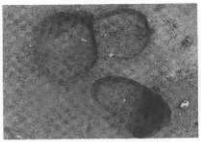
8号土坑

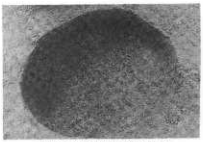
3～5号土坑

6号土坑

図版6　土坑・配石遺構

9号土坑炭化棒検出状況


10・11号土坑、28号焼土

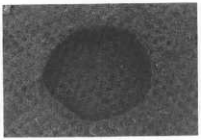

12号土坑炭化棒検出状況

15号土坑

17・35号土坑

19号土坑

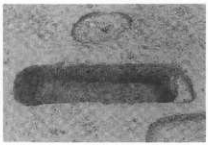
20～22号土坑


24号土坑

26号土坑

27号土坑

28号土坑


30号土坑

25・34号土坑

1号配石

32号土坑

31・33号土坑

36号土坑

図版7　配石遺構・集石遺構

2号配石

3号配石

4号配石

7号配石

9・10号配石

9号配石埋甕

12号配石

12号配石埋甕

9号配石石皿

13号配石 南から

13号配石 西から

14号配石上層

13号配石焼土遺構

13号配石焼土遺構内出土土器

14号配石下層

15号配石

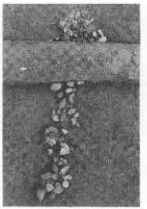
1号集石

3号集石

図版 8　集積遺構、土器集中区 調査風景

4 号集石

5 号集石


6 号集石

7 号集石

8 号集石

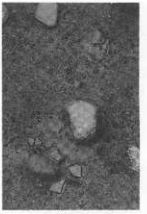
9 号集石

10号集石

平安時代調査面全景

H－7 土器集中区

H－6 土器集中区 土器A


H－6 土器集中区 土器A・B

遺跡遠景

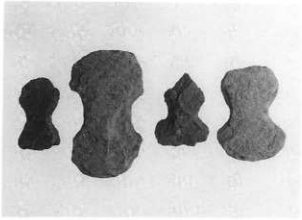
H－6 土器集中区 土器D

第 5 トレンチ掘削状況

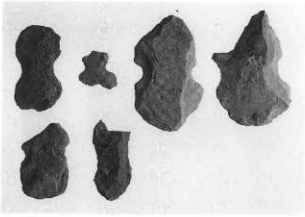
調査区西壁土層断面

第 1 トレンチ掘削状況

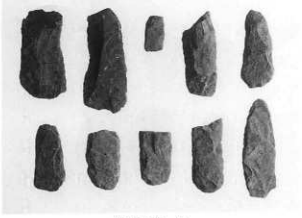
図版9　出土遺物（石器）



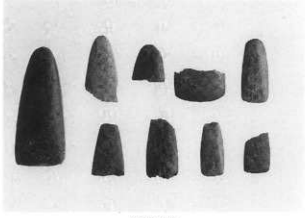
打製石斧－1



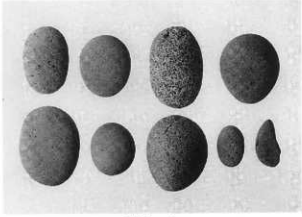
打製石斧－



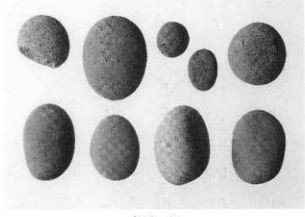
打製石斧－3



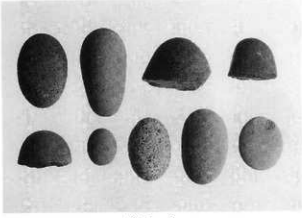
磨製石斧



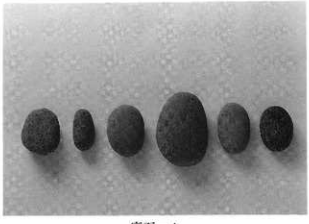
磨石－1



磨石－2

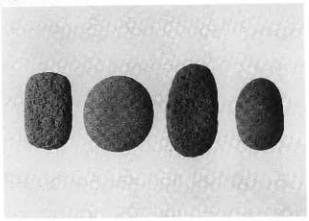


磨石－3

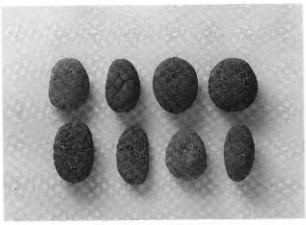


磨石－4

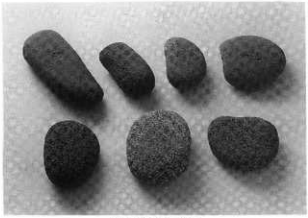
図版10　出土遺物（石器）



磨石－5

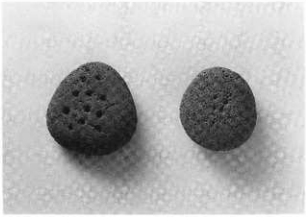


くぼみ石・敲石



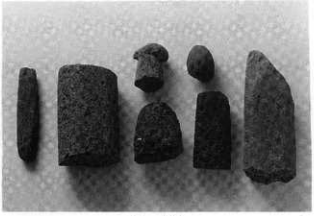
磨面のある台石

石　錘

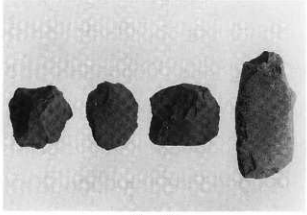


多孔石

石　皿

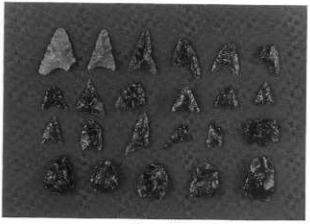


石　棒

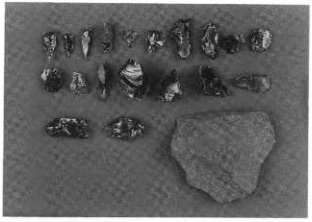


礫　器

図版11　出土遺物（石器・縄文土器）



石　鏃



石錐・楔形石器・石核など

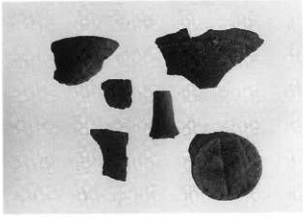
1住－1

1住－27

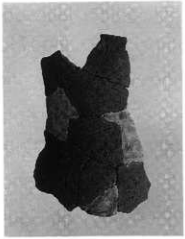
1住－6

1住－3

1住－13



1住・環礫内出土土器



1住－9

図版12　出土遺物（縄文土器・土偶）

9配－1

9配－3

9配－12

9配－13

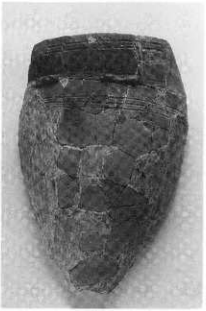
12配－1

13配－2

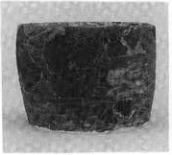
H－7集中－3

H－7集中－4

H－7集中－2


遺構外出土3－9

H－7集中－1


遺構外出土4－4

遺構外出土3－8

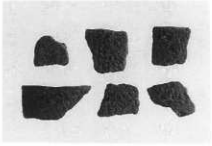
図版13　出土遺物（縄文土器）

遺構外出土－1

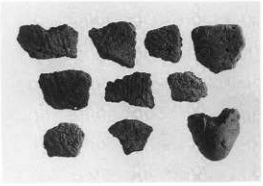
遺構外出土－2

遺構外出土－3

遺構外出土－4



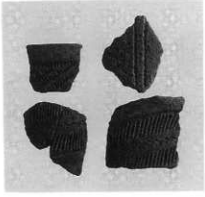
第1群



第2群

第3群

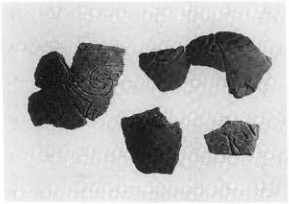
第4群



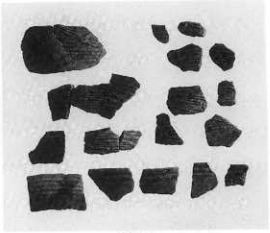
第5群

第6群

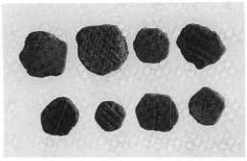
図版14　出土遺物（縄文土器・土製品・弥生土器・土師器）



第7群



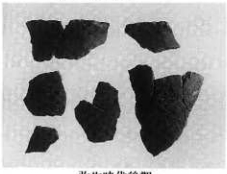
第8群



土製円盤

弥生時代中期

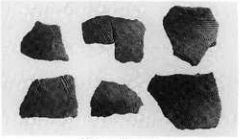
ミニチュア土器



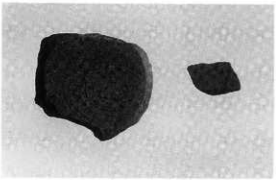
弥生時代後期

土製蓋

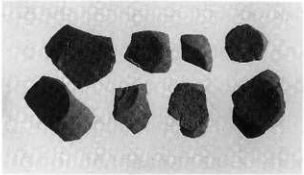
遺構外出土10—32



弥生時代後期



土師器坏 墨書



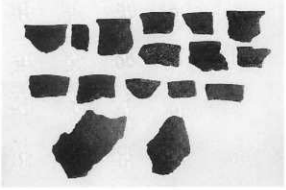
土師器坏

図版15　出土遺物（土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄製品・古銭）

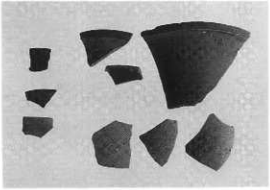
第64図—11

第64図—12

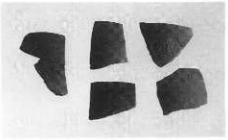
第65図—30



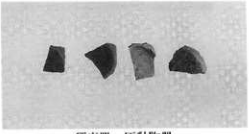
土師器 甕



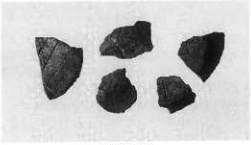
須恵器・灰釉陶器



土師器 坏

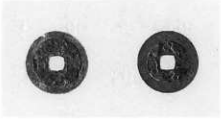


須恵器・灰釉陶器



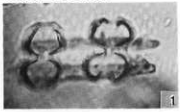
土師器 甕

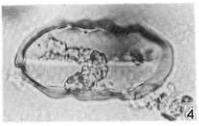
鉄製品

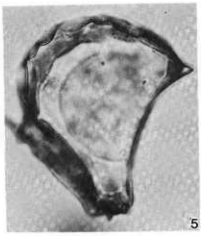


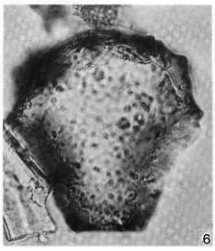
古 銭

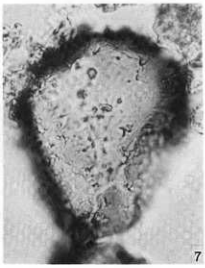
図版16　植物珪酸体







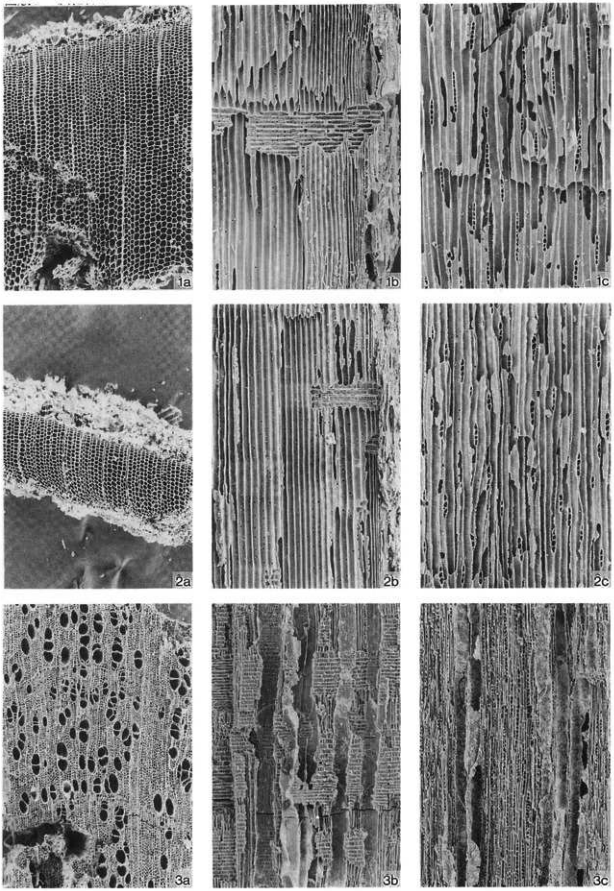




50μm

1．イネ属短細胞列（1号焼土遺構；4）
2．タケ亜科短細胞珪酸体（10号焼土遺構；セクションB　5層）
3．ススキ属短細胞珪酸体（1号敷石住居跡下部焼土1；覆土中出土器内　中央部　下部）
4．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（1号敷石住居跡下部焼土2　；覆土中出土土器内　中央部　下部）
5．イネ属機動細胞珪酸体（1号焼土遺構；4）
6．タケ亜科機動細胞珪酸体（10号焼土遺構；セクションB　5層）
7．ウシクサ属機動細胞珪酸体（1号敷石住居跡下部焼土1　；覆土中出土土器内　中央部　下部）

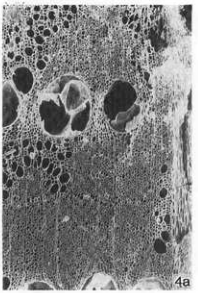
図版17　炭化材(1)

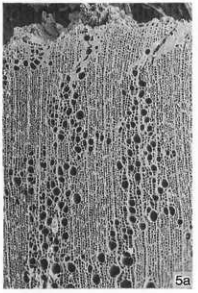


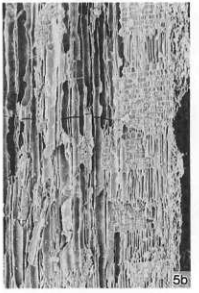
1．モミ属(25号焼土遺構；C－2)
2．カヤ(10号焼土遺構；C－4)
3．クマシデ属イヌシデ節(1号敷石住居跡下部焼土1 ：セクション 出土炭化材)
　a:木目，b:柾目，c:板目

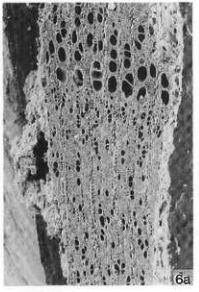
200μm：a
200μm：b，c

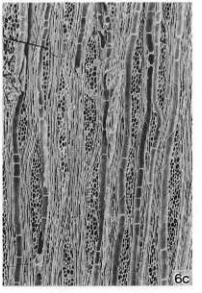
図版18　炭化材(2)





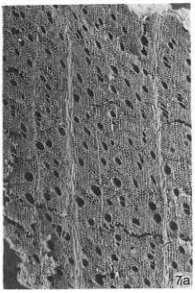


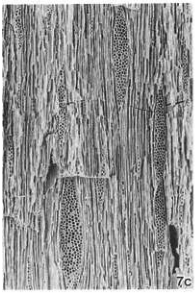


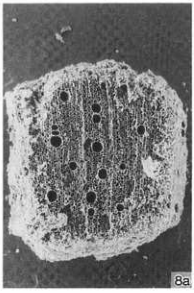


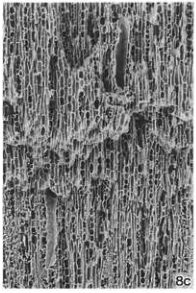
4．コナラ属コナラ亜属コナラ節(25号焼土遺構；C－17)
5．クリ(1号敷石住居跡下部焼土2 ；セクション　9層炭化材)
6．モモ(10号焼土遺構；C－2)
　a:木目，b:柾目，c:板目

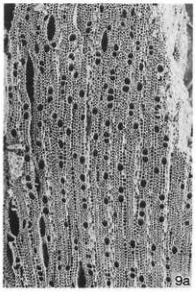
200μm：a
200μm：b，c

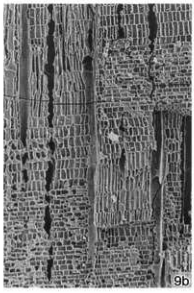












7．カエデ属(25号焼土遺構；C－3)
8．カキノキ属(25号焼土遺構；C－11)
9．ムラサキシキブ属(10号焼土遺構；C－1)
　a:木目，b:柾目，c:板目

200μm：a
200μm：b，c

報告書抄録

ふりがな	しおせしたっぱらいせき
書名	塩瀬下原遺跡（第4次調査）
副題	桂川流域下水道終末処理場建設に伴う発掘調査
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第191集
著者名	主任文化財主事　笠原みゆき　他
発行者	山梨県教育委員会・山梨県土木部
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話	〒400-1508　山梨県東八代郡中道町下曽根923　055-266-3016
発行年月日	2001(平成13)年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡 番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
しおせしたっぱらいせき 塩瀬下原遺跡	やまなしけんおおつきし 山梨県大月市 やながのまちしおせ 梁川町塩瀬 955外	19206		139° 3′ 5″	35° 35′ 53″	1998(平成10)年 6月8日～ 1999(平成11)年 3月17日	3,000m² (1,500m² を2面)	桂川流域下水道終末処理場建設工事に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
塩瀬下原遺跡	集落跡	縄文時代早期から晩期、弥生時代中期から後期、平安時代、平安時代以降	縄文時代後期の十字型の敷石をもつ柄鏡形敷石住居跡・配石遺構 平安時代の焼土遺構、平安時代遺構の焼土遺構	縄文時代後期の土器・石器、平安時代の土師器・須恵器・古銭・鉄製品 渥美釜大甕	関東最大級の敷石住居跡と全国的にも稀な十字型の敷石を検出

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第191集

塩瀬下原遺跡（第4次調査）

—桂川流域下水道終末処理場建設に伴う発掘調査—

印刷日　平成13（2001）年3月30日
発行日　平成13（2001）年3月30日
編集　山梨県埋蔵文化財センター
発行　山梨県教育委員会・山梨県土木部
印刷　株式会社　内田印刷所
山梨県甲府市中央2-10-18　TEL 055-233-0188